

魔獣創造って最強だよね

超高校級の切望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔獣創造を手にした主人公。好きな魔獣を産めるって、どう考えてもチートだと思っただ

目次

| | |
|-----------|-----|
| 魔獣創造者の娘 | 1 |
| 今代の赤龍帝 | 10 |
| 駒王の悪魔 | 15 |
| 支取蒼那 | 20 |
| 修行 | 24 |
| レーティングゲーム | 31 |
| 使い魔の森 | 41 |
| 教会の使者現る | 45 |
| エクスカリバー | 50 |
| はぐれ聖剣使い | 55 |
| コカビエル | 60 |
| ペスト | 65 |
| 教会の追放者 | 69 |
| 堕天使総督 | 73 |
| セラフオール | 80 |
| 三大勢力会談 | 85 |
| 禍の団 | 92 |
| 会談終了 | 98 |
| 友達との晩餐会 | 104 |
| 獣の王 in 冥界 | 108 |
| 若手悪魔 | 114 |
| 仙術 | 120 |
| はぐれ悪魔黒歌 | 127 |
| オーデイン | 133 |

| | |
|--------------|-----|
| 英雄達の晩餐会 | 141 |
| 体育祭に向けて | 146 |
| 再会 | 148 |
| シヴァ | 151 |
| レイヴェル・フェニックス | 156 |
| 神話の成り立ち | 161 |
| 神の復活 | 165 |
| 愛の魔王 | 170 |
| 駒王の日常 | 178 |
| 北欧の主神 | 184 |
| コスプレ巫女 | 188 |
| 魔獣創造者達 | 192 |
| そうだ、京都に行こう | 196 |
| 来たぜ京都 | 202 |
| 二匹の狐 | 207 |
| 九尾の姫 | 212 |
| 英雄派 | 221 |
| 曹操 | 227 |
| 救出作戦 | 233 |
| 謎の影使い | 239 |
| 帝の血筋 | 244 |
| 帝釈天 | 253 |

魔獣創造者の娘

その子供はペットが欲しかった。テレビで見たのだ。犬と楽しそうに戯れる人間を。そしたら、影から犬が出てきた。その光景を見ていた両親に、悪魔の子！と頭を灰皿で殴られ家を燃やされた。

だが犬が助けてくれた。

その子供は頭を叩かれた衝撃で思い出す。嘗て多くの神を生み出したことを。魔獣を生み出したことを。しかしそれは自分の記憶ではない。

自分の中に封印された女神達の記憶だ。

メソポタミア神話の祖神、ティアマト。神器の制作者である神に偽物を造られた哀れな女神だ。

次にイザナミ。日本神話における死の概念を作り一日に1000の命を奪う力を持った女神。

最後にリリス。神が造った最初の女。完全なる女。完璧なる創造物。魂だけ抜き取られ肉体は夫にグチャグチャにされたらしい。

少年は尋ねる。お前達の力を貸してくれないか、と。女神と女悪魔は応える。好きにすればいい、どうせお前に逆らえない、と。

少年は尋ねる。逆らえない、というのは、従いたくないという事か、と。

三柱の女達は顔を見合わせる。どうなの？さあ、私別にやりたいことないし。あ、私も……私は聖書の奴等も今の悪魔共も苦しんでる姿がみたい。イサナギの顔面思い切り殴りたいなあ、などなど。

少年は尋ねる。あなた達の動物の力を作る能力を借りれば、器を現世に作れないだろうか、と。

「……………懐かしい夢を見たなあ」

ふあ、とあくびして起き上がる王神帝^{みかど}。隣で一糸纏わぬ美女の黒髪を撫でる。

「ミカド……………起きました？」

「んー、起きた起きた。あっちも起きた。早速朝の一回戦と行こうぜ」
「ふふ。仕方ない人ですね……寺子屋はどうするのです?」
「すぐにすませるって」

「そうか、ではすぐにすむように気持ち良くしてあげます」

と、黒髪の美女が妖艶な笑みを浮かべた瞬間、扉が勢いよく開く。

「お父様く、イザナミお母様く、朝っですつよく!」

元気良く扉を開けて入ってきたのは金髪の美少女。今まさに重なり合おうとしていた2人をみてあら、と固まる。

「お邪魔でした?ま、それよりみてくださいくださいお父様!」

帝と一歳ほどしか違わない見た目ながら彼を父と呼ぶのは王神命。^{みこと}彼女は彼の通う学校の女子制服を見せるようにクルリと回る。

「えへへ、可愛いですか?」

「可愛い可愛い。流石俺の娘。でも学校では父と呼ぶなよ」

「はーい!私もこれで花の女子高生かあ……えへへ。あ、ティアマト母さんがごはんできたって」

「A A——」

命の言葉と同時にひよっこり顔を除かせる海のような鮮やかな青い髪をした女が顔を除かせ、ジト目でイザナミを睨んでいた。

「きよう、は……もう、わたしの……ばん」

「朝ぐらい良いではありませんか。貴方も明日、朝すればいいでしょう?」

「あしたは、リリース、のばん……だから」

「お母様達もお父様も好きですね。そんなに気持ちいいの?」

「うん」

「……………へえ」

母2人の言葉にジツ、と父と呼んだ少年を見つめる命。

「……………命もやるか?」

「じゃあ明後日……けど、お父様性欲強いですね。子供なんて簡単に作れるのに生殖本能とか残ってるんですか?」

「バカにしてんのかてめえ。まあ、これはあれだ……俺の妻の一人、完全なる女リリースだし」

「あー、あの人がそもそも好き者ですしね。お父様ってそういう人が好みなんですか？他にも傾国の美女が愛人だったりしますからね」

ヘラヘラと楽しそうに笑う命。父も母も楽しそうに笑う。平和な光景だ。多分。

「お隣ですね、よろしくお願いしますね」

「……はい」

綺麗な子だな、と塔城小猫は隣の席になった少女を見つめる。細い金の髪はとても艶やかで、大きな瞳は銀色。肌は白く白人のようだが日本人らしい。ハーフ？

胸は……仲間だ。ニコニコ笑顔を浮かべて、人懐っこい印象を受ける。

実際彼女はあつという間に人気者になった。何故か自分も。目立つようなことはしてないはずだが。

「小猫ちゃんは可愛いですし。私の妹程じゃないですけど」

「……妹がいるんですか？」

「いますよ。素直じゃないけど可愛い子でしてね。双子なので同じ学年ですよ、会ってみますか？」

つまり彼女は姉と言うことか。そう思うと、少し見る目が変わる。その視線に気づいたのかコテリと首を傾げる命。

「妹さんは、大好きなんですか？」

「大好きです。妹を好きじゃない姉なんてこの世にはいませんからね」

「……………」

「ふんふん♪やっぱり高校生活は楽しいね。友達も出来たし、舞はどうだった？」

「問題ない」

と、命の言葉に黒髪ショートヘアの少女が応える。ニコニコ笑顔の命と異なり無表情だ。

休日、姉妹水入らずで買い物に出かけていた。荷物持ちは舞。命はあれが欲しいあれ気になると次々買っているがその全てを舞は疲れ様子もなく運んでいる。

「……………ん？」

「どーしたの舞」

「……………人払いだ。紛れ込んだ」

「えー、人払いく？やだなく、何か変な事件に巻き込まれちゃった？勘弁して欲しいな」

と、ぶつぶつ文句を言う命は公園から出ようとして、噴水近くで男が女に腹を貫かれていた。

「大変だ！すぐに手術しなきゃ！」

「え？な、誰？！何者！」

女が叫ぶが命は気にせず男の服を脱がせると片手を押し当てる。その片手が溶け、男の腹と融合した。

「止血はこれでオツケー。ちよつと待っていてくださいね。今から内臓、神経系、血管、リンパ、解析して作るのよ」

「き、君は……………一年の……………」

「はいはいそうですよ。意識はしっかりしてますね……………何か言いたいことはありますか？」

「おっぱい、もみた……………あ、ない……………」

「……………舞、おっぱいを……………」

「断る」

力なく持ち上げ、何かを揉むように動かされる手。その顔は悲痛を彩り命は自分より胸のある妹にキリつとした顔を向ける。

「死の間際に母性を求めているのよ！可哀想だと思わない!？」

「思わない」

「貴様等、さつきから私を無視するな！」

と、女が叫ぶ。黒い翼を広げ、光の槍を生み出し投げてきた。舞はそれに対して腕を振るう。腕から飛び出した鎌が槍を砕いた。

「……………な!？」

「舞く、殺しちや駄目よ。生きてるって、それだけで素晴らしいこと

「なんだから」

「殺さず生け捕り……容易い。任せろ」

「——っ！なめるな！私は、至高の墮天使になる女だぞ！」

「至高？その言葉は、母さん達と父さんにのみ相応しい」

「……相変わらずお父様達大好きだなく舞は。さて、移植移植
……あれ、この人……」

腕から内蔵や血管、糸のような神経をズルリと出して五指全てが鋭い刃物に変形した命は不意に手をピタリと止める。

「んー……これは、事後承諾だけどそもそもこの人の力だし、こつちの方が今後役立ちそうだなあ。うん、こつちにしくよお」

「………ただいま」

「お父様、ただいま帰りました。今日は私の番でしたけど明日の舞と入れ替えて良いですか」

帝は帰ってきた娘達の声を聞きテレビから視線をはずす。

「良いけど、なんだそれ……」

「墮天使ですよ？みたことありませんでしたっけ？」

「あるけど何で持って帰ってきた」

「手術します。少し大変で材料も心許ないけど、記憶を読んでみたら放っておけなくて！」

「そうか。材料なら今日ぶち殺してきた墮天使三匹お前のプレゼントとして冷蔵庫に入れたから好きに使え」

「あ、また殺したんですね？もう、お父様ったら私に全ての命に奉仕する、なんて本能を植え付けておきながら私の近くで人を殺すなんて……嫌いになっちゃいますよ」

ふう、と頬を膨らませる娘をみてすまんすまんと肩をすくめる帝。

「私に嫌われたら悲しいですか？」

「ああ、悲しいな」

「なら仕方ないから許して上げますね」

そういつてポス、と膝の上に乗ってきた命の頭を撫でてやると、気

持ちよさそうに目を細めた。やる気がでたぞー！と万歳した命は気絶した墮天使の足を掴んで運んでいった。

墮天使レイナーレ。下級墮天使で力も弱く、そのくせ自分より弱い者は見下す典型的な小物は墮天使総督であるアザゼルに思いを寄せていた。

しかし自分には何の力もない。だから、力を求めた。それは見下している人間にこそ宿る力。神器と呼ばれる力だ。教会から追放された神器持ちの少女を偽の情報で呼び出し神器を奪い、アザゼルが危険視しているリストにあった男を殺して、誉められるつもりだった。しかし、男を殺した後妙な連中が現れ――

「――う」

「あ、おきましたか〜?」

「――!?!」

目をあけると妙な連中の一人だった少女がニコニコ笑顔を向けていた。とつさに光の槍を生み出し投げつける。

「うわっと――」

「――え?」

それはあつさり弾かれた。しかしレイナーレが驚いたのは、自分が放った槍の大きさだ。

「私、今……これだけの力を……?」

「ああ、はい。改造しましたから」

「……………改造?」

「墮天使……というか人外には魔力や光力、神力などといった特別なエネルギーを発生させる器官があるんですね。それは大きさは変わりませんが筋肉と同じで酷使すれば鍛えられますが、限界はあります。貴方のそれはもう成長限界が来ていたので、これ以上強くなることは不可能でした」

「――ッ!!」

どれだけ鍛えても強くなれなかった過去を思い出し苦虫を噛み潰

したような顔をするレイナーレに、命は気にせず話を続ける。

「ですが発想の逆転です。器官が成長しないなら、器官を植え付ければ良い！」

「……………器官を？」

「はい。ちようどお父様が死体を三つ手に入れたので、その死体から取り出して貴方に移植しました」

「死体……………二つ？それ、まさか——!?」

死体とその数を聞き顔を青くするレイナーレだったが、続く言葉を聞いて固まった。

「残念ながら私は死者を生き返らせる事は出来ませんからね。だから、愛しい人のために頑張る貴方の為に使いました」

「——」

そうだ、アザゼルの為、強くなりたかった。自分は、強くなれた。それに、他の三人を殺したのは自分ではない。

「じゃあ拒絶反応押さえる処置はしたけど、定期的に検診にきてくださいね」

強くなった。確かに強くなったが、まだ足りない。幹部のメスブタは、アザゼルと仲のいいクソ女はもつと強い。

あの娘は成長限界があると言っていた。自分が集めた奴らも、自分と同様に伸び悩んでいた連中ばかりだ。おそらくここから成長することは無い。ならば——

「……………え、器官をさらに植え付けて欲しい？ま、まあ良いですけど器官の培養って時間かかるんですね。今手持ちないし」

「死体ならあるわ」

「あ、そうですね……………あー、こりやもう蘇生は無理ですね。頭ないし……………大規模な殺し合いでもあったんですか？」

「良いから移植しなさい」

「はい……それじゃあこちらへどうぞ」

力が上がった。それでも中級だ。しかし、力が上がった自分に秘密を聞こうとする者は数多くいる。そいつ等を誘い、殺して、奪って、移植して、腸の一部や胃の一部、肺の片方などを捨てて体に空白を作り埋めていく。

どんどん強くなっていく。これなら――

「たく何が目的だったか同族をこんなに殺しやがって……」

「アザゼル、何も貴方が動く必要は……」

「何言ってるんだ。どうやったか知らねーがこの数日で上級に匹敵するようになったんだぞ、成長速度が異常なら一番強い奴をさっさとぶつけるのが一番だろ」

「最近あの人こないな。もう満足したのかな？」

命はグチャグチャと墮天使の死体を弄くりながら首を傾げる。

「それはもう何の力もないんじゃないのか？」

「そんなこと無いわよ。器官は取り出したけど力を伝える神経のようなものがあってね、それを組み合わせることで器官の再現を出来るの」

「それ以外もとっているようだが？」

「取り敢えず心臓と胃と腸、肝臓、肺などなど最低限生命維持に必要な程度にはね。手足は別にいららないかな。羽もつけておこつと――」

そして、一時間後。

「お父様、みてください完成しましたよ！」

「おお、何だそれ」

命が自慢げに見せてきたのはバランスボールほどの球体。墮天使の翼が生えており、継ぎ接ぎだらけの皮膚の各所に眼球が存在する。

「本物の光力伝達器官を集めて造った人工光力発生器官に脳とかを与えて造った魔獣ですよ。お父様たちみたいに0から作るのは無理で

すけど、お父様の役に立ちたくて」

「そうか。命はいい子だな」

「脳はなかったんじゃないのか?」

「パパ、ママ飛んでいる球体生物をみながら尋ねる舞に、命はああ、と手を打つ。」

「ほらこの数日で何度もきてた堕天使さん。さすがに内臓もこれ以上取れないから、脳を生命維持必要なぶんだけ残してそこに器官を埋めたのよ。体形を変えたくないって言うからね……ま、好きな男がいるなら女として体形は命だものね。で、取った脳を培養して使用したの」

「……………その堕天使、大丈夫なのか?」

「きちんと生命活動も出来るし、遺伝子を少し弄って脳が正常だった頃の動きを再現できるようにはしたわよ?」

「……………そうか」

「もう来ないって事はきつと愛するアザゼルさんと結ばれたのね。良かったわ、また一人人を幸福にしてみました……」

「ところでこっちにはその堕天使の記憶あるのか?」

「海馬は大部分切除しましたから、記憶はないと思いますよ。あったとしてもそれは並の堕天使を越える強さを持っているんですから本人も大喜びでしょう。あ、そう考えるともう一人幸せにしてるのか……………えへへ、お父様ほめてください!」

「おう、偉いぞ流石俺の娘だ」

「……………なんか泣いてるように見えるのは私だけ?」

「涙腺の調整が甘かったのかな?後で直しとこつと」

今代の赤龍帝

「マイの様子がおかしい?」

「そうなんですよ。お父様何か知りませんか?」

テレビゲームを仲良くする親子。赤甲羅をカーブで避けたミコトの言葉にミカドはふむ、と顎に手を当てる。

「恋をしたとか?」

「そんな!? だったら何でお姉ちゃんに相談してくれないんですか!」

「てめえに相談しても何の意味もねえからだろうよ」

「——辰姉^{しん}さん、今日は早いんだね」

乱暴な口調で部屋に入ってきたのは王神辰。戸籍上は帝の姉で、駒王学園の教師。こんな性格だが生徒人気は意外にも高い。

シンはソファの縁に腰を下ろすとそのまま寝転がりミカドの膝に頭を乗せる。ミコトがあっ!と叫ぶ。

「様子がおかしいのはクソマイだけじゃねえぜ、ここ最近うちのクソアマ殆どが熱に浮かされたみてえになってる。原因はあるクソガキ、ここ二、三日突然龍のオーラを出し始めた」

「龍の? あー……………」

ポン、と手を打つミコトに視線を向けるミカドとシン。ミコトが語りだした内容に、ミカドは呆れたように肩をすくめるのだった。

最近、何かおかしい。夕麻ちゃんに殺される夢を見てからだ。あの日以来、夕麻ちゃんもどつかにいつちやつたし……………。夢、だよな? 松田も元浜さまあ、ふられてやんのー!とか言って来やがるし…………。まあ、とにかく、夕麻ちゃんとのデートの翌日。女子の視線が変わった。松田と元浜と何時ものように覗き、しかし制裁を受けることはなかった。2人はボコボコにされたけど。

遠目に俺を見てキヤアキヤア言ってるのが見える。まさか、夕麻ちゃんにも告白されたわけだし、モテ期!? いや、もう一度試してみよう。今回は茶道部の更衣室。はだけた着物とかが見れるスポットだ。ぐへへ、興奮してきた……………!

と、涎を拭いていると下駄箱に手紙が入っているのに気づく。

「?……………!!」

直ぐに隠した。

『放課後、体育館裏で待っています』

間違いない、コレは、ラブレターだ! え? まさか、彼女がどつかいた翌週で第二の告白?! いやいや、俺には夕麻ちゃんが! でも、顔を出さないのは失礼だよな? 決して夕麻ちゃんより可愛いこの可能性があるからとかじゃない、うん。

放課後、体育館裏。ちよつと早く来すぎたか? あ、ここバレー部が見えるんだよな。うち基本的ブルマだし、どれどれ……………。

「あ、あの……………兵藤先輩、ですよね!」

振り返ると話したことがない、けど顔は知ってる少女がいた。一年生だ! 名前は、確か王神マイちゃん!

モジモジと顔を赤くした様子がたまらなく可愛い!

「お、おう、俺に用事、だよな……………」

「はい、あの……………最初は何だこの変態って思ってたんですけど、最近なんか良いなって思い始めて……………だから、あの……………つ、付き合ってくださいー!」

「きたー!」

「え? あの……………」

「あ、わ、悪い! 付き合ってくださいだっけ? 付き合って欲しいんだよな!」

もちろんOK! 夕麻ちゃんはどうしたって? ばっか、お前! 俺はハーレムを作る男だぞ! 彼女なんて複数同時にいても――

――死んでくれないかな?

「――ッ!」

不意に、声が聞こえる。あの夢の声だ。刺された俺はこうして生きているんだから、間違いなく夢なのだろう。でも、夕麻ちゃんは俺をあざ笑うかのように姿を消したのは事実。

この女も、そうなんじゃ……………

「ご、ごめん、俺……夕麻ちゃんって彼女が居るから——」

「体だけの関係で良いんです!」

「——!?!」

ぶっ!と鼻血が吹き出した。

か、体だけの関係で良いんです……? そんな、そんな素晴らしい日本語があつたとは!

つまり、あれだろ? 何なら、今から卒業しちゃってもいいわけだろ? デートとか、そういうのもなしで。何てこった、俺は、やはりモテ期!?! 素晴らしい!

「な、何だつたら今から——」

「すんなアホ」

「いだあ!?!」

制服のボタンを手をかけたマイちゃん。ゴクリと唾を飲もうとした瞬間蹴り飛ばされる。

「お、お前、王神帝!?!」

「きゆう……」

「たく、本当に快樂に弱い奴だなコイツ」

そう言つて気絶したマイちゃんをゲシゲシと蹴りつける。

「やめるこのクソヤロウ!」

「さつきまでバレー部覗いたり朝友人と覗きの打ち合わせした奴にクソヤロウ扱いされる日が来るなんて、人生解んねーもんだな」

そう言つて、王神は指を曲げ振るう。ザシユ! という音と共に急に力が抜け、俺はその場に倒れた。あれ、何だ、コレ……: 地面が、赤い——まるで、あの人の、リアス・グレモリー先輩の髪——

傷が回復しはじめるイツセーを見てほお、と感心するミカド。

何でもコイツの中にはあの赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアがあるらしく、十秒毎に所有者の力の倍化、倍化した力の譲渡という能力があるらしい。

そしてミコトの勝手な改造により未分化細胞を自動的に増やすことであらゆる傷をすぐさま治癒することができる体質になった。

一瞬で死なない限り死ぬことはないわけだ。そして、うちに眠るド

ラゴンの力で増やした細胞のためその細胞にはドラゴンのオーラが残され、それに当てられて女を引き寄せていたらしい。

「ま、それも今日までだな」

ミコト特製の薬を刺す。何でもドラゴンのオーラが引き寄せる者は本人の性質に大きく左右されるのだとか。つまり、女にモテたいイツセーは女を誘引する。これはそのオーラの質を変え、戦いを引き寄せる方に変える薬だ。喧嘩が売られやすくなる。もちろん誘引オーラも消えたわけではなく、例えば貞操観念の薄い、男の前で平気で裸になるような痴女なんかはあつまり惹かれるらしい。

「まあそんな女そうそういねえだろうが……ん？コイツのポケットの……」

と、ミカドがイツセーのポケットに入ってるチラシに気づいた瞬間、眩い光があたりを包む。

「貴方ね、私を呼んだ……あれ、ここ、学校？」

「……お前を呼んだのはここでぶっ倒れてる無傷の男だ」

「え？——つ!? な、なにこれ!? すごい血……え、無傷……? あら、本当……どうして……この子、調査してた墮天使の恋人よね? あ、良く見ると可愛い顔してるのね」

「可愛いと感ずるのか、それを……ああ、なるほど」

さて、帰るかどと気絶したマイを背負うミカド。なんか後ろで悪魔が駒を気絶した男に入れてるが気にしないで良いだろう。

「あ、待ちなさい! 貴方、少し聞きたいことがあるのだけど……その様子だと、此方側の関係者よね? なら、領主である私に確認もとらず領地にすんでいたことに、何か言い訳はあるのかしら? 」

「ねえよ、死ね」

「……え? 今、死ねっていった? 言ったわよね! ちよつと、こら! 待ちなさい! 」

もちろんミカドは無視して歩く。追ってこようとする(推定)痴女だったがパキヤリと何かを踏みつぶす感触があったので、見てみる。ゴキブリだった。しかも足下を数匹蠢いていた。慌てて、全てを消し去る黒いオーラを放つ。が、ゴキブリは何処からともなく現れる。全

部消してから、ミカドが居なくなっていたのに気付いた。

「ただいま。ん？お客さんか……」

家に帰ると見覚えのない靴があった。客かトリピングに向かうと、シスター服姿の少女がミコトの言葉を聞いてふんふん頷いていた。

「あ、お父様お帰りなさい。この子はアーシアちゃん。なんと私の弟子なので……」

「あ、お邪魔をしております。私、アーシア・アルジェントともうします。この度ミコトさんの言葉に感銘を受け弟子になることを決めました。一つでも多くの命が救えるように、これから頑張ります！」

「……………そうか」

ミコトの友達か。なら、学校通わせた方が良いでしょうか？そう思ったミカドはケータイの電源を入れる。

「もしもしソーナ？編入方法について聞きたいことが……」

『……………ミカドさん、此方側の関係者だったんですね』

「なんだあの痴女から聞いたか？」

『ち……………ああ、リアスですか。ええ、まあ……………彼女は憤慨してましたが、まあここは人の世界。文句を言える立場ではありませんから何も言いませんが、明日はお気をつけて……………それで、編入でしたか？少々お待ちください。今、書類を——』

駒王の悪魔

オカルト研究部。

駒王学園二大お姉さまリアス・グレモリー、姫島朱乃、駒王学園王子木場祐斗、駒王二大マスコット塔城小猫の所属する誰もが入部を夢見て、入部条件が解らず去っていく謎の多い部活動。

その部室で、くふあ、とあくびする駒王学園皇帝王神帝。

隣に座るのは彼の妹らしい駒王学園二大マスコットの一角王神舞。駒王学園白衣の天使王神命。教員にして駒王学園のごくせん王神辰は別のソファに寝転がり茶菓子を食ってる。

そして、彼等の背後にはオロオロしているシスター服姿の美少女。対面するのは上記のオカルト研究部員と、新入部員駒王学園三大変態の二柱兵藤一誠。女に囲まれた帝を忌々しそうに睨んでいる。

仲介役の駒王学園生徒会会長支取蒼那と副会長真羅椿姫、何故かついてきたがった匙元士郎。

「それで、私の領地に侵入したことに對して何か申し開きはあるかしら？」

「この紅茶まずいな。椿姫、何時もの抹茶頼む……ん？で、何だっけ？」

リアスと朱乃の眉根がピクピク痙攣する。椿姫ははあ、とため息を吐いて抹茶を入れる。ちなみに抹茶は紅茶や緑茶より健康にいいのだ。長生きの秘訣である。

「領地に勝手に侵入した事よ……ここは悪魔の領地、何処の勢力か知らないけど、勝手なことが許されると思って？」

「えー、逆逆。俺が住んでる世界の、俺の住んでる町に、後からお前等が来たんだよ。自分の領地って、お前この辺りの土地買ったの？ちなみに俺の家は土地ごと買った私有地だ」

なんなら書類持ってきてやろうか？と椿姫が出した抹茶を啜るミカドに、リアス達はますます不機嫌そうなオーラを醸し出す。

「裏の世界について知ってるなら、暗黙の了解というものがあるでしょう!?!ここにすむ以上、その私有地だって私達の借り物に——

！」

「そつちこそ日本神話からの借り物だろうが。何言ってるんだ」

あくまで領地経営の練習であつて実際の領地ではない。流石に、日本神話もそこまで許していない。日本の神々は割とドライだ。祈らぬ者にも祈る者にも手を差し伸べてやるのは稀。だからこそ各地に妖怪伝説が生まれる。そんな日本神話でも、流石に悪魔達がここは自分達の領地ですー！借りたんじゃありませんー！貰ったんですー！なんて言ったら間違いなくブチギレルだろう。

「ここは——！」

「リアス、それ以上は間違いなく外交問題になります。日本の神々は、小石や窓にすら宿るのですから、言葉にお気をつけて……」

リアスの言葉を疲れたように止めるソーナはそのままミカドに向き直る。

「今回の件において、私達悪魔側から何か賠償を求めることはしません」

「ちよつと——！」

「ですので個人的なお願いです。おそらくリアスも同じ目的、しかし上に立ちたくってグチグチ言ってたのでしよう。私は単刀直入に、眷属になつてくれませんか？」

「会長！こんな奴いなくても、俺が——！」

と、匙が立ち上がり叫んだがソーナに睨まれ大人しく座る。

「ちよつとソーナ、抜け駆けはするいわよ？でも、そうね、ミカドと呼ばせて貰うわね……ミカド、私の眷属になりなさい」

「死ぬ。あ、すまん間違えた。惨たらしく野垂れ死ぬ」

「おい、お前！」

シツシツと犬でも払うかのように手を動かすミカドにイツセーが叫ぶ。

「部長は俺を救ってくれたんだ！侮辱はゆるさねえぞ！」

「救った？ま、いいか………とりあえず俺は眷属にやらねーよ。俺、どっかに縛られんのはごめんだね」

「それがかまいません。ですが、個人的なお願いなどはしてもかまひ

「ませんか？兵藤君に治癒能力を与えたのはミコトさんでしたよね」

「ま、ソーナからのお願いなら聞いてやるよ。そっちの赤豚は頭下げんなら聞く気になるかもな」

ケラケラと露骨な差別をするミカドにムツ、と顔をしかめるリアス。匙もまさか、と言いたげに目を見開く。

「お、お前まさか、会長狙ってんのか!？」

「いや、別に狙うも何も、ソーナはセフレだし、頼み事ぐらい聞いてやるけど」

「……………へ?」

「ん?」

セフレ。セックスフレンドの略。ようするに

「だから、俺とソーナは体だけの関係だって。別に付き合っではないが」

「はああ!?う、嘘ついてんじゃねーよ!そんなわけ、そんなわけないですよね!？」

「……………」

匙が継るような視線を向けるがソーナは顔を赤くして俯くだけだった。

「か、会長……………ふ、副会長からも何か——!」

「……………」

「あ、椿姫もセフレだ」

「……………はい」

匙が目を見開きカメレオンみたいな神器を顕現し、イツセーが赤い籠手を顕現させる。

「ぶっ殺してやる!」

殺気を放つ二人にマイとシンが目を細める。それをケラケラ笑うミカドが制する。

「何がセフレだ!女の子を性欲発散の道具みてえに思いやがって、お前みたいな奴、俺がぶっ飛ばしてやる!」

「……………お前、よくハゲやメガネとハーレムつくろうぜと公言してるけど、どんなハーレムつくりたいんだ?」

「ん？そりやもちろん、大きいおっぱい小さいおっぱい柔らかいおっぱいふんわりおっぱい堪能するために決まってんだろ！俺は、上級悪魔になってハーレムを作るんだ！……って、話を逸らすんじゃないか！」

「会長とできちゃった結婚するのは俺だ！」

「………何で俺、こいつ等に責められなきゃならねえんだろ」

「くたばれクズヤロウ！」

「………はあ」

ため息をはいて、迫ってきたカメレオンの舌を掴み引き寄せ胸を貫く。ゴボリと血を吐く匙から腕を引き抜きイツセーの頭を蹴り飛ばす。直ぐに千切れた首から下が再生を始め、下の体が倒れる。

「アーシアさん、術式準備！兵藤さんの体から心臓と肺を取り出して移植します！どっちもドラゴン系だから馴染むはずです！」

「は、はいー」

ミコトが即座に指をメスに変化させ胸を切り開き肋を落とす。アーシアは渡された刃物でイツセーの体を解体すると内臓を取り出しミコトに渡す。ミコトはあつと言う間に縫いつけた。

「すごいです！内臓が完全に吹き飛んでいたのに、復活させるなんて。流石先生！」

「ふふ。アーシアさんも直ぐに出来るようになるわ」

キラキラと尊敬の目を向けてくるアーシアの頭をなでなでと撫でて微笑むミコト。誰もが顔を青くしている。

「待ちなさい、私の可愛い眷属に手を出して、ただですむと思っっているの!?!」

「「……………」」

朱乃がバチバチと雷を迸らせ木場が剣を構え小猫が拳を構える。まず最初に小猫の喉がマイに切り裂かれる。朱乃が雷撃、リアスが滅びの力、木場が魔剣をマイに向かって放ち、シンが巨大化した片腕をなぎ全てを吹き飛ばす。

「もう！また殺そうとして！」

ミコトがせつせと首を縫う。リアス達はアーシアが癒す。どうや

ら彼女の神器は悪魔も癒せるらしい。教会から追放されたと聞いたが、その力故か。

「すいません、匙とリアス達には私から言っておきますので」

「任せるぜ。期待できるのは、どうもお前等だけみたいだからな」

期待されていると聞いて顔をほころばせるソーナと椿姫。ミカドは二人の頭を撫でるとオカルト研究部部室から去っていった。

支取蒼那

王神帝はその容姿も相まって、直ぐに学園の有名人になった。片目を隠した黒髪で、赤い左目のみ周囲に向けられている。

主席合格、身体能力も高く文字通り文武両道。共学になった弊害か、女子に良くない行為をしようとするやからを力で黙らせたりもした。故にその名に併せて名付けられた二つ名が駒王学園の皇帝。

あくまで眷属候補の一人に考えていた彼に会おうとしたのは、彼がチェス部の全員に勝利したと聞いた時だ。

入学から二ヶ月。彼の噂はいろいろ聞く。野良猫に芸を教えたたり、自習中教鞭をふるって抜き打ちテストの成績を上げたり、と色々している。

今回もその理由不明の行動なのだろう。しかしチェス……彼と対戦することにした。

強かったが、自分が勝った。彼は悔しそうに頭をかきむしっていた。何というか、子供っぽくて可愛いな、と思った。

次の日から度々彼とチェスを打つ。だんだんと強くなっていく彼に負けぬように此方も新たな手を考え、負けると悔しそうな彼を見て微笑ましく思う。それは椿姫も同じだったらしく、よく二人で彼について話していた。

生徒会の仕事で忙しいという手伝ってくれたりもした。必然的に、自分をもっとも親しい男子は彼になった。

彼が何時か自分に勝ったら、お祝いしようかなんて考える程度には、親しくなった。

そして、その日が来た。初めて負けて、彼が本当に楽しそうにはしゃいで、椿姫と二人で肩をすくめた。明日も勝ち越してやると言う彼に、明日は負けませんよ、と笑う。

そして放課後。校舎内の見回りをしてから彼へのプレゼントを買いに行こうと校舎の中を歩いていると気配がした。居残りではないだろう、注意しようと扉をあけると、その彼がいた。

机に座る彼の上に乗るのは女子生徒。上着ははだけて下着もずれ、

乳房がむき出し。彼女の下から除く彼の足も、ズボンもパンツも脱いでいた。

どうみても、そういう行為だ。固まる彼女と違い、ミカドと重なっていた女子生徒は慌てて服を整え逃げるように去っていった。対照的にミカドは落ち着いた様子で服を整える。

「な、あ……あ、貴方、何を!?!」

「ナニって、不純異性交遊?」

叫ぶソーナに落ち着いて服を着て香水の匂いに気づき男物の香水で上書きするミカド。あつけからんとした態度に怒りがわくより先に、まず落ち着いた。

「……………恋人、居たんですね。でも学内であのような行為は」

「ん?今の奴は別に恋人じゃねーぞ。俺も彼奴も、相手は別にいる」

「……………え?」

「別におかしな事じゃねーだろ。俺は女子に人気高いし、相手にされたってだけで精神的優位に立てる。彼氏に対しても付き合ってるだけと上にも思えるようになるしな」

「え?え?ま、待つてください……………彼女じゃない!?!なのにあんな行為を、それも相手が居るのに!?!」

「さっき言ったのと、背徳感つてのもあるだろうな……………背徳感は癖になるらしい。俺は単純に気持ちいいからやつてるだけだが……………まあ、見つかったもんは仕方ねー。良いぜ、別に退学でも。それだけクズな行為してる自覚あるからな」

そういうと横を通り過ぎる。自分に、あんな光景を見られても全く気にした様子はない。彼の中で、自分が余りに小さい存在なのだと思いき知らされる。

「……………私に、見られて、何も思わないんですか?」

「何も?強いて言うなら、これで退学かなあ、ぐらいだな……………じゃあな、お前とのチェスはなかなか楽しかったぜ」

もうこれで終わりだけだな、と言外に言われた気がした。彼との楽しかった時間を、他でもない彼に否定された気がした。生徒会の一員として、彼を裁くのが正しいのだろう。それで終わりだ。本当に、何

もかも、終わる。頭の中はグチャグチャ、混乱しきっていた。

だから、そこから先はほぼ無意識。俗に言う魔が差したという奴だ。彼を追って、その手を掴む。

「ん？ああ、ひよつとしてきつきの女について教えろって？うーん、そうなるにあの女も退学、彼氏とは漏れなく破綻になるわけか……まあ誘ってきたのは向こうだし向こうの責任か。彼奴は隣のクラスの――」

「私と……」

「ん？」

「その、中途半端で……そういうのは、気分良くないって聞いたので……私と、しませんか？」

彼の行っている行為の、共犯者に自らなった。それなら自分に訴える資格などないと考えて、冷静になれば何言つてんだと言いたくなるような考え。そうして、はじめて彼と体を重ねた。

次の日、椿姫に急用が入って約束を反故にしたことを謝罪し、自分に勝った彼へのご褒美を買いに行く。

何となくだが、椿姫も彼のことが好きなんだろうな、と思った。何でも出来るくせに負けず嫌いで子供っぽい彼をよく気にしているし。その椿姫は、昨日自分と彼がした行為を知らない。それを隠している自分と、今こうして買い物をしている。

成る程、この背徳感は、クセになる。

それから、機会を見つけては彼と体を重ねる。時には、生徒会室で。生徒の見本になるべき生徒会役員の自分が、その一団の部屋で、これにはとても興奮した。

まあ、だから椿姫に見つかったのだが……。

その椿姫も今では彼と関係を持っている。

「こうしてはぐれ悪魔を侵入させてるくせに、何が管理者なんだろうな」

ブチブチと肉を噛み千切るミカド。肉がなくなり骨だけになったら骨をボリボリと食う。

「ソーナもよ、被害がでる前に対処してやってんだから感謝しろとでも言ったらどうだ?」

「知ってたんですね。もしかして、私が知らないはぐれ悪魔もいたりしましたか?」

「いいや。お前はきちんと侵入したの全部気づいてたぜ。お前がいなけりや月に一人は死んでる。お疲れ、よく頑張ってるな」

「……そう思うなら、もう少し甘えて良いですか?」

「お好きにどうぞ」

修行

最近兵藤一誠がリアス・グレモリーと朝走っている姿を見る。自転車に乗ったりアス・グレモリーを必死で追う兵藤一誠。筋肉千切れても再生するのだから、もつと限界を超えた修行をした方がためになるだろうに、とその光景を見ながら思った。

あの会談以来どうも嫌われているようで度々オカルト研究部から睨まれる。この前は匙元士郎と階段ですれ違ったら殴りかかられたので蹴り落とした。

そんなある日、リアス・グレモリーから呼び出しを食らった。無視して帰ったら家までやってきたので居留守使ったら転移妨害結界に反応があつたので行ってみると、案の定バラバラになったリアス・グレモリーおよびグレモリー眷属達がいた。後々面倒なことになりそうなので脳細胞が死滅する前にミコトに縫い合わせさせて放置したらまた性懲りもなくピンポンピンポン鳴らしてきた。

舌打ちしたシンがバラバラに引き裂いたのでまたミコトが縫って富士の樹海に捨ててきた。まあ、転移して町に戻ってピンポンピンポン鳴らしてきたが……どうもショックで死ぬ瞬間の記憶がすっ飛ばんだらしい。

面倒くさくなつたのでリリース達に隠れてもらい対応する。

「何か用か？」

「修行よ！」

「……………は？」

「ごめん、ちよつと意味が分からない。」

話を聞くと何でもリアス・グレモリーの婚約者が来たらしい。名を、ライザー・フェニックス。結婚したくないリアス・グレモリーはこれを拒否。ライザー側も家の背負っている。婚約破棄されるなど、名に泥を塗られる行為と婚約破棄を拒否。

口論になりレーティングゲームという戦争ごっこをすることになったから、人間でありながらそこまでの強さを得た秘訣を教えろとのこと。住まわせてやってる対価を払えとの事。もう殺して放置し

ようかな、と考えていたのだが、王神家にはお人好しがいる。

「うう、それは大変ですね。家族も自分のことを解ってくれないなんて、そんな悲しいことはありません」

「解ってくれるのね!」

ミコトだ。基本的に他者に奉仕する性分の彼女は情に訴えかければとてもチョロい。

「おと——お兄様!」

「——対価払ってくれんならな」

「だからそれは、この領地に無断で住んでいたことをチャラにする事で」

「くたばれよ赤虫」

「何ですって!?!」

その後交渉の末リアス・グレモリーは一人当たり日給10万円で指導を受けることにした。自分には必要ないとリアスは辞退。彼女は過去の様々なレーティングゲームを調べるらしい。ライザー以外のレーティングゲームまで見るらしい。ここが解らない。

小猫、木場、イツセー、朱乃の面倒を見ることになった。日給40万だ。ミコトとミカド二人で日給80万。

「木場さんと兵藤さんはまだ何とも言えませんが、塔城さんと姫島先輩なら一気に強くなれますよ!」

「本当ですか?」

「どうやって——!」

ミコトの言葉に反応する朱乃と小猫。ミコトはニコニコと疑問に応える。

「姫島先輩は堕天使の力を、塔城さんは仙術を伸ばしましょう!」

「嫌です!」

「……………はい?」

二人の明確の拒絶に首をコテンと首を傾げるミコト。

「堕天使の力など使いたくありません」

「仙術なんて、あんな、誰かを傷つけるだけの力なんて……………」

「……………えーっと……………お二人はグレモリー先輩にライザーさんと結婚

してほしくないんですよね?」

「はい」

「もちろんですわ。あのような男、リアスに相応しくありません」

「それはつまり、ライザーさんと結婚するとグレモリー先輩は不幸になるんですよね?」

「ええ」

「そうでしょうね」

「……………?なのに、出せる力を出したくないんですか?」

「あんな男の力などに頼らずとも——!」

「あの力を使うなんて——」

「……………えー」

まあそう言われては雇われた身として諦めるしかないのだが……………この人達本当に主が好きなんだろうか?と疑問を持つミコト。とりあえず基礎を鍛えるしかなさそうだ。

地面に這い蹲る男子二人。すぐさまナーズ姿のアーシアが癒やしの力を飛ばして回復する。脱水症状は身体にあるべき水が失われた状況、それは抉れるような傷と違いがないと言いつつ聞かされ、イメージさせられ、神器の効果にまで影響を及ぼした。どれだけ汗をかいても、どれだけカロリーを使っても、無理矢理万全の状態に戻される。精神が幾らすり減ろうと、だ。

「ほら気張れよお前等。俺に傷一つつけりやそれで終了だぜ?」

「くっ——剣よ!」

「おらあ!」

地面から生えてくる無数の剣を踏み砕き振るわれた拳を握りつぶす。指をくんと上に向ければ地面から飛び出した鋭い鱗を持つ蛇が木場達の腹を貫く。未分化細胞の無限倍化により再生するイツセーは歯を食いしばり痛みを耐えながら迫ってきた。腹を殴れば内臓や背骨ごと吹き飛ぶ。

「——っ!もう少し、加減してもいいんじゃないの。俺達を痛めつけたいだけじゃねーだろうな!」

「あ、加減？お前等、ランボーって奴と赤虫結婚させたくねーんだよな？」

「赤虫って、部長のことか!？」

「あー——えっと、リア——あれ、何だっけ？部長さんとライダーを結婚させたくねーんだよな？」

「あたりまえだろ！」

「そもそも何でだ？あの女が結婚できるなんて、幸運じゃねーか」

「あんな奴部長にふさわしくねえ！」

そこまでボロクソ言われるとは。いったいどんなクズなのか聞いてみたら、何でもハーレムを作った男なのだとか。しかも婚約者であるリアス・グレモリーの前で眷属とイチヤイチャする。

ふむん？と首を傾げる。

「お前の将来の夢ってその男と同じく眷属を女で統一してハーレム作る事じゃなかったか？」

「うっ、うるせえ！それと部長のことは別だ！彼奴は、部長と結婚した後も他の女の子とイチヤイチャしまくるつもりなんだぞ！」

「もしお前が仮に部長さんと結婚したらランサーと違って他の女は囲まないのか?！」

「何言ってるんだ？男なら、ハーレム作ってなんぼだろ！お前等みたいに付き合わなくても女を欲望のはけ口にするような奴と一緒にすんな！」

「……………?！」

何だろこの此奴、言葉が通じているのだろうか？実はこの世界の生き物じゃないんじゃないか？と、あまりの話の噛み合わなさに戦慄する。まあ、どうでも良いかと直ぐに興味をなくしたが。

しかし、修行ね——

王神帝に、小学生時代は存在しない。その頃は兎に角鍛えていたからだ。

イメージ通りの魔物を産めると言うことは、勝つイメージが出来なければ勝てる魔物も生み出せないのだから。

まず根源の海そのものであった女神の加護で海の中で息をするこ
とだけを可能とした。

最初は水深6メートル程。その時点でも、水が重い。さらには空気
と違い動きを阻害される。水の中に慣れ、普通に動けるようになって
た。それから更に一年をかけて深海に到達した。ミシミシと骨が軋
み筋肉が潰れそうになったがゆっくりなら動ける。鮫などに襲われ
るため油断すれば直ぐに骨折した。

それでも、続ける。深海に慣れてきた。何トンもの圧力に耐えなが
ら世界一深いマリアナ海溝で鍛える日々。何をしていたかというと、
海底の山を攻撃していた。殴って、蹴って、寝て起きたら飯を食って
また繰り返す。拳から血が出て足の骨が剥き出しになっても治して
続ける。

気がつくとも飯を食う時間、眠る時間が減っていき、何時の間にか無
くなっていった。仙術を覚えたのだ。霞を食って生きていける仙人に
なったのだ。

一日中山に対して攻撃を放ち、二年ほどかけ破壊に成功する。なの
で次の山。海の底は神々すら気にしない場所。時間は幾らでもある。
二つ目の山は半年ほどで。まだまだ足りぬと繰り返し、海に入って
七年経つ頃には深海の圧力の中、一撃で山を破壊することに成功し
た。

破裂しないようにゆっくり浮上し、地上に出てその余りの動きやす
さに驚いたものだ。今でも加重魔法を常にかけている。

午後は自分達でやると岩を抱えてヒイコラヒイコラ息をするイツ
セーを見ながら、もし結婚することになったら面倒くさいことになる
んだろうな、とグチグチ言って来そうなりアス・グレモリーを想像す
る。やっぱ殺すか？でもそうするとせつかく学園生活を楽しんでい
る娘の笑顔が曇る。

ようするに結婚しなければいいのだろうか？

「もしもし、ソーナか？赤虫の婚約者の連絡先って、お前知ってる？」

イツセーは女の服を弾き飛ばす魔法を編み出し女性だらけのフェニックス眷属達に対して優位に立った。彼女達の実力はミカド以下の故に、脱がせ放題うっはうは。偉い人達が見てる前で、何をしているのだろうかこの変態は。

「というか重要な魔法練習期間中に女の服脱がす練習しかしてないのはどう言うことだ。王であるライザーには何も出来ない。」

まあ、だから、負けた。仙術を使えば不意打ちなど食らわずにすんだが食らって負けた小猫。墮天使の力を使えば二回勝つことなど余裕な相手に回復され負けた朱乃。そのせいでピンピンしていた女王にやられた木場。

イツセーもまた、残りのフェニックス眷属達にやられ、それでもリアスの元に駆けつけ、ボコボコにされた。そんな姿を見ていられず、リアスは自らの敗北を受け入れたのだ。

「これで、満足かしら？私の可愛い下僕たちを傷つけて、私を手に入れて……でも、思い上がらない事ね。貴方には、心を許したりしないわ」

「ふん、必要ないさ………リアス」

「……………」

「キッ！と睨みつけてくるリアスに肩をすくめライザーはため息を吐く。そして――」

「君との婚約を破棄させてくれ」

「そう言い放った。」

「……………」

「聞けば君は駒王の領主になって二年と少し。自らの領地で8体のはぐれ悪魔を倒したそうだな」

「ええ、それが何？」

「自分の領地に、それも大して広くもない町に8度も侵入許すような無能と婚約したとあっては俺の名に、ひいてはフェニックス家の看板に泥が付く。だからどうか、君は他の相手を見つけてくれ」

「は？な………何で私が貴方に何かつられなきゃならないの!?!納得いか

ないわ！」

後日、ライザー・フェニックスに悪意のある印象操作を行った王神帝がライザー・フェニックスとレーティングゲームをする事になった。無王——もとい魔王の権限で。

しかし、もしその時君が勝てたら叶えられる願いを叶えようなどと言わなければ彼は妻を王神命の実験材料として差し出すことにはならなかったろう。どれだけ後悔しても、過去は変えられない。吐いた唾は飲み込めない。この世界でもっとも敵に回してはいけないのは絶対的な強者ではなく、価値観が異なる精神的別種族なのだ。自分は欲望に忠実で他人に迷惑をかけまくるくせに、他人が誰かに迷惑をかけるのと正義面する精神的別種族に関わった平行世界の住人とかも酷い目を見ているから間違いない。

レーティングゲーム

「うーん、結局破棄になったのは良いんですけどね」

「なんだ、何か思うところがあるのか？」

「今回グレモリー先輩が結婚を急かされたのって悪魔の出生率が低いからでしょ？先の大戦で失った分を補充したいわけだから、きつと似たような話は増えるんだろうなあ、って」

「ま、それが今の悪魔社会なんだから仕方ないだろ？」

「でも、やっぱりかわいそうだな」

そう話し込むミコトとマイ。そこへ風呂上がりでのミカドが現れる。彼にべったりとつくのは金髪の、どこかミコトと似通った容姿の女。ミコトの元となった悪魔リリスだ。遺伝子的には親子に当たる。

「あ、お母様。そうだ、お母様の体ちよつと調べさせてくれませんか？」

「藪から棒に何だ？」

「ちよつと悪魔の妊娠のメカニズムを解明したくてです。今後悪魔がきちんと繁殖できるように」

「私の体は他の悪魔共とは異なる。はぐれ悪魔でも捕らえればいじらる」

「うーん、はぐれ悪魔って基本的に元別種族が多いんですよ……お父様、何とかありません？」

「あー……旧魔王派の連中ならとつかまえて実験しても文句言われねーだろ。純粋な悪魔の女で良いんだよな？」

「はいー」

じゃあ適当にさらってくるか、何か最近良くないことをしようとしてるみたいだし、と、その時インターホンが鳴る。扉をあけると、どこか申し訳なさそうな顔をした女悪魔がいた。オーラの質からして純正な悪魔のようだ。

悪意のある印象操作とは言ってくれる。私情にまみれた印象操作

をしたのは向こうだろうに。

参加させられた理由を思い出し面倒くさそうに欠伸をするミカド。それを咎めるような無数の視線が飛ぶ。所謂重鎮悪魔達だ。

「すまないね、このような形になってしまった。リアスはバアル家の力を持つ者。その家としては、汚名をつけられたと判断したらしい」
まあ嘘ではないのだろう。それでもミカドがライザーに渡した情報だって嘘ではない。だから、実力主義の悪魔達の前で彼を戦わせ、あんな人間の言葉に信憑性があるのか?としたい。そのために信用度の足りる相手なのか見定める、という名目なのだ。

もしライザーが負けてもそんな相手に妹はやれないと言えればいい。リアス・グレモリーに問題があって婚約が破棄された、という状況をどうにかしたいのだろう。

「やる気でねえ……」

「そうかい?なら、もし君が勝てたら私の叶えられる範囲の願い事なら全て叶えよう」

「ふーん……つっても曖昧だな。なあ、その爺さん。個人で叶えて良い願いつてどの程度だ?」

「じ、爺さん?ふん、口の利き方を知らんガキめが……個人で叶えて良いというと、まあ自分の所有する領地、眷属、経営する会社の経営権、使用人、私財、趣味で集めた持ち物を与えろとか、まあ人間は弱いからな、何か動物の一部でも頼んだらどうだ?」

「ふーん……」

「……!」

チラリとミコトを見るミカド。改めて悪魔達を見回す。

「つっても、お前本当に約束守んの?お家同士で決まっていた事にいやいや言う奴の兄貴なんだろう?」

「………な、何なら契約書でも書こうか?」

「良いね。破ると死ぬタイプの契約にしようぜ。つっても、一般人の俺と魔王の命が釣り合うとは思えねーしお前の息子の命で良いぞ……あ、そっちは次期当主だっけ?んじゃあの赤虫で……あの赤虫名前なんだっけ」

「リアス・グレモリー先輩だよ。お父さん、本当にあの人に興味ないんだね。10日間も面倒みてたんじゃないの？」

「な、何故リアスを!？」

「あん?だって、お前は魔王で息子は貴族の次期当主だろ?」

「だから、どうして命を賭けるような!」

「だって信用ならねーんだもんお前等。やってること思い出せよ」

「ゾワリ、と貴族悪魔達が魔力を溢れさせる。悪魔に対する侮辱ととったのだろう。マイが袖口から無数の刃物を生み出しシンが牙を剥き出しに唸る。一触即発の気配。と、その時――

「呼ばれてないけど私参上!」

シユタ、と両者の間に女性が落ちてきた。黒い艶やかな髪を持った和服の美女。その人物に、悪魔達は目を見開きマイはゲツ、と後ずさる。

「あ、天照大神殿!?!な、何故この様な場所に……?」

「様をつけろよクソガキ共……そして、どうもミカド、お久しぶりです」

「ああ、先月の箱根温泉旅行以来だな」

ギロリと重鎮悪魔を睨みつけた後ミカドにニコニコ微笑む女の名は天照大神。日本神話の主神である。

そんな彼女と温泉旅行に行ったらしいミカドは何者なのかという視線が飛ぶ。

「大体の話は小石の神達から聞かされてましたよ。日本神話主神天照大神の名を以て、その契約の仲介人となりましたよ」

「な――!」

「別に、私達日本神話は祀ろわぬ民となった人間を救う気はありませんけど、知り合いを助ける程度には人間くさいのですよ。なので契約の仲介人に」

「わ、わざわざ仲介などなくても」

「人に興味を失ったとは言え魂の管理はしてるから眷属を作る際には報告するように言いましたよね? 貴方はそれを了承した。ところがぎつちよん密漁は続く続く。まあ本人の意思無視して眷属にするの

に報告している暇なんてありませんからねえ」

ジトリとしたアマテラスの視線にバツが悪そうな顔で目をそらす重鎮悪魔。

「というわけで貴方達悪魔の信用度は下の下の下。彼のためにも是非契約を……あ、契約内容にライザー・フェニックスが負けた場合彼に当たらないこと、と付け足しますね」

アマテラスがそういつて契約書を取り出す。サーゼクスは、考えを切り替えることにした。そもそも人間が不死のフェニックスに勝てるとは思えないし、リアスの命に比べれば例え領地でも安いものだ。簡単に払える。払ってみせる。

「というかここまで大事にしてしまった時点で中止に出来ないし、アマテラスの要請を断れるほどの立場はない。」

「わかり、ました……………」

「ん、よろしい……………さあて、マイちゃん！アマテラスお姉ちゃんですよおー！」

「ひゃあ！来るな、来るなあー！」

アマテラスが満面の笑みでマイに抱きつこうとする。お姉ちゃん？妹と言うことか？いや、アマテラスの母イザナミは既に死んだはず。ではお姉ちゃんとは？マイはミカドの妹だし、ミカドとそういう関係だから？

「それでお父様、何を願うつもりなんですか？」

「んー、ミコトへのプレゼント」

「お父様ったら……………」

頬を染めクネクネ体を動かすミコト。その頭をポンポン撫でてレーティングゲーム会場に向かう。彼の教室だ。そこから、レーティングゲーム用に作られた場所に転移する。

「どうやら森の中を再現したフィールドらしい。」

「んじやお前等は好きにやんな。俺も遊んでくる」

ミカドはそういうと森の中をかけていった。

今回のフィールドは中々広い。それに森の中。見晴らしも悪い。だが、相手は人間。

「見つけてバラバラにしてやるー!」

「おー!」

勇んでつつこんでいった二人が森の名を疾駆する何かに一瞬でバラバラにされた。

「——な!」

その光景に目を見開くチャイナ姿の女の首が宙を舞う。

『ライザー・フェニックス様の兵士2、戦車1、リタイア』

アナウンスされた内容に目を見開く兵士三人と騎士、僧侶一人ずつ。まさかこんなに早く自分達がやられるなんて、相手は人間ではなかったのか!と固まっているとパキ、と枝を踏み折る音が聞こえる。

「何者!」

「ああん?んなもん、敵か味方に決まってるだろうが」

そういつて現れたのは海の底のような髪の色をした女。くあ、と欠伸をした彼女はズボンとコートのみを身につけ、そのコートも全開。ライザーあたりが好みそうな格好だ。しかし、敵。直ぐに攻撃に移るライザー眷属達。爆風に砂煙が舞う。終わったな、と確信する。が――

「こんな貧弱な技で、俺が倒せるとでも思ったのかよ――」

砂煙の中から無傷の女が現れる。騎士がならばと首を切り裂こうと大剣を振るう。女は、避ける動作などを一切しない。剣が首に当たり、しかし切り裂くことなく止まる。驚愕に固まる中、女の首筋から牙の生え揃った口が現れ剣を噛み砕いた。

「な、なんだ貴様は!」

「はは——はははは!」

女の手が巨大化し鋭い爪が生える。騎士の胸を貫いた腕はそのまま死体を地面にたたきつけ潰した。

「シーリス様!」

「おのれ、よくも!食らいなさい!」

十二単姿の僧侶が最大出力の魔法を放つが女は巨大な魔力弾を突き破り大きく口を開ける。牙が生え巨大化した口はまるでドラゴン。僧侶の上半身を一瞬でかみ切る。

「な、何だあの女は!？」

「シンちゃんはですなえ、あらゆる生物の揺りかごであった海の特性を持つ子でして、この世に存在する生物の特性を体に反映できるんですよ。相手を飲み込む口に噛み砕く牙、砕き貫く腕や爪。空へと逃げた相手を追うための翼。最終的に効率がいいのはドラゴンらしいです」

アマテラスはホップコーンを食べながらそう解説していた。

フェニックス家は不死だ。まあ殺す方法はあるのだから完全なる不死ではないが、頭が吹き飛ばうが内臓が吹っ飛ばうが蓄積した栄養関係なく魔力のみで復活できる。

他にもフェニックスの涙という回復アイテムを生み出す。

「ふーん、涙腺の中を通る時に特殊な魔力を帯びるのね。そして、フェロモンバランス、脳内分泌物が安定した時じゃないとそれが崩れる。あ、動かないでねー。フェニックスの回復と精神の関係を知りたいから麻醉使えないけど、そこはほら、頭を吹き飛ばされても我慢できるフェニックス家の意地を——」

「!!」

ミコトは偶然見つけたフェニックス家の少女を解剖していた。マインに頼み微弱な『死』を纏わせたメスで再生を妨害し、様々な実験をする。

例えば腕を普通に切り落として、新しい腕が生えたら再生を妨害しながら古い腕を移植し直す。右腕が二本にされた少女を嫌悪感から暴れるが両方の右腕が動いたのを見て固まる。

よしよしちゃんと繋がってるね、という声が酷く遠くに聞こえた。

そのまま右腕の半ばほどから切り落とされるとキチンと両方再生する。肩から切り落とすと再生したのは一本だけ。

おそらく本人が正しいと思う形に再生する。上腕の一部が残っていると、そこから先、腕の形を意識してしまい再生したのだろう。跡形もなくすと本来の形に戻る。

「なるほどなるほど。じゃあ次は気絶させて……は転移しちゃうから、薬で五感全て失わせて——あれ？」

気絶しないように脳に電気を送り続けていた筈なのに、少女が転移してしまった。心が折れ再生が行われず、開腹された傷が致命傷扱いになったからだろう。

山を壊した。深い深い海の底を光りすら届かぬ闇の世界で、世界を感じ取り、自然を感じ取り、ただただ無心に攻撃を続けて。

そして得た一撃は、ライザー・フェニックスの上体を弾き飛ばす。

「——ぐう！」

直ぐに再生して炎を放ってくる。炎に込められた魔力や気に干渉して乗っ取る。さらに追加。炎はそのままフェニックス家にちなんで巨大な鳥の姿をとるとライザーに襲いかかる。どれだけ逃げても生きていくかのように追ってくる。まあ、というか生きてるのだが。

ライザーが幾ら炎を放とうとむしろ飲み込み巨大化していく。

『ライザー・フェニックス様の僧侶1、リタイア』

先ほどからずつとなっていたリタイアの放送。不意に止まった時は最後の一人までやられたのかと思ったが、そういえば残っていた。それも、今リタイア。今度こそ自分一人。

「うおおおー！」

王さえ倒せば終わりだ。己の全霊を持って放った炎の一撃は火の鳥も飲み込めずに焼け死に、しかしミカドが拳を振るうと弾け飛ぶ。そのままかかと落としで地面に落下する。

「ぐ——？これは、ダメージ？」

「バカな、俺はまだ——！」

「俺は仙人だぜ？生命力に干渉して魂そのものにダメージを与えるなんて余裕余裕」

「な、なら、何故今更！」

「ミコトがフェニックス家の不死について研究したいっていうから。ま、それも終わりだけどな」

パチンと指を鳴らす。何処からともなく無数の虫が現れ、ライザー・フェニックスに食らいつく。再生は、しない。30秒後。ライザー・フェニックスはリタイアした。

「んじや、お前のメイド頂戴」

「——は？」

「だから、お前のメイドだよ。使用人は貰っても良いんだろ？」

「い、いや、彼女は私の眷属で——」

「ん？眷属でも問題ないんだろ？」

契約書を読み直すミカド。確かに使用人や眷属も個人で叶えられる願いの物品に含まれている。

「し、しかし！彼女は私の妻で、そんな願いをされるなんて——！」

「妹さん死にますよ？朝になった瞬間、光に焼かれて」

と、アマテラスの言葉に固まるサーゼクス。そうだ、すでに契約はなされているのだ。サーゼクスにかけられた呪いはそのまま血を通りリラスに向かう。

「だ、だが——」

「サーゼクス、仕方ありませんよ」

「グレイファイア!？」

「私は大丈夫です。長くても、百年だけですし」

あれ、俺仙人だから寿命なんてないんだけどな、と思ったミカドだが面倒なことになりそうなので黙っておく。

「だけど——」

「例え何をされようとも、私は貴方のことを忘れてりしません」

「グレイファイア………すまない」

「んじやいくぞ」

グレイファイア・ルキフグス。

ルキフグス家の直系。魔王の妻。超越者の一人として数えられるサーゼクスは彼女を妻とするために魔王になった。後なんか子供たちが傷つかない世界を作りたいとか言ってたな。どっかの猫又姉妹みたいに泣くことになった奴らも結構いるが。

まあ、そんな超越者が欲しがるほどの美人なのだグレイフィアは。その事を自覚しているから、ミカドの目的も自分の体だろうと思っていた。が――

「ミカドくん、久しぶりに一緒に寝よ♪」

「今日はイザナミなんだよ……どうする?」

「私は構いませんよ。アマテラス、久しぶりに母と寝ましょう」

「おお、親子丼ですか。良いですねそれも」

グレイフィアを無視して二人の美女と共に部屋に向かっていた。というか片方アマテラスなのだが、今母と呼ばなかったか?

「はいそれじゃあグレイフィアさんはこっちに」

「あの、私って何で連れてこられたんですか?」

「まあ別に貴方でなくても良かったんですけどね。純血の悪魔の女性なら誰でも」

「それは、また……何故」

ミコトに導かれるまま一室に案内される。ブブブ、と振動音が聞こえてくる。

「ほら、今回の件って悪魔の出生率の低さが原因の一端ですよね?だからそれを解決したいと思ひまして。そのためにはまず研究でしよ?」

ピタリと肩に何か乗っかる。それを見たグレイフィアは思わずひっ!と悲鳴を上げる。

肩に止まったのは、巨大な虫。蜻蛉のような長い体の先端には男性器のような卵管がある。

「この子達はそれぞれ様々な種族の精液を吐き出すんですよ。取り敢えずハーフもいるんですし人間と子を残せるのは確実。どんな種族でなら子を残せるのか、その種族だとして孕みやすいのか、それを観察します。まずは人間と悪魔、それから天使に墮天使、後はドラ

ゴンや各種動物幻獣を試してみますね。それとその際の卵巣の動きも調べます。全部終わるまでは、まあ一週間ほどですね。悪魔の未来のために頑張りましょう！」

「——ひ、い……いや……サーゼ——っ?」

「あ、暴れないように一服盛らせて貰いました。すいません」

虫の羽音が鼓膜を揺らす。ドサリと倒れたグレイフィアの足に、肩に、ピタリと虫がとまる。

「お父様、あの研究用の精巣虫改造できませんか?」

「あん?何でまた」

「グレイフィアさんが泣き出しちゃって……痛かったんですかね? だから、行為が気持ちよくできるように媚薬効果を……」

「ま、良いけどな」

「ところでそちらの方は?」

『姉さんを渡して貰いましょう。人間如きには相応しくありません』
とか言って襲ってきたから殺した」

「じゃあ睾丸を精巣虫にしてもらえます?血縁の場合どうなるか見ておきたいので」

「解った。体はどうする?」

「そっちはいらないので——」

「じゃ、捨てるか」

使い魔の森

生徒会室の近くのトイレ。一般教室や部室などからは離れた場所にあるため利用するのは殆ど生徒会役員のみだ。その男子トイレからミカドが出てくる。何もおかしいことではない。ミカドは時折生徒会の仕事を手伝うのだから。

おかしいことと言えば男子トイレから女子であるソーナと一緒に出て来たことだろう。

「お前最近スリル中毒になってきたよな」

「……かもしれませんね」

うつとりと頬を染めるソーナ。その顔は、リリスを思い起こさせる。ようするに悪魔らしい笑みと言うことだ。

欲望に忠実な悪魔。リリス曰く、ルシファアのクソヤロクが勝手な秩序を創ったとか。しかもその秩序を管理する貴族悪魔を秩序を嫌うリリスを切り刻み創ったというのだから笑える話だ。

考えてみればソーナはシトリ。人を脱がさせるのが得意な淫欲方面の伝承が残される悪魔だ。才能はあったのだろう。

「皆、お待たせしました」

「よ、手伝いにきてやったぜお前ら」

生徒会役員達は匙を除いて嬉しそうな顔をする。球技大会も近くなった今、人手は欲しい。匙もリアスもソーナの不利になることは言わないから、生徒会役員達は何も知らない。というか、仮にも惚れた相手が他の男と寝ていたのだ。トラウマになってもおかしくない。他の女とも実は、と行ってしまっただけ聞けないのかもしれない。

「失礼しまーす。あ、お兄様」

と、不意に扉が開き入ってきたのはミコトだった。その手には気絶したイツセーが引きずられており、後を数人の女子が付いてきていた。

「覗きです」

「本当にいい加減どうかしてください！」

「もう限界なんです！これ以上この変態が野放しなんて、私達怖くて

学校これません！」

「わ、私……この下着、彼氏に最初に見せたかったのに……」

よく見ると女子達はハゲと眼鏡も連れてきていた。何があったか尋ねると、ミコトが覗いていた三人を発見したらしい。

何でも可愛い下着だねー、彼氏に見せるために買ったんだー、そーなの？彼氏より先に見ちゃってごめんねー、女子だけだからいいよ、などという会話をしていると、ミコトが『まあ彼氏さんも見るの四人目の男子になっちゃいましたけどね』と呟いたらしい。そして、思わず動いてしまった彼等を女子達が捕まえた。

「変な思考誘導結界があつたせいで暴力で解決しようとしてましたよ？医療を志す者としてはそれは見逃せないのです……」

解除しちゃいました、とソーナの耳元で呟く。ソーナはリアス、と呆れたようにため息を吐いた。そして、こうして生徒会に相談してきた以上対応せざるを得ない。いや、やっとなら対応できると言うべきか。取り敢えず普通に犯罪行為なので退学、にしたいところだが相談に来たのが今日が初めてである以上、校則に則り停学にしかできない。

それでも再発をするようなら退学にするが、ここの校則を作った奴はやけに変態行為に甘い。共学化に伴い当時の生徒会長が決めたらしいが、男は変態行為をするのが当たり前だから仕方ないとも思っていたに違いない。

「ソーナ、どういうことよー！」

「女子生徒数名からの苦情ですからね。ところでリアス『自分達で解決するから大事にしない』という認識操作の結界を勝手に張っていたことに弁明は？」

「弁明……？」

首を傾げるリアスに、はあ、とため息を吐くソーナ。もう良いです、と再び書類に目を通す。いくらこの学校がノーヘッド本田を受け入れる頭がちよつとあれ……もとい簡単に動じない生徒が多いとは言え、何か妙だと思っていたがそんな結界を張っていたとは。てつきりはぐれ悪魔対策だと……考えてみれば学校にしか張らないのはお

かしかつたが、まあリアスだしな、と思っていたのが裏目にでた。

「兵藤一誠君の停学二週間は覆りませんよ。次は一ヶ月、その後は退学も視野に入れると伝えました。他に何か？」

「訴えが取り消されれば覆るのかしら？」

「まあ、そうですね……………」

「そう……………」

「言っておきますけど、人外に襲われたわけではないのに洗脳はやめてくださいね。あれ、日本神話から抗議が来たので外交問題になりま

す」

「……………ッ！」

リアスはキツ、と書類仕事をしているミカドを睨みつける。ミカドはリアスが来てから一度も視線を向けていない。どうでも良いからだろう。そのまま扉を勢いよく閉め早足で去っていった。

「彼女は貴方が嫌いになったようですね。兵藤一誠君を停学させたから」

「俺のせいじゃねーだろ。自己責任だ」

「はい。ですのでお気になさらず……………ところで、その……………」

「？」

「匙に使い魔を与えるために、冥界の使い魔の森という場所に行く予定なのですが、よろしければ一緒にどうですか？」

「……………まあ良いか。俺もアジアに与えてやりてーし」

どうせなら家族も誘うか、とミコト達を迎えに行くことにした。

「ああ？変態たちが居るから学校来たくないだあ、ならこなきや良いだろうが」

「そ、そんな……………」

「そいつ等に仕返ししてえなら今は耐えるこつたな。覗きのスポットになりそうなところに監視カメラでも仕掛けて数が揃ってからネットに流せ。実名、住所付きでな……………一度ネットに乗っちゃえば人を虐めるのが大好きなクズ共が勝手に追いつめてくれる。自分達は正義の味方だーつてな」

「ガキに何教えてんだ。良いぞもつとやれ」

職員室で生徒の相談を聞いていたシンを迎えにいくミカド。使い魔の森とやらに行かないかと事情を説明しながら聞くと、めんどいからパスと言われた。

ちなみに使い魔の森で何が起きたかというと、健康ボデイの水の精霊がミコトに解剖されたり、人体を溶かせないのに服だけ溶かせる謎の液体を出すスライムがミコトに様々な薬品を突っ込まれたり、女性の分泌物を好む触手がどのような脳をしているのかバラバラにされたり、どんな動物にも反応するのかと水の精霊をつっこまれ水の精霊に引きちぎられたり、ヒュドラの毒腺をアーシアとミコトが二人がかりで搾り採ったりなどだ。

「アーシアちゃん、新しい瓶用意するからちよつと待ってね……はい、OK。ロープ思い切り引つ張つて毒を絞つて」

「はい、いきますー!」

「シユアアアアアツ!」

「丁度弱つてるし、要るか?」

「ああ、うん……もうあれで良いや」

「ところでミカド君、何を食べているんですか?」

「ドラゴンの尻尾。喧嘩売ってきたから適当にボコつて鱗全部はがして爪と牙削つて尻尾貰った」

「……奪った、では?というか、殺さなかったんですね」

「生かしたときやまた材料がとれるからな」

「あ、アーシアの使い魔忘れてた」

帰宅し、思い出したように呟くミカド。様々な実験結果の資料や実験材料を手に入れ幸せそうだったミコトとアーシアはあ、と固まる。とはいえ、今から向かうのも面倒くさい。適当に作るか、と影を蠢かせていたが不意に止まり、空間に波紋を浮かべ一本の剣を取り出す。

「アーシア、これやる」

「これは、聖剣?」

「ああ、外国観光中に湖の精霊から貰った。名前は確か――」

教会の使者現る

アーシアに使い魔の代わりとなる護身具を渡して数日。

球技大会だ。種目はドッジボール。ミカド達はSF部というミコトの趣味全開のオーバーテクノロジーな薬を作る部活として参加する。

科学部がすでにあつたからこの名になった。ソーナがセ(S)ツクスフ(F)レンド部ですか?と割とマジな顔で聞いたという逸話もある。

アーシアは危険の少ない外野。

イツセーがボールを取れず外野になる。

「くつ、停学にされず練習期間があれば!」

「イツセー君の仇ですわ!サンダーショット!」

「あわわ、あぶない」

ミコトが放電するボールを避けマイが受け止める。ミコトは戦闘は得意分野ではないのだ。まあ、別にだからといってグレモリー眷属程度には負けないのだが。

何だ今の、魔球だよ魔球!と盛り上がる観客達の脳天気さにあきれながらも、これなら多少人外じみた力を使おうと大丈夫そうだと兵藤一誠が停学にされて以来敵意を向けてくるオカルト研究部にボールを投げつける。高速回転したそれを受け止めようとした朱乃だった。弾かれ腹に当たる。そのまま壁まで吹っ飛びボールはテンテンと床を転がる。アーシアがパスしてきたので今度はなにやらボールとしてる木場。リアスが叫ぶが反応せずぶち当たる。当たったボールは角度を変えリアスも吹き飛ばした。小猫は外野。勝者はSF部。

「ふう、さすが先生。さつきは見事な手術でした」

「いやいやアーシアちゃんも良くやってくれたよ?今回の手術、縫合痕がどうしても一週間は残っちゃうはずだったのに直ぐに治しちゃうんだから」

ミコトは裏社会で医者をしていた。人外達の、というわけではない。いや、ライザー・フェニックスの眷属達を蘇生して以来そちらからも要請が来るようになったがまあ、人間と嘗められているので偶にだ。普段はやくぎ、マフィア政治家、芸能関係が主な依頼人。稀に名を上げたい病院や製薬会社。彼等の資金源は主にそういった客達から出ている。

今回はそういった客からの帰りだ。と、その時――

「やあやお嬢ちゃん達、ここは良い町だね。簡単に侵入できるし悪魔とかと切りあえたし神父ぶつ殺せた」

「……………貴方は？アーシアちゃん知り合い？」

剣を持った白髪の少年神父が現れた。神父服から元教会所属のアーシアの知り合いかと尋ねるがアーシアは首を傾げて否定する。

「いえ、あんな普段のご飯をジャンクフードですませてそうな不健康な兎に心当たりはありませんけど……………あ、もしかして患者さんですか？」

「あー、確かに残りの寿命普通の人に比べたら少なそう。あれ？ていうか貴方^{ホームンクルス}人造人間？何で神父服来てるの？」

「そりや俺ちゃん元悪魔祓いですもんよ！」

「……………教会が、神の御技の真似事？アーシアちゃんどう思う？」

「えつと、普通に考えて粛清物では？でも、そんな話聞いたことがないですけど」

「汚点だから隠したとか？」

「ええ!?そんな、それって良くないことです！信者達に隠し事なんて、私、許せません！」

「俺を無視して何くつちやべってやがんだ！」

と、話し込む二人に切りかかってくる少年神父。アーシアは空間に現れた波紋に手を差し込み、ソレを引き抜いた。

「ああん？教会の使者？」

「はい、リアスが貴方達のことを話したらしく、『異教の神の信徒か、事件に首を突っ込まれても面倒だから忠告しておこう。何処にいる？』

と発言してしまいました……リアスが住所教えようとしてたので改めて後日くるように命じました」

「命じたのか」

「はい。だって、たかだか教会の悪魔祓いと魔王の妹である私では立場の差という物がありますから。私のせいで悪魔が下に見られるなんてことはあつてはなりませんからね……明日、予定が合えば生徒会室にきてください。そこで教会の使者、リアスとその眷属、私達も交えて彼女達の目的を聞きますので」

「聖剣を渡されるほどですから、ある程度の実力はあるのでしようが」
ソーナと椿姫の言葉を聞き聖剣ねえ、と昨日アジアが運んできた急患を思い出す。なかなか面白いものだったので少し改造したが……。しかしあれ、ホムンクルスつてだけであり得ないのに調べてみたらもつとあり得ないことに、キリスト教的には異教……ちよつと遡れば異端審問される邪教扱いの他神話の因子が入っているというよけいあり得ない存在だった。

と、その時ドアがノックされる。ソーナと椿姫が慌ててシートで体を隠すとミカドが入れと許可を出す。

「ご主人様、お食事の用意が出来ました。お二人の分も用意しております。よろしければどうぞ」

ペこりお辞儀して出て行く銀髪のメイド。ソーナは驚いたようにその背を見送る。

「……………意外ですね。あの後、てっきり子宮を取り出されたり脳内分泌物を調べるといふ名目で脳だけにされてるのかと」

「お前は俺の娘を何だと思ってるんだ」

「しないんですか?」

「いや、普通にするだろうな。まあわざわざバラす必要はねえから今は時間を早めた部屋で頭蓋貫いて脳の反応読みとる機械つけて精巢虫共に犯させてるが……………」

「え、でも……………」

今普通にいましたよね?と目で訴えかけるソーナ。

「あれは弟だ。いや、元弟か?ぶつ殺したつもりだったが意外としぶ

とく生きててな。鞆丸とつた時に目覚めてその事教えたら『つまり私は姉さんに近づいたということですか!』とか言い出して喜んでたから、姉からとつた生態情報を植え付けてみた目改造した。姉弟だけあり良く馴染んだ……………」

「それは、気持ち悪いほどシスコンですな……………その、姉がそんな目に遭ってるのに何も言わないんですか?」

「彼奴の中ではもうソレは自分だ。姉の前で『虫相手に喘ぐ貴方の何処が聡明で美しく絶対的だった私だと言うんですか?』とか『貴方のような下品な女が私のはずないです』とか言って、精神ぶっ壊した」
「……………まあ、あれも精神壊れてる気がしますけど」

「取り敢えずあれ呼ぶ時はグレイフィアと呼んどきな。そうじゃねーとキレる。だから旧グレイフィアにも新しい名前付けないとな……………銀色でいいか」

翌日、教会の使者というゼノヴィア・クアルタと紫藤イリナ、オカルト研究部とソーナに椿姫と王神一家とアジアを交えて会談が行われた。

「貴方が異教徒ね?今からでも改信しない?大丈夫、主は寛大よ。例えもと異教徒でも受け入れるわ」

「よせ、イリナ。異教徒は異教徒なりに自分の信じる神がいて、それで満足しているんだ」

喧嘩売ってんのか此奴等?とミカドは思ったが雑魚の戯言だと見逃してやることにした。

彼女達の話によると、教会所有のエクスカリバーが三本ほど盗まれた。エクスカリバーは先の大戦で砕かれ、今は破片を使い七つの聖剣になっついていて、自分達はその内二本を所有しているから派遣された。

盗んだのは墮天使幹部コカビエルで、教会の上層部は悪魔達が墮天使と組んで聖剣を破壊する気なんじゃないかと疑ってるから手を出すな。後異教徒の助けなんて恥だから手を出すな。もしお前等組んでたら殺すからな、とのこと。

「なあソーナ、コカビエルってどんくらい強いんだ？」

「会ったことはありませんが、仮にも最上級堕天使です。魔王様に匹敵するかも……」

「魔王ってーとこの前の奴等か……なんだ、教会上層部とコカビエルってのが繋がってるだけか」

「なんだと？ どういう意味だ……!」

バン！と机をたたき勢いよく立ち上がるゼノヴィア。イリナはキョトンとしていた。ミカドはそんな事もわかんねーの？ と耳をか

く。
「お前等程度じゃ例え世界がひっくり返ってもコカビエルってのに勝てねーだろ。なら、教会上層部が弱い奴に聖剣持たせるんで殺して奪っちゃってって言うてるようなもんだろ」

「私達が負けると言いたいのか!？」

「だって弱えじゃんお前等……そんなお前等に朗報。聖剣一本回収したからこれもって帰んな。堕天使幹部相手だ、上も強くいえねーだろ。悔しがるぜ」

と、異空間に収納していた剣を取り出す。それは、どうみても聖剣だった。ゼノヴィアが己の聖剣に巻いていた布を取り払いミカドの首筋に当てる。

「貴様、堕天使と組んでいたか……奴は今どこにいる!？」

「……………そう判断するか。ま、それは此奴に聞け」

面倒くさそうにため息を吐くと床をトン、と軽く蹴る。そこを起点に魔法陣が広がり、一人の少年が姿を現す。

「初めまして、私の名前はフリード・セルゼン。好きな言葉は健康第一です」

「……………誰!？」

ゼノヴィア、イリナ、ついでに木場が現れた人物を見て叫んだ。

エクスカリバー

爽やかな笑顔を浮かべる白髪の少年神父。

フリード・セルゼンと名乗った彼に、ゼノヴィア達は聞き覚えがあった。

元ヴァチカン法王庁直属のエクソシスト。悪魔や魔獣を次々と滅していく13歳でエクソシストになった天才。しかし、同胞にすら手をかけ異端認定された男。

何時も楽しそうに笑う言葉の通じない相手だと聞いた。実際昨日遭遇した木場も理性がない狂人だと認識していた。

「今回の件の首謀者はコカビエル、その協力者は聖剣計画の発案者バルパー・ガリレイ。目的は戦争の再開。教会所有の聖剣を奪い、魔王の妹たちを町ごと吹き飛ばして両者の怒りを買うつもりだ。協力したはぐれエクソシストは私を含めて三名。拠点となる廃屋は、残念ながら教えられない。若い命を無碍に散らしに行くなど、私は見過ごせないからな」

誰だろう此奴は？

なんだこのキラキラしたオーラ。何で笑うと歯がキラんと光るんだ。なんか、怖い。

「分を弁え魔王様方、天使長様達に報告するのが最適だろう……あ、ただ妹のこととなるとやりすぎると噂のセラフォル様は余計町が危険になるのでやめておいた方が良さだろうな」

「魔王様を呼べというの？ 今回の件は、私達で十分よ」

「同感だ。わざわざ天使長様達の手を煩わせるなど、言語道断！」

「ははは。面白いことを言う」

と、愉快そうに笑うフリード。

「煩わせなければこの町が滅びると言ったら？ お前達では、万が一にも勝てない。それでも抗った、という形を取りたいのは解かったから、上に掛け合って……おや？」

不愉快そうに睨んでくるリアスとその眷属、および教会の使者達に気づき首を傾げるフリード。

「まさか自分達だけでどうにかなるなどと、本気で考えている訳ではあるまいな？ 過剰な自己評価は己の身を滅ぼすぞ。私にも劣るお前達が、コカビエルに勝てるなど笑い話にしかない」

ゼノヴィアが立ち上がり破壊の聖剣を振るう。フリードはそれを魔剣で受け止めた。ゼノヴィアが目を見開き両手に力を込めるが、フリードは片手に持った魔剣であっさり押し返す。

「それは、まさか——グラムか!? 貴様、聖剣だけでなくグラムまで！」
「元よりキリスト教の物では無いだろう。何より、これは昨晚私を選んで飛んできた」

魔剣を異空間に収納し何事もないかのようにゼノヴィアの怒りを受け流すフリード。ゼノヴィアのみならずイリナも剣に手をかけるのを見て、はあ、とため息を吐く。

「もし魔王様方が間に合わなかったら、手を貸してもらえますか、ミカド君」

「おう、いいぜ」

空気がピリピリと震え、ソーナは仕方ないというように切り出す。言外に魔王に救援を要請すると言って。そんなソーナにリアスが非難するような目を向ける。

「ちよつとソーナ！ 自分の領地で起きた問題を解決できないなんて、恥なのよ!? なのに、ここは貴方の領地じゃないのに勝手に——！」
「ぶっこであるうと領主を名乗るなら暮らす人々のことも考えてください。ここは、人間の世界です」

「——!!」

リアスが魔力を迸らせ、ソーナは全く気にせずお茶を飲み始めた。「マウントの取り合いか？ くだらないな。行くぞイリナ………それからフリード。私は背信者に遅れをとるつもりは無い。聖剣は、すべて私達が取り戻す——おっと」

ミカドが持ってきた聖剣の柄を掴み去ろうとすると、机の角にぶつけてしまう。パキン、と音を立てて聖剣が折れた。

「——え」

「——は?。」

「——な」

イリナ、ゼノヴィア、木場が声を漏らす。聖剣が机の角にぶつけて折れるというあり得ない光景に、他の面子も固まっていた。

「ゼ、ゼノヴィアなにしているのよー!。」

「わ、私か!? いや、私はなにも、こ、こんな所に机おいとく悪魔たちが悪い!。」

「っ! そうね、盲点だったわ!。」

「ちよつと! 責任を押しつけないでくれる!。」

「せ、聖剣が……俺、え? 机の、角で——?。」

と、混乱の中アーシアが恐る恐る手を挙げる。

「どうしたアーシア、何の挙手だ?。」

「私が折りました」

「——は?。」

「折る気は無かったんです——」

両手で顔を覆うアーシア。そんなアーシアを慰めるようにフリードが肩に手をおく。

「彼女を責めないでくれ。私が彼女に襲いかかった理由がそもそもの原因なんだ」

「——アーシア? 魔女アーシアか、聖剣を折るとは、貴様を未だ支持している者がいるが、やはり異端認定は間違っていないかったようだな!。」

「ふええ!。」

聖剣を振るってくるゼノヴィアに悲鳴を上げながら異空間に収納していたらしい剣を取り出し聖剣を防ごうとする。ゼノヴィアが持つ聖剣は『破壊の聖剣』エクスカリバー・デストラクシオン。現存するエクスカリバーの中で最強の攻撃力を誇る。そのまま剣ごと叩ききろうとして、弾かれる。

「——な!。」

弾かれる際、眩い光が剣から放たれ悪魔達が苦しむ。ソーナと椿姫だけはミカドに助けられたが。

「やっぱり木工用ボンドじゃ駄目だったか——だから瞬間接着剤に

しようつて言ったのに」

ヒヨコリとミカドの後ろから顔を出しアーシア達を見て呆れたように言う。

「とうか此奴も知ってたのか。しかし、木工用ボンドって……………」

「貴様、その聖剣は……………何故魔女が聖剣を——やはりバルパーと繋がっているのか!？」

「違いますよ!これは貰ったんです!何で使えるかと言われても、知りませんけど……………」

「そりや、エクスカリバーは俺が湖の乙女から所有権を貰ってるからな。俺が誰を担い手にするか決められる」

「エクスカリバー?」

「そ、教会が売名行為のために作った偽物で、しかもあつさり折れるちよつと強いだけの聖剣ではなく、真正銘アーサー王を現代に渡るまで騎士王という名に崇めさせた本物のエクスカリバーだ」

「本物?我々のエクスカリバーが偽物だと言いたいのか!」

「うん」

ゼノヴィアの言葉にあつさり頷くミカド。

うん、ですつて。かわいい返しですねとのんきに話し合うソーナと椿姫。

「……………そうか。では、その剣は魔女如きに相応しくない。我々が回収しよう」

「話聞いてたか?俺が相応しいと決めたらそれで終わりなんだよ」

「……………アーシアさん、と言ったね?」

ゼノヴィアの言い分に呆れていると今度は木場がアーシアに声をかける。

「僕と戦ってくれ」

「え?え?な、何ですか?」

「僕はエクスカリバーを……………聖剣を折るために、今日まで生きてきた。君が聖剣の担い手だというのなら、聖剣計画の被害者のために、君の剣を折る!」

「聖剣は教会が回収する。引っ込んでいてくれ」

「ま、待ってください！」

何か勝手に盛り上がる2人にアーシアはワタワタしだす。しかし二人は問答無用と言わんばかりの空気。アーシアは必死に叫ぶ。

「で、でも……エクスカリバーは聖剣じゃありませんよ!？」

「————へ?」

「選定の剣はブリテンの守護神が用意したから聖剣なんでしょうが、その後アーサー王が戦場で振るっていたのは、キリスト教では悪霊扱いの水の精霊が魔の法、魔法で鍛えた剣ですから、聖剣ではなく魔剣なんです」

「属性は光だけだな。だが聖属性はねーぞ?むしろ、魔剣ではあるが神であるオーデインの造ったグラムの方が聖剣に近く悪魔特効持ってたんな」

「そうなのか?私の知る限りでジークフリートはその様な使い方していなかったが……」

「使いこなせてなかったんだろうな」

その後、なんか実力を証明するとかでゼノヴィアがフリードに喧嘩を売り、木場が勝手に参戦し、木場はあっさり敗退した。ゼノヴィア?フリードがグラムの力を解放して放った光に飲まれて気絶した。

はぐれ聖剣使い

「なにやら匙が勝手に動いているようです」

「へえ、お前も大変だね……」

生徒会室で書類の整理をしながら頭を抱えるソーナにケラケラと笑うミカド。どうやら匙は、教会の使者達と協力関係を築き聖剣使いを捜しているらしい。聖剣に人生を狂わされた木場の為の行動らしく、発案者はイツセー。協力者は小猫。

木場を含めた悪魔組とイリナ、ゼノヴィアの教会組で二手に分かれ聖剣を一本だけ破壊するつもりらしい。

「木っ端悪魔が聖剣の破壊なんて、教会の上層部になんと言うつもりなんでしょね」

「協力して破壊した(ドヤ)」

「なるほどバカですか……まあ、例えば聖剣が合体したりして、あの聖剣使いがデュランダルやコールブランドレベルの聖剣を持つてるなら、ギリギリ言い訳はつくでしょうね。だとしても、聖剣使いを倒せたところでコカビエルが倒せる訳ないのに……」

「魔王は？」

「ルシファー様は『リーアたんが居るから大丈夫だよ』と言いつつ、妹が自分をもっとも尊敬してくれるタイミングを伺ってるでしょうね。ベルゼブブ様は『レーティングゲームの調整がある』、アスモデウス様は『眠い……』お姉様は、呼んだら町ごと氷付けにしかねませんので却下……』というわけで、手を貸してください」

ソーナの要請。思ったより早くきた。頭を撫でながら、いいよ、と返すと嬉しそうに微笑んだ。

しかし魔王つてのは何とも自分勝手な……いや、悪魔らしいからいいのか？よくわからん。

「とはいえ、今から手を出したところで、余計なことを、私達で十分だったのに、って言われるだろうしな。取り敢えずは死なない程度に監視をつけといて、最終決戦あたりで乗り込むか……」

「それがいいかと。リアスも絶対巻き込まれて同じようなことを言い

ますよ」

「だろいな……おい、ペスト……」

ミカドがパンパン手を叩くと何処からともなく黒いネズミが現れる。ヒクヒクと鼻を振るわせるそのネズミは

「適当に守ってやれ」

「――」

コクリと頷くペストと呼ばれたネズミ。そのままとつとこ走っていった。

「今のは？」

「俺の部下だ。基本的に何奴もこいつも旅行ばっかしてるがたまに帰ってくる」

「ネズミ、ですよね？ペストさんの使い魔ですか？」

「いや、ペスト本人だ……赤虫よりはずっと強いぞ」

「ということは私より強いんですね。ネズミなのに……精進しなくては」

「何なら俺が鍛えてやろーか？」

もしくはミコトに寝て起きたら最強になる改造をしてもらうか、と提案するミカド。その時は是非鍛えてくださいと改造手術をやりわり否定するソーナであった。

アーシア・アルジエントはエクスカリバーの担い手である。

湖の乙女から所有権を受け取ったミカドは己自身が担い手になることも担い手を選ぶこともできる。そしてアーシアを選んだのだ。

「うう、でも私が伝説の剣の担い手なんて力不足ですよ」

「そんなことはないさ。私なんて、中に眠る血の気配で嘗ての主と勘違いさせただけ。貴方より、よほど異端だ」

そう、ミカドがミコトと共にフリードに施した改造は性格の矯正とその身に宿っていた北欧の英雄の因子を活性化。その活性化によりオリジナルである北欧の英雄の一人シグルドの気配を、才能を強く身に宿すようになったのだ。

途端に魔剣グラムが『シグルド！ああ、シグルド！』とでも言うように勢いよく飛んできた。

「でも、私剣なんて使ったことないですよ？なんか、使い方解りますけど……頭の途中で女の人の声が戦い方を教えてくれるんです」

「女？男ではなく？」

と、その時だった。殺気を感じ、アーシアがエクスカリバーを抜き放つ。剣は、見えない。しかしギイン！と金属音が響いた。

「だ、誰ですか!？」

「今のを防ぐか……貴様が教会から派遣された聖剣使いだな？」

「え？違いますけど」

「問答無用！」

「じゃあ何で聞いたんですか!？」

きやあー！と叫びながらも剣を構えるアーシア。アーシアに襲いかかってきたのは、聖剣を持った神父服姿の男。恐らくコカビエルに協力したはぐれ悪魔祓い。その剣を、フリードが止める。

「ふ、フリードさん！」

「フリード!？貴様、姿を消したと思えば何をしている！」

「アーシア、下がれ！」

フリードはアーシアを背にかばい、仲間のはずのフリードが敵対したことに目を見開くはぐれ悪魔祓い。前のフリードは性格こそあれだが実力は本物。それを知っているはぐれ悪魔祓いは顔をしかめると、そこへ――

「見つけたぜ！ラインよ！」

「よし、行け木場！」

「――!!」

悪魔達がやってきた。しかも、フリードには目を向けず自分に狙いを絞って。

「待て！そいつはそこそこの実力者だ！おまえ達では、私が――！」

「おっと、お前の相手は俺だぜ」

「祐斗先輩の邪魔はさせません」

「――っ！」

が、兵藤一誠と塔城小猫はフリードの前に立つ。

その瞳は義憤にもえており、フリードが忌々しげに舌打ちする。空気に酔っている。こういう連中が、一番やつかいだ。

小猫とイツセーの攻撃を回避する。殺すのは簡単だがそうすると主であるミカドに迷惑をかける。

「いけるぜードラゴンショット！」

「——！！」

山一つは消し飛ばしそうな攻撃が、町中で放たれる。仲間のために戦う自分に酔うのは後にして欲しい。正面から受け止めようとしたフリードだったが、アーシアが前に飛び出してくる。

「エクスカリバー！」

眩い光がドラゴンショットを弾き、悪魔達にダメージを与える。はぐれ悪魔祓いとその隙に逃げ出し何時の間にか来ていた教会組が後を追う。

木場も光に焼かれふらついた体を奮い立たせ走り去る。

「木場！くっ、お前等よくも邪魔してくれたな！」

「フェ!?ご、ごめんなさい！普通に弾くつもりが、思ったより光が出ちゃって——」

『氣にするな娘よ。この者達では、真の力を使うまでもなくその剣の光で死んでもおかしくないのだからな』

イツセーがフリード達に突っかかろうとしフリードが背に庇う。

アーシアは涙目になり謝り、不意に何処からともなく聞き覚えのない声が聞こえてきた。周囲を見回しても誰も居ない。

『懐かしい気配だ。まさか、再びその剣の担い手に出会えるとはな』

「———へ？」

発生源が己の籠手だと解り固まるイツセー。籠手から流れる声は懐かしげな声をアーシアに向ける。

『ドジそうなところが彼奴の若い頃を思い出す。お前なら、きっといい使い手になるだろう』

「ひよつとして、アーサー王様のお知り合いですか？でも、私は、血筋ではありません……………」

『血筋など関係ない。血筋だから渡せ、などと言ってきたら切り刻んでやれ』

その後、リアス・グレモリーとソーナが眷属の回収にやってきた。リアスは光に焼かれダメージを受けたイツセー達を見て文句言ってきたがソーナがたしなめ、帰って行った。

「——っ、う……………っ、ここは？」

イリナはゆつくりと目を開く。ここは、何処だ？自分は確か、はぐれ悪魔祓いを追って、その後コカビエルに出会い……………

「あ、起きました？」

「貴方は、確か……………異教徒の妹さん……………私、どうしてここに？」

「ペストが運んできたので簡単な治療を……………改造はしてないので安心してください」

「治療？あ、確かに全然痛くない……………よし、これなら戦える！」

「剣もないのにお勧めはしませんけどね」

「——っ。例えそうでも、私は神に身を捧げた戦士、最後まで戦うわ！」

「……………そうですか。なら、止めませんが……………あー、じゃあこれ使います？」

と、異教徒の妹、ミコトは一本の日本刀を取り出す。

「日本刀!?最高じゃない、借りてくわね！」

「お大事にく。ちゃんと返してくださいね」

一応日本神話から受け取った……………というか頼まれ取り返した神殺しの剣だ。好きにして良いと言われたが、貸すのはともかくあげるのはやっぱり駄目だろう。

コカビエル

コカビエルは駒王学園で手持ちの聖剣を合体させるつもりらしい。その際溢れるオーラを魔法陣にそそぎ込み、この町を破壊する術式を完成させる。

リアスはやっぱり魔王に連絡せず誘いに乗った。

「せめて自分より強いのは明らかな俺等に頼るって選択肢はねーのかね?」

学校を覆う結界の外、ソーナの言葉を聞きケラケラ笑うミカド。

「ところであのカメレオン君は?」

「匙は、閉じ込めておきました。主に無断で教会と協力、だけなら新人なので見逃しましたが日本神話主神と個人的に繋がりのある者の身内を襲ったので」

「ほーん」

まあ実行犯はイツセーと小猫だが、その辺りは関係ないのだろう。手を組むことを選んだのは彼自身なのだから。

「中の状況は?」

「なんかりアス・グレモリーの騎士が聖と魔を支配する聖魔剣つてのに目覚めて、聖剣使いの青い方がデュランダル出して二人で合体聖剣エックスカリバーを折った。ん?てか、聖剣使いのツインテが持つてる剣俺の天之尾羽張じゃん……ミコトが勝手に貸したか?まあ、家じゃ包丁ぐらいにしか使つてねーけど」

ちなみに炎も出るので切ると焼くを同時に行えるのだ。日本神話に頼まれとある神器をバラバラにして取り出した。結果、その神器に封じられていたもう一つの存在が活発化して宿主を侵蝕していたが知ったことではない。

「あ、後なんかコカビエルが神死んだことを話して聖剣使いが落ち込んだ」

「え、今、さらつとんでもないこと言いませんでした?」

「さあて、そろそろ俺も混じるかねえ——ん?」

結界を通り抜けようとしたミカドは不意に足を止め顔を上げる。

「……………こつちのが面白そうだな……………ペスト、監視から交戦に切り替え。それと、これ呼んだのは其奴だ。願いを叶えさせろ、ミコトにな」

「へ？こつち？任せる？あの……………!?!」

ドン！と地面を蹴り飛んでいくミカド。ソーナは、子供っぽい人です。と呆れたようにその背を見送った。

「退屈だな。コカビエル程度で、わざわざ動かなくてはならないとは」
『そういうなヴァーリ。アザゼルがお前に頼みごとなど、滅多にないのだぞ？』

「……………まあ、それもそうだな」

夜空を飛ぶ一つの影に、二つの声。白い機械的な翼を広げるのは銀髪の少年。年は、高校生ぐらいだろう。

彼が向かうのは、駒王学園。そこにいるコカビエルに用があるのだ。後少して到着——

「ぐっ——!?!」

突然、衝撃が走る。あまりの衝撃に吹き飛ばされるも翼を広げ空気をつかみとどまる。いったい何者が、と先程まで自分がいた場所を睨めば彼が向かおうとした駒王学園の制服に身を包んだ片目を隠した少年が足を振り上げた状態で笑っていた。

「白い龍ドラゴン・メイルの鎧——白龍皇か」

「何者だ、君は？」

こうして空に浮かんでいるのだ。神話側の関係者なのだろう。だが、彼のような特徴の人間の噂は聞いたことがない。

「王神帝だ。仲良くしてね」

「……………ヴァーリだ。仲良くしたいのなら、俺の邪魔をしないでくれるかな？」

「連れねえこと言うなよ。コカビエルみたいな雑魚の相手、つまんなそーだからよ。遊んでくれ、な？」

「コカビエルを雑魚扱い、か……………良いね——いや」

と、寧猛な笑みを浮かべたヴァーリだったが不意に止まる。

「どうやらコカビエルがやられたようだ。すまないね、アザゼルとマリカーの約束もある。早く帰らなくては」

「あ、何だ、マリカー？ そうか、じゃあ仕方ないか」

『仕方ないのか!?!』

時を少し遡る。神の死を伝えられ、その場に膝を突く。

悪魔達も圧倒的な力の差を前に恐怖を感じる中、イツセーだけが折れなかった。

「俺は戦争を始める、これを機に！ お前たちの首を土産に！ 俺だけでもあの時の続きをしてやる！ 我等墮天使こそが最強だとサーゼクスにも、ミカエルにも見せつけてやる！」

「ふざけんな！ お前の勝手な言い分で俺の町を、俺の仲間を、部長を消されてたまるか！ それに俺はハーレム王になるんだぜ、てめえに俺の計画を邪魔されちゃ困るんだよ！」

「ハーレム？ 赤龍帝はハーレムが望みか。くく、まあそこまで強ければ、女もよってくるだろうな」

『ああ、それは勘違いだぞ古き墮天使よ』

コカビエルが赤いオーラを放ち凄むイツセーを見て楽しそうな笑みを浮かべる。と、水を差すような声が聞こえてくる。古い墮天使であるコカビエルはその声に聞き覚えがあった。

「どういう意味だ？ 赤龍帝ドライグ」

『そのままの意味だ。この小僧は、少し改造されていてな。本来なら女を寄せる——まあ、こいつの普段の行いでは多少見直させる程度のオーラを放つのだが、女を寄せるから戦いを引き寄せる、にオーラの質を変えられている。だからお前のように強者を求める者は強者に感じるが、単なる雑魚だ。期待するな』

「うおー！」

自分の相棒に単なる雑魚扱いされ思わず叫ぶイツセーだったが、赤龍帝、ドライグは不機嫌そうだ。

『せっかくあの剣の担い手に出会えたかと思えば、それに敵対しているわ大した実力もないくせに格上に喧嘩売るわ……お前の中でお前を見て、俺は何度死を覚悟したことか』
「死？」

『やはり気づいてないか。あの男、此方まで手を伸ばせる……お前のような器では体全てを無理矢理奪つても発揮できる力はたりんだろう』

あの男？と首を傾げる。自分に関わりがありオカルトに関係する者といったら、ミカドか？

「ははは。宿主に恵まれぬとは、不幸だなドライブ……では、どうだ？俺とともに来ないか？この時代、神器を抜き出す技術がある」

『——は』

コカビエルの提案にイツセーが緊張する中、ドライブは静かに声を漏らす。

『ははは！は！はっはっはっは！ふあははははは！！』

籠手から聞こえるのは嘲るような大笑い。

『神器を抜き出す？ともに来ないか？ははは！笑わせてくれるな小鳥！自分達鳥こそが最強と知らしめるのではなかったのか？俺達ドラゴンこそ最強だと知らしめてどうなる!?戦士より、道化の方が天職だぞお前は！はははは！』

『——』

『所詮その程度だ。お前は、自分だけでもと言いながら、自分がどれだけ弱いのか良く分かっている。ククカカカ——まあ己の分際を弁えているようで何よりだ。今からアザゼルに泣きついてきたらどうだ？僕一人では怖いから一緒に天使や悪魔と戦ってください、とな！は！はっはっは！』

「——ふん。俺とて、本気ではないさ。もう良い、再び世をさ迷え！」
「お、おい！なんか滅茶苦茶キレてんぞ?!どーする!？」

『どうするもこうするも、元より身の程知らずに挑もうとしたのだ。何も変わるまい?』

ククク、と笑うドライブ。コカビエルは、そのドライブの宿主であ

るイツセーを狙い光の槍を放つコカビエル。イツセーでは、ここに
いる悪魔ではただ何の抵抗も出来ずに死ぬしかない一撃。しかし――
「んっんっん――交戦の許可も頂きまし、手を出させてもらい
ましようかね」

ゴウ！と吹き荒れた黒い風が竜巻となり光の槍を砕いた。

「何者だ！」

「んっんっんっん――さてはて何者かと問われると、まあ自己紹介は
した方がよろしいのでしょうか」

竜巻がはれると、その中央に立っていたのはネズミだった。ネズミ
が俺の槍を？と困惑するコカビエル。いや、コカビエルだけでなく誰
もが困惑していると、周囲から大量に黒いネズミが現れる。

「にゃ――!?!」

「ネ、ネズミ!?!」

そのネズミ達は竜巻を発生させていたであろうネズミの元に集い
重なり、溶け、形を整える。

「ある時は小さなネズミの群、ある時は旅行好きの紳士、ある時は主を
喜ばせる道化師、そしてその正体は――!?!」

全身隙間なく体を覆い肌の露出がいつさいない黒衣。闇のような
黒い服に、その闇に浮かぶ白い鼻高のマスク。俗に言うペスト医と呼
ばれる格好をした男は優雅な仕草で帽子を胸に当てお辞儀して、大袈
褌な動作で両手を広げる。

「少年少女に老若男女、近くへ寄ってとくとみよ！我が輩こそは王に
創られし魔人が一人、ネズミ^{ラッ}を^テ引き^{フエ}連れる男^ガ、ペストでございます」

ペスト

ペスト。

ペスト菌による症状は腺ペスト、皮膚ペスト、眼ペスト、肺ペストなどがあるが、多くの者が想像するのは敗血症により肌が黒く染まる黒死病を想像することだろう。

14世紀の大流行は、世界人口を4億5000万人から3億5000万人にまで減少させた程の感染爆発を起こした病気の名である。

世界の歴史 星の記憶にまで残るレベルの、神代であれば邪神としての神格か神の怒りとしての御技に昇華していたであろう伝染病。

「ペスト?聞いたことがない名だな……いや、伝染病としての名は知っているが」

「おやおやおや、博識ですなコカビエル殿。まあペストの大流行の一端はキリスト教のせいですからなく。そのくせやれ悪霊の仕業だ、主を崇めよなどと言うから笑える話です。その主も既に死んでいるというのにいやはや滑稽滑稽!んっんっん」

十字教を心底馬鹿にしたようなペストの態度に、普段なら切りかかるゼノヴィアもイリナも神の死を知り意気消沈していた。

「ふん。で、貴様が俺と戦ってくれるということの良いのか?」

「戦い?いえいえ貴方では我が輩の相手になりませんよ」

「なめるな!」

馬鹿にしたようなペストの態度に青筋を浮かべ巨大な光の槍を放つコカビエル。ペストは黒い風を発生させ槍を防ぐ。

「ほう、中々やるようだな。何だ、貴様は?何処の神話の戦士だ!」

「我が輩は別に何処ぞの神話に仕えているわけではないのですがね。我が輩達は偉大なる父上により創造された、ただの魔人でございます故……あなた方に比べれば、歴史は薄い」

期待に添えず申し訳ありません、と帽子の鍔をつかみ頭を下げるペスト。その間にも雨のように降ってくる光の槍は全て黒い風の壁に防がれ、黒い衝撃波がコカビエルを襲う。

「ほう、その父とやらも強いのか?」

「いいえ、弱いですよ。少なくとも、我々に比べれば。そもそも自分より弱い者を創ってなんの意味がある？」

心底不思議そうに首を傾げるペストに、コカビエルはふん、と鼻を鳴らす。

「なるほど、お前の父とやらは、あれか……今代の、既に現れていたのか。で、あるなら興味も失せる。自立式を創造する奴等は、何時の時代も本体を殺せば終わりだ」

「星も壊せぬ神話負けの弱者が、我らの父を侮るか。我が輩より弱いからといって、我が輩より遙かに弱い貴様と同格などと侮辱するな」「ほう？言うではないか、人間風情が俺より上だと？なら、貴様を殺して身内鬮頂だと教えてやろう」

「……………んっんっん……………あいにく我が輩は弱い者虐めは嫌いな方ですてな。他の魔人達に比べると、穏健派なのですよ。なので、もう終わらせてもらいました」

「何？——っ!？」

唐突にコカビエルが地面に落下する。流石は人外、あの高さから落ちてなおそれ自体では傷一つ付いていない。しかし、その体には黒い斑模様が浮かび上がっていた。

「これ、は……黒死病？馬鹿な、人間界のウイルスが——何故、俺に」「我が輩は黒死病を操る魔人ではなく、黒死病と言う現象を実体化させた魔人なのですよ。我が輩が使う力はペスト菌を操るのではなく、黒死病という感染性の呪いを振りまく。本人の抗体など、我が輩にはなんの意味もない」

生きていると判断したら機械だろうと神だろうと死に向かう呪いをつける。防ぐ方法はペスト以上の魔力や神力、光力、仙術などを使うこと。コカビエルには、それが出来ない。

「我が輩の素体はイザナミ母様。死を与える魔人としては一級品なのですよ」

立ち上がろうとも力が入らないコカビエル。ペストはコカビエルを肩に担ぐ。

「では、我が輩はこれで——あ、これは返してもらいますね。父上の

物なので」

「——あ」

ヒョイとイリナの刀を回収するペスト。イリナは弱々しく呟くだけ。ペストは一礼して去ろうとすると、目の前にイツセーが立ちはだかる。

「待てよ——!」

「んっんー? 我が輩に何かご用ですかな」

「お前は何処の誰なんだよ!? てか、お前のせいで、俺は部長のお乳を揉めなかつたんだぞー!」

「——は?」

「俺はここで活躍して、部長のお乳を揉ませてもらうつもりだったのに!」

「——え?」

「許せねえ、ぶっ飛ばしてやる!」

『身の程を知らん小僧だ——』

『Boost!!』

赤い籠手を突き出し叫ぶイツセー。そのままかけてきたイツセーを蹴り飛ばすペスト。

「——ツ! まだまだあ!」

「——うーん、これ………殺しても良いですかね?」

「——っ!?!」

ゾワリと背筋を悪寒が駆ける。ヤバい、これは、死ぬ——本能がそう理解し、ペストの手が伸びてくる。と、そのペストに落雷が落ちる。

「——」

「イツセー君から離れなさい!」

「イツセーに手は出させないわ!」

朱乃が叫び、リアスが滅びの力を放つ。ペストは片手で弾くと顎に手を当て考え込む。

「眷属一匹ならともかく魔王の妹は流石に面倒ですなあ——ふむ、兄の立場に感謝することですね」

「お兄さまは関係ないわ！今、貴方の前にいるのは私でしょう！」

「んー？んっんっんっ！おかしなことを言いますなあ。貴方、兄上の加護もなしに自分が今の評価を得ているとでも？」

「当たり前でしょう？」

「んー——これは、その、うん………我が輩帰ります。ご用の際は、我等が父上王神帝様にご連絡をば」

「王神……？また、彼奴かよ！」

「………とはいえ、無礼なガキは殺しておきましょうかね？いえ、良いです。貴方ごときでは、父上を侮辱したところで父上の名に傷など付きませんからな」

パチン、と指が鳴る。手袋してるのにどうやって、と疑問を持つ前に黒い風が渦巻きペストを包み込み、晴れるとその姿は何処にもなかった。

「貴方の望みはなんですか？」

「………戦いを——鬪争を、俺、は……同じぐらい、強い奴と、殺し合つて、勝つて……勝利の快感に、浸りたい」

「——解りました。お父様から要望をかなえるよう命じられましたからね、その願い。私がかねえましょう！」

教会の追放者

神の死を知った。それを、上司に問い詰めてしまったイリナとゼノヴィアは教会から追放された。

教会は異分子をひどく嫌う。かつては聖剣使いとして尊敬の念を集めた彼女達も、神の死を知れば即座に異端。尊敬から嫌悪の目に変わった周りの態度に、打たれ弱いイリナは耐えられなかった。

「——ねえ、ゼノヴィア……主が居ないって、私達、なんのために祈ってたの？」

「イリナ……」

正直、自分もどうすればいいのか解らない。イリナは黙り込んだ上層部に詰め寄っていて、最終的には有無を言わさず異端認定された。明確な答えは返してこなかったが、恐らく神の死に何の嘘偽りもないのだろう。ならば、祈りになんの意味がある。なんのために悪魔達と戦っていた。

「すまない、私も、解らない」

「……だよ、ね……これから、どうしよっか」

「いつそ悪魔にでもなってみるか？それとも、もう神に身を捧げる必要などないのだから、子供でも作って幸せな家庭でも作ってみるか？」

「悪魔……子供——イツセー君……」

ブツブツと呟き出す相方。正直、かなり怖い。

しかし、子供か。自分で言った言葉ながら、改めて妙や気分だ。子供と言えばあのペスト、父上と呼んでいた存在が自分と同年代の王神帝だということに今更ながら驚く。

そういえば彼はアーシア・アルジェントやフリード・セルゼン（？）を保護していた。自分達も、保護を頼めないだろうか？このままでは路頭に迷うのみ。はぐれの行き着く先は大概が墮天使と相場が決まっているが、コカビエルとの一件の後、正直入りにくい。と、その時——

「うんうん。りよーかいペストちゃん、私もミカド君のところそろそ

る帰るから、お土産期待してなよ〜」

ちようど今考えていた人物の名前が聞こえ、振り返ると白い肌に金色の髪という白人のような色合いで、アジア系の顔立ちの女性が狐のデコがあしらわれたデコケー片手に話し込んでいた。通話が終わったのか、携帯をしまう。

「——もし、少し良いだろうか？」

「はい？」

王神帝はリアス・グレモリーに呼び出された。当然無視した。

いい加減、ここは自分の領地だと騒ぐのだから勝手をするなとうざったい。なので——

「日本神話よりこの地を預かることになった。お前等は俺の許可なくここに住むことは出来ない。これから言葉遣いに気をつけて暮らすように」

「何を言っているの？人間がはぐれ悪魔や墮天使幹部が攻めてくるこの地を管理できるつもり？」

「はい、お前出てけ」

「——な!?!」

途端、日向の神が日光に神力を混ぜ風の神がリアスの身体に絡みつく風を発生させ、土の神と紐の神が縛り付けて町の外まで運んでいった。

「——土地神権限超便利」

「て、てめえ！よくも部長を！」

「潰れろ」

「ぶへ!?!」

下向きの風によって床に押しつけられるイツセー。しかし、赤龍帝の籠手を出して力を倍化しながら立ち上がろうとしている。まあ名も無き神は神というより精霊に近い存在だ。一応神滅具持ちであるイツセーなら抗えるのだろう。そう考えるとリアス・グレモリーが混乱していなかったら弱い神だし、消されていた可能性もあるわけか。

それを理由に追い出せるが日本神話にいろいろな世話になつてゐるからなあ、と不必要な犠牲は払わない方向で神々への命令を解除する。「まあ、そういうわけでこの土地の靈的支配者は俺だ。今後は発言に気をつけろよ?」

「待てよ、部長を返せ!」

「学ばない奴だな」

『全くだ——』

「——ッ!?!」

倍化した力で殴りかかったのに、あっさり片手で受け止められる。籠手から呆れたような声が聞こえてきた。

「よう、お前がドライグか? エクスカリバーの初代担い手と知り合いなんだつてな? 体用意してやるからうち来ない?」

『誘いはうれしいがな、俺は自分の失態で封印された。なら、いずれ神器からでるなら自分の力だと思つていろよ』

「そいつ弱そうだしそのうち禁手の力使うのに代価差し出してくるかもだぜ? そんな時に体全てを貰えよ。で、覇龍起きた時乗っ取つてみれば?」

『ふむ——小僧、お前此奴に勝ちたいんだよな?』

「お、俺の体はやらねえぞ!」

『冗談だ。貴様如きを糧にしたところで、この男には勝てんよ』

ククク、と馬鹿にしたように笑うドライグ。と、そこへずぶ濡れのリアス・グレモリーが戻ってきた。神々にどこか沼に落とされたらしい。泥臭い。

「良くもやつてくれたわね!」

「やるさ。俺には今、その権限があるからな」

「日本神話に抗議してやるわ! 覚えておきなさい!」

「魔王の身内だから殺すのは面倒ごとで発展しそうだが、先に手を出してくれんならいくらでも言い訳は立つ。抗議なんてせず来いよ、かかってこい」

「——ッ!!」

ギリイ、と齒軋りするリアス。ケラケラ笑うミカド。

「リアス、やめなさい」

「ソーナ？貴方もこの男の味方をするの？随分躰られたようね、おばさま達やセラフォル様が知ったら悲しむでしょうね」

「味方も何も、今の貴方に正当性は少しもありませんからね？それと、ミカドくん。手続きは終わりました。二人の転校はつつがなく」

「おう、サンキューな」

「二人？」

と、イツセーが反応する。

「この前の二人が追放されたらしくてな、アーシアと同じく学園生活でも楽しませてやろうかと」

「転校生の紫藤イリナです、仲良くしてね♪」

「ゼノヴィア・クアルタだ。仲良くしてね」

「——あの二人も抱いたんですか？」

「ゼノヴィアは普通に求めてきて、イリナは頻繁に覗いてるが部屋に来たことはないな」

「——相手にされる数が減りそうですね」

墮天使総督

授業参観が近づくと、王神家は騒がしくなる。主に成人した見た目の魔人達が誰が行くかと争うためだ。

駒王学園で教師と働いている王神辰が唯一の突破口なのだがシンは「学園に迷惑かけねーなら誰でも」と適当な性格なので実力でもぎ取ろうとする。

「ああ、悪いが今回お前等留守番な」

「「え!？」」

「代わり見つけたから其奴に頼む」

「そ、そんな、我が輩せっかくサーカス芸を学んできたのに!」

仮面をとり端整な顔立ちを露わにしスーツ姿になったペストがその場にうなだれる。慰めるようにチュウチュウとネズミ達が寄り添うがあれ全てペストの一部なのだからただの一人演技だ。

「では、誰が来るんだ?———ですか?今日このために戻ってきた彼等ではないのだから———でしょう?」

「無理な敬語は気持ち悪いだけだからやめて良いぞ……誰って、まあお前等も知ってる筈。いや、あったことはないだろうが」

「「……?」」

ベタベタと体をすり付けていたゼノヴィアとそんなゼノヴィアをチラチラみながら頬を染めていたイリナが揃って首傾げていると扉が開く。

「おうい、もう入っていいか?」

「入ってんじゃねーか」

現れたのは着物姿の男。日本人では無さそうだが、誰だろうか?ゼノヴィア達は知っていると云われたが写真でも見たことがない。

「貴方は?我々は貴方を知っていると云われたが、見覚えがないのだが……」

「墮天使総督アザゼルだ。今度この町で会談を開くことになってな、その許可を貰いに金を積みに来た」

「そのついでに授業参観誘ったんだよ。魔王達も来るみてえだし、顔

合わせにやちようど良いだろう？ ついでに俺も会談に出ることになった」

「日本神話もな。ここ、もう日本神話のものだし……つーかお前は日本神話所属じゃないんだな」

「俺はフリーだよ。強いて言うなら俺自身が勢力の長だ。日本神話は同盟相手」

一つの神話と対等だと笑うミカドに、魔人達を見るアザゼル。コカビエルを呪ったというペストを始め、他の魔人達が主の学校の風景を見に行けるアザゼルの睨んでいた。

「……なるほど、な。歴代とは全く違う。参った参った」

「ところでアザゼル、マリカーやろうぜ」

「おう、俺は強いぜ？」

テレビの入力を切り替えゲーム画面にするとカセットを入れるミカド。ワンレースが終わるとコーラあるか？と聞いてきたアザゼル。コーラを持ってくるように命じると銀髪のメイドが瓶コーラと氷の入ったコップを持ってきた。

「ん？グレイフィア、お前何でここに」

「アザゼル、お久しぶりです。今は、ご主人様のお世話になっているのですよ」

「ご主人様だあ？お前、サーゼクスはどうしたよ」

アザゼルが何気なくつぶやいた言葉に不快そうな顔をするグレイフィア。漏れ出す殺気は、アザゼルが知るグレイフィアの力を大きく上回っており冷や汗が流れる。

「あれが、どうかしました？あんなもの、私にはなんの関係もありません。私はあれに汚されていない、完璧なる私なのですから」

「お、おう……なんか、すまん」

「いえ、解ってくださいったなら何よりです。すいませんご主人様、お見苦しいところを」

グレイフィアは申し訳無さそうに頭を下げその場から去っていった。アザゼルはその背を眺める。

「なんだ彼奴、何があつた？サーゼクスが浮気でもしたか？」

「ああ、あれお前の知るグレイフィアの弟だよ。近親同士の悪魔と交配させたら受精、着床するかの実験に使う虫の材料として玉とつたら姉さんに近づけたと喜んだから改造がてら姉に容姿を似せたら、自分こそグレイフィアだと思ふようになった」

「はー……なんか、怖いな彼奴。んじや、本物のグレイフィアはサーゼクスのとこか」

「いや？銀色ならここににいるけど」

「銀色？」

「同じ名前だと紛らわしいだろ？」

つまり本物の方から名前奪つたのか、しかも名前が髪の色って……容赦ない。というか結局何でグレイフィアがここにいるんだ？と首を傾げていると扉が開き長い銀髪を引き摺ったバスローブ姿の虚ろな瞳の女が入ってくる。体でも洗ってきたのか、ほのかに石鹸と果物の香りがする。

『ぎんいろ』とかかれた皿に置かれている食事をみると素手で食べ始める。

「……あれか？マジで何があつた？」

「落ち着きました。コーラのお代わりはいかがですか？おや——」

「——ッ！——あ、う——」

戻ってきたグレイフィアが銀色を見て不快そうな顔をする。それに怯えたように後ずさる銀色。

「何故、貴方がここに？虫相手に腰でも振っていればよろしいのに」

「——う、あ——あう」

「聞いているのですか？全く、返事もせず不愉快な——」

「ひっ——」

「グレイフィア、その辺。たく、銀色いじめんなよ。泣いちゃうだろ？」

「あ——」

「………申し訳ありません」

ミカドの言葉にグレイフィアが殺気を納め銀色がトテトテと近付

いてきてグレイファイアから隠れるようにミカドに抱きつき丸くなる。その姿はまるで幼子だ。精神が完全にぶっ壊れて幼児退行している。理由は、まあ何となく解った。自分と全く同じ姿をして、自分では全く勝てない存在に罵倒され続けられれば精神もおかしくなるだろう。それにしたって壊れすぎだが……何か別の要因でもあるのだろうか？

「そういうえば何で外に？虫部屋に居なくて良いのか？」

「——ッ！」

虫部屋という言葉に首を弱々しく横に振る銀色。実験、虫のために玉をとる、虫部屋、その単語から現状を大体把握するアザゼル。行方不明の墮天使は、多分此奴等に消されたな。コカビエルもそうなのだろうか？まあ、おそった其奴等が悪い。

「……………ん？うお、なんだこれキモ」

と、そんな事を考えていると目玉が大量に付いたツギハギだらけの肉の球体がすり寄ってきた。とてもきもい。みゅーみゅーと十字型の口から鳴き声をあげるそれを掴み放り投げる。ペットかもしれないので傷つけないようにしたが球体はボロボロと涙を流して逃げるように去っていった。

「お、ミコト。銀色外に出てるけどなんかあつたか？」

病気なら抗体細胞型魔獣打ち込んでやるが、とミコトに尋ねるミカド。と、ミコトはニコニコ笑っている。何かサプライズを考え今まさに教えるような、そんな顔。

「ふふふ。なんと、この度銀色ちゃんが妊娠したのです！」

「ほー……………」

「……………おおう」

「「おおー」」

特にどうでも良さそうなミカド、顔をひきつらせるアザゼル、パチパチ拍手する魔人にゼノヴィア、そんな周りの対応をみて同じように拍手するイリナ。銀色は目を見開いて固まり、己の腹を撫でる。

「というわけで今部屋は妊婦さんに相応しい環境を整えています。部屋の時間も加速させたし、明日の朝に戻せば明後日の夜には出産ですね

「いやあ、なかなか良いデータが入りましたよ。まさか天使、墮天使だけでなく悪魔も近縁種だったなんて」

「ん？そりや、当たり前前だろ？」

ミコトの言葉にアザゼルが何言ってるんだ？という風に呟く。

「悪魔だ墮天使だと分けられてるが、そもそもルシファーと聖書の神は親子だぞ。んで、同じ術方で天使やら悪魔やらを創った。さらにいや悪魔共の始祖リリスも下は神が創った。だから悪魔と墮天使、墮天使と人間で子供が作れるように理論上は天使と悪魔とも子を……え、まさかそういうことなの？」

「はい。悪魔と天使のハーフです」

「アザゼル、迎えに来たぞ」

「おう、ヴァーリか」

インターホンが押され、時計を確認したアザゼルが玄関に向かうと銀髪の少年ヴァーリが立っていた。アザゼルはまたな、と手を振り去っていった。

「彼はどうだった？」

「ああ、ありや相当やばいな。ねじぶつ飛んでやがる。どういう生活をしたんだか」

「いや、強いのか？」

「強いぜ、少なくとも、サーゼクス達超越者クラスだろうよ」

「いや、マリカーの事だが……やったんだろ？」

「……強かったよ。そういや、お前この前彼奴にあつたんだよな？」
「ああ。まあ、途中コカビエルの気配が弱々しくなってる。失態を片づける、というより後から来て漁夫の利だけをもらう、などと言う形になりそうだったから退いたが」

「それで正解だよ。帰り道、彼奴の使いたなもんにはあつたか？あつたなら、呪い食らってないか調べときてえんだが」

「はは。心配性だなアザゼル、安心しろ。もとより移動距離が短くなっていたんだ、不審者にあう確率はぐんと減った。誰とも会ってないよ」

「いや、距離が減ろうと彼奴の使いならそつちから会いに行くだろ」
「そういうものか？それより、マリカーだ。トゲ甲羅はなしでいくぞ」
「まだ根に持ってるのかよ」

腹の中に、子供がいる？あれの子が、自分の中に？

イヤだ、イヤだイヤだイヤだイヤだ。不愉快だ、不快だ。腹を今すぐ消し飛ばしたい衝動に襲われながらも力の殆どが封じられ虫は勿論自分を傷つけることも出来ない。

ふらふらと、一日だけの自由をどう過ごせばいいかも解らず家の中をさまよう。明日からまた時間の流れのおかしな部屋の中で、子供に栄養を与えるためだけに生かされるのだろう。

と、不意に扉の隙間から部屋を覗くツインテールの女が見えた。頬を赤く染め、目を潤ませ片手は体を支えるように壁に、もう片方の手はスカートの下にした、下着の中に突っ込まれ、水音と共に動く。

「……………」

虫の子供なんて、産みたくない。産むならせめて、人の形をした相手が良い。

「は、あ——ふう、ん——ツ！——ふ、は——」

「……………」

「へ？あ!!や、違——その——」

何やら慌てているが無視して部屋にはいる。部屋の主がこちらに視線を向ける。何しに来たんだ？という情欲の欠片もない視線。彼の腕の中でぐったりしている青髪の女は、不意に笑う。頬を赤く染めた、色つばい笑み。彼に何かを耳打ちすると離れ、彼はじつと銀髪を見つめる。

スルリとバスローブを脱ぎ捨て裸体を露わにする。男は、特に動かない。だが、離れない。笑みを浮かべ近付いていく。その笑みは、先程の青髪の女とよく似ていた——

「あ、は——こ、こんなによ、の…はじ…めて」

「仮にも元人妻だろお前？いろいろ期待したのにな」

「もう、いつかい……しましよう？」

「今日は元々お前の予定じゃないんだがな……つーか元々抱く気な
かったし……」

人妻だからなあ……とはいえ求めてきたのは向こうだし自分は
悪くないはず。しかし今日は本来ゼノヴィアとの予定だった。まあ、
彼女が譲ったわけだが。

「も、もう……もういつかい……」

「面倒くせえなあ、研究はもう終わったし返そうかな」

「……もう、いつかい……して、くだ……くだしい……」

「……へえ、可愛い頼み方してくんな。ま、どうせゼノヴィアは行っ
ちまったしな」

返す前に楽しむぐらい、まあ罰は当たらないだろう。

セラフオルー

「ミカド、あそぼ、あそぼ……………」

授業参観日。学校に向かおうとすると黒いゴスロリ姿の幼女がミカドの前でピョンピョン跳ねる。前が大胆に開かれており、胸の部分にバツテンシール。

「———オーフィスか。爺の姿から変わってるから誰だか解らなかつたぜ」

「ん。ミカドおんなすき。おんな、わかいほどいとわれきいた。ミカド、これであそんでくれる?」

「うーん、オーフィスの中の女好きと俺の女好きに大きな違いがあるな」

「———?」

オーフィスと呼ばれた少女の言うおんなすきは、多分女とよく一緒にいる、といたいなのだろう。だがミカドは姦淫を司る悪魔の因子を持つ故に性行為が好きなのだ。世界に一匹しかいない、番持たず性別のない彼もとい彼女には解らないのだろう。

「てか遊んでって、他に遊んでくれる奴いねーの?」

「かねのきれめはえんのきれめ……………あいつらおかねくれない。げーむかえない。われもうしらない……………そもそも、われあつめてない。むこうかってによってきたくせに、われになにもしてない」

「ところでそのやけに辿々しいしゃべり方は何だ?」

「キャラ作り。ルフェイが教えてくれた」

「あー……………なるほど。悪いがこれから学校なんだ……………帰ったら遊んでやるから家で待ってる。あ、リリースとは話すなよ? いらん知識植え付けられるぞ」

「ん。われひとつようなちしき（おもにげーむのこうりやくとしんさくすいーつ）あればほかのちしきいらない」

「え、今のどうやって発音した?」

口は動いてない。間があつたわけでもない。なのに含まれた意味が理解できた謎の発音に驚愕するとオーフィスはむふー、と胸を張つ

た。無表情で。

「良いですか。今から配る紙粘土で好きな物を作ってください。貴方達の脳内のイメージを表現するんです。そんな英語もある」

「ほう、俺たちや言葉が統一されてるから、こういったことはやらねえが、言葉ってのは奥が深いんだな」

英語教師の言葉に感心したようにほーう、と顎に手を当てるアザゼル。外国人風の見た目をしたアザゼルの言葉に誰もがねーよ、と心の中で突っ込む。

「Let's try」

仕方ないので造ることにする。とはいえ、何を作るか。取り敢えず粘土をいじる。そのうち頭の中に何か浮かんでくるだろう。アーシアはフリードを造っていた。かろうじてフリードと解る程度の出来だが、じつと眺めてえへへ、と笑っていた。

ゼノヴィアはデュランダル。イリナは下手すぎで解らないが、多分クラゲ。と、不意に視線を感じる。みれば窓硝子にべったり張り付いた魔人やオーフィス達。

「……………」

その中で一番フィギュア映えしそうなペスト（フル装備Ver）を造った。ペストが感極まって震えている。

と、不意に騒がしくなる。魔人達が原因ではない。彼等は一般人達には見えないように術を己にかけている。

発生源は、イツセー。リアス・グレモリーの裸婦像を造っていた。そう、裸婦だ。仮にも自分の主の裸姿を粘土で再現するのはどうなのだろうか？と思うアーシアとゼノヴィア。誰かがここまで再現できるほど体を堪能したのね？と言うと更に騒がしくなり、イリナは顔を赤くしてゼノヴィアとミカドを交互に見る。

ミカドは人形の神に命じて粘土で遊んでいた。

昼休み、購買で買った唐揚げをポイと池に投げるとザバリと飛び出したオーフィスが喰らう。そのまま水底に潜り姿を消した。一つ食ってからもう一度投げると再び飛び出してきた。

ロシアンカラアゲは最後の一つ。先程食べたのはオーフィス。パクリと食べる。辛かった。

池からあがったオーフィスは体をぶるぶる振って水気を払うとトテチトチテと歩いてくる。視線の先にはデザートとして買ったゴマ団子。片手にとるとあー、と口を開く。

投げると器用に口でキャッチして去っていった。

平和だなあ、と思っていると何やら騒がしい。聞こえてきた単語は、魔法少女撮影会。

魔法少女？と首を傾げ知人の顔が二人ほど浮かび、気配を探ればその知人の一人だと解る。せつかくなので顔を見せに行くことにした。

「だからよお、学校は撮影会場じゃねーんだ。そんな格好で来るんじゃないよーよ」

「でもでも、これが私の正装だから☆」

「脳腐ってんのかクソマ○コ」

ガリガリと頭をかくのは愛娘の一人王神辰。シンは面倒くせえなあ、まあ、教師としての体面は果たしたよなあ、と微塵もやる気のない感じられない態度。そこへ生徒会の匙元士郎がやってきて人垣を散らす。それを見たシンは欠伸をして去っていった。

人垣が完全に消えるると何時の間にかリアス・グレモリー達も居た。匙がリアス達に挨拶しているとソーナもやってきて、魔法少女コスプレ少女はソーナに向かって抱きついた。

「ソーナちゃん！見つけた☆」

「お、お姉さま!?!」

「よおセラ、お前ソーナの姉だったのか」

「あ、ミツくん♪」

ソーナが固まる中ミカドの話しかけるとセラと呼ばれた少女はぱあ、と嬉しそうな笑みを浮かべ飛びつく。

「ぶ、部長、お姉さまって……」

「ええ、この人が現魔王の一人、セラフォル・レヴィアタンよ」

「リアスちゃんお久しぶり☆サーゼクスちゃん達がこれなくて残念ね」

「ええ、本当に、来ると思っていたのですが……」

「え？だってお前もお前の兄貴も申請してないだろ？面倒ごとなくすための形だけの支配者とはいえ土地の管理者として、魔王クラスを無許可で入れるのはなあ」

「私は申請したよ☆」

某島に住む仮面の変態集団の決めポーズのように親指、人差し指、中指をたて目の横に持つて行くセラフォル。ゴロゴロと喉が鳴りそうなほど目を細めすりとミカドに額をこすりつける。

「…………お姉様と、知り合いなんですね」

「うん！昔ね、魔法少女もののDVDを物色してたミツくんに出会って、そこから仲良くなったんだ♪」

「あの時、別の知り合いの力を借りるために魔法少女の知識が必要だな。ルフェイはものほんの魔女だけど相手は創作物で良くあるタイプが欲しかったらしい。で、調べ物しているとセラに会った」

おかげで彼奴の協力を得られてメルヴァゾアぶつ殺せた、と昔を懐かしむ様子のミカド。メルヴァゾアってなんだろう？倒すには魔法少女の知識を欲している者が協力者に必要なようだが……。

「そ、それにしてもお姉様、その…………距離が随分と近いようですが……本当に魔法少女関係の知り合い、というだけなのですか？」

「いや、セフレ」

「なんか俺とやってからセラもソーナも銀色も少し変だな」

「ああ、それ多分私のせいだ」

疲れた姉妹を仲良く同じ布団に放置してきたミカドが呟くとリリスが応える。お前の？と首を傾げるとうむ、と頷く。

「貴族悪魔は私の肉片から生まれ悪魔でありながら秩序を良しとす

る。その結果が今の貴族、平民などに階級が分かれ管理体制が存在する悪魔社会。が、私は元々秩序を嫌う。その性質が奴等にもきっちり受け継がれ、私の因子を持つお前と交わることで活性化したのだから」

「えーと、つまり俺は悪魔を発情させる、と?」

「欲に素直にさせるだけだ。性に奔放になったのは、単にお前が私たちとやって巧くなっていたからにすぎん。つまり味わいたいけど求めるのは恥ずかしい、という恥ずかしさが消えただけで求めているのは奴等自身だ」

「淫乱なんだな」

「私の子孫だぞ?そして、私は奴等の祖だ」

ジュースを飲んでいたミカドを押し倒し見るもの全てをその気にさせそうな艶やかな笑みを浮かべるリリース。そういえばそうだな、と笑う。

「んで、俺にもあるんだよな。お前の因子……」

「そうそうどうでも良いから忘れるところだった☆実はリアスちゃんの眷属、封印されてただけだけど今回の一件で解除されることになったんだよね」

「今回の一件?」

「騎士君の禁手が評価されたの。今なら危険な僧侶も制御できるんじゃないかって」

「?騎士の禁手と赤虫の実力になんの関係が?」

「実際はただの口実だよ☆近々天使、墮天使とも組むから自分達の戦力を少しでも上げておきたいんでしょ。彼、将来的には神クラスも停止できるだろうし……あ、その子時間を止める神器を持つてるのよね☆」

時間、ねえ。と髪で隠れた右目を押さえるミカド。

「ま、ここはミツくんの町だから、ミツくんの許可がないなら封印は解いても冥界に送還するけどね☆」

「必要ねーよ。うん、良いんじゃないか封印解除。俺にや関係ない」

三大勢力会談

「天界とサーゼクスから漸く申請がきた。つー訳で明日の夜、いよいよ会談だ」

「それで、誰を連れてくんだ？俺は面倒ごと巻き込まれるかもしれないえなら断るぜ？」

「お前仮にもうちの最強の戦力だろうが……まあ、安全は三大勢力が保証してくれるみたいだから別に良いんだがな」

取り敢えずコカビエルのその後を説明する必要があるからミコトは確定として、後は、と魔人達を見回しているとジツ、とオーフィスが見つめてきた。

「……会議なんてつまんねーと思うぞ？」

「われにかげられたかつてなうわさけしたい」

「そうか、じゃあ良いぞ。代わりに気配は隠しとけよ？んで、取り敢えずペストもか……ゼノヴィアとイリナ、アーシアとフリードも来た方が良いよな。銀色ももういらねーし。後はグレイファイアもだな。んー……ゼノヴィア達を見つけてきたのはお前だったな、来るか？」

と、金髪の女性をみる。その魔人は食べていたいなり寿司を食う手を止めて、にこりと微笑んだ。

墮天使総督アザゼル、天使長ミカエル、魔王セラフオール・レヴィアタン、同じく魔王サーゼクス・ルシファアの三大勢力に加え、日本神話主神天照大神の姪ウカノミタマと、日本神話同盟勢力の長、玉神帝。

計六人が席に着く。他は立って控えている。

「よ、サーゼクス久しぶり」

「ああ、久しぶりだね。グレイファイアも……ひどい目に遭わされていないかい？」

「……………」

「グ、グレイファイア？」

愛する妻に心底不愉快そうな視線を向けられ狼狽えるサーゼクス。

リアスを含め混乱しているとセラフオルーがんー？と首を傾げ、あ、と気づく。

「もしかして、ユーグリットくん？」

「あ——？」

「あー、そう呼ぶとキレるぞ。こいつの中ではもう自分がグレイファイアだから」

「へー、拗れてる拗れてるとは思ってたけど、拗れるところまで拗れたねえ。拗れすぎてまともな気がしてきた☆」

セラフオルーが呆れたように言う。サーゼクスはまだ解っていないのか困惑している。

「てかお前よく気づいたな」

「マブダチだもん☆」

「そっちは夫だぞ？」

「サーゼクスちゃんはグレイファイアちゃんに一目惚れしたの。一目惚れってね、相手の容姿に惚れることなのよ♪」

なるほど納得だ。姉のDNA植え付けて完全に見た目を一致させたもの、容姿に惚れてりやそりや内面が違っても気付かないか。

「そ、それで本物のグレイファイアはどこに？」

「ほれ——」

とん、と床を蹴ると魔法陣が現れ、ほんの一カ月程しか別れていなかったのに異様に髪が伸びたグレイファイアが現れる。キョロキョロと戸惑うような視線を向け、サーゼクスで止まる。

「あ、サ……サーゼクス……」

「グレイファイア？グレイファイアなのか？」

「………はい、ずっと、会いたかった」

「グレイファイア！」

と、抱き締めるサーゼクス。メイド姿のグレイファイアの顔が不快気に歪む。

「………ミカド君、身勝手を承知で頼む。私の妻を、返してくれ」

「良いよ」

「だろーうな、そうかんだ——え、良いのかい？」

「もう実験終わったしな。なあ、ミコト」

「はい！」

実験?とあまり穏やかとはいえない単語に訝しむサーゼクス。逆にミコトはどこか誇らしげだ。懐から小瓶を取り出す。

「……………これは?」

「妊娠促進剤です。これで悪魔の数も安泰ですね」

「……………妊娠?」

「はい。貴方の妻の協力の下、造りました。あ、赤ちゃんも居ますよ」

「……………!?!」

ザワ、と魔力が溢れ出すサーゼクスを、セラフォルーが机に押さえつける。

「サーゼクスちゃん、やめてよね。私達魔王なんだから」

「ぐっ——き、君だって、ソーナ君が犯されたら町ごと吹き飛ばすんじゃないのか?」

「うん。私は悪魔だからね。守りたい者だけ守ればそれでいいよ☆
今のはサーゼクスちゃんの行動で、日本神話と戦争になると私が困るから止めたの☆」

利己的な言葉。王という立場にいながら民を思わぬ言葉は、リリスに言わせるところの彼女の因子の活性化——欲望に忠実な始祖らしくなる原初返りの影響なのだろう。

「すまない。落ち着いた……………」

「ん」

机に押しつけつつ拘束のために張っていた氷を溶かし離れるセラフォルー。

「ついでにこれが実験結果で生まれた天使と悪魔のハーフ。名前はノアちゃん。いるか?」

と、背中に天使と悪魔の翼がある幼子を取り出すミカド。天使と悪魔のハーフという言葉にミカエルが目を見開く。

「え、ど——な、は!?て、天使と?そんな、何故!?!」

「昔襲ってきた天使のきん〇ま取って虫に移植した。ほら、虫がいやらしい思いなんて抱くはずねえじゃん?」

だから墮天せずに交配して生まれた。と赤ん坊の頭を撫でる。取り敢えず時間操作の部屋に突っ込みまともに戦える年齢にしてからの方が良いのだろうか?とセラフォルに問う。

「んー、それって天使、悪魔が子をなせるほどの近縁種っていつてるよ
うなものだから、うちで引き取ると殺されちゃうかな☆」

「そうか。じゃ、ミコト、お前が育てろ」

「はあい」

ミコトはミカドからノアを受け取ると頭を撫でた。

「さて、取り敢えず自己紹介といこうか。俺は今代の魔獣創造者、王神
帝だ」

「魔獣創造者?」アナイレインジョン・メーカー『魔獣創造』の所有者ですか!」

「なら、君の部下は君の創った?父上とは、そういう意味か——」

「へー。まあ私はミツくんが何者でも関係ないけどね☆」

「やっぱりか」

ミカエルとサーゼクスが驚愕しセラフォルはどうでも良さそうに笑い、アザゼルは諦めるように肩をすくめる。

つまりペストなどは彼の力により創られた存在。だとするなら、彼は歴代最高峰の所有者ということになる。

驚きながらもウカノミタマも自己紹介してきたので、サーゼクス達も改めて名乗る。名乗った後、天使長ミカエルはジツとフリードを見る。

「その、報告では彼はグラムを持っているらしいですがグラムは元々

——」

「僕の物、ですよねミカエル様」

と、ミカエルの護衛のフリードに良く似た男が言葉を続ける。

「久し振りだね、失敗作のフリードくん」

「——ジークフリート」

失敗作?と、フリードとジークフリートと呼ばれた男を交互に見る
アーシア。顔立ちは似ているが、兄弟なのだろうか?それにしたつ
て、仲が悪そうだ。

「グラムは元々北欧の英雄シグルドのもんだ。んで、シグルドの死後

お前等が勝手に持ち去って、剣自身がフリードを選んだ。文句言えるのは北欧だけだと思いがね？」

「グラムが失敗作を？笑わせないでくれないかな。真の英雄シングルドの末裔は、この僕なんだよ」

「あつそ。どうでも良いわ。それより会談だ会談」

「あ、ああ……」

まずは今回の会談を行うに至ったコカビエルの暴挙。リアスはそれを説明する。説明した後、コカビエルを回収した魔人派閥に視線が集まる。

「それで、コカビエルは？」

「こんなか……」

と、虫かごを取り出すミカド。空間を歪曲させているのだろう。中に小さな木々が生えた島が見えるが、おそらく本来はもつとデカイ。そこで、殺し合いが行われていた。

コカビエルが光の槍を放ち、コカビエルが貫かれる。10数名のコカビエルが殺し合い、地面に散らばった肉片の数が元々はその程度ですまない数だという事を教えてくる。

「コカビエルさんの願いは自分と拮抗する力を持つ者を打ち倒してその快感を得ることでしたからね。しかし、それを得るために多くの命を奪うなど以ての外ですし、仮にも墮天使幹部、そこそこの実力者ですから相手を集めるのも大変なんですよね」

と、ミコトが説明し出す。

「そこで考えたんです。コカビエルさん自身を増やせばいいんだって！」

だってそれなら、実力はきちんと拮抗しているわけだから。

なのでコカビエルに以前イッサーを改造した時にとった赤龍帝のデータを埋め込み細胞そのものを倍にして自動的に増える能力を与えた。溶けたような、混じったような肉塊になり増えると正真正銘のコカビエルが二人に増える。これを延々と繰り返し約百人になるように調整した。

百人が増えた後コカビエル達は一斉に目覚める。目覚めたコカビエルは見覚えのない森で、自分の偽物を見つけ罫か何かかと思いつき、攻撃されたコカビエルも敵と判断して、殺し合いが始まる。

最後の一人になると再び分裂。先ほどいきなり襲われた記憶を持つコカビエルは直ぐに自分の偽物と思わしき連中に襲いかかり、後はこれを延々に繰り返す。

「記憶を引き継げるのは生き残った個体のみですから、コカビエルさんは常に勝利した記憶のみが残りますし、まさに完璧な対応ですね。墮天使幹部クラスの死体も、いろいろ使い道ありますしね」

ふふん、と胸を張るミコト。三大勢力は、ドンびいていた。

「ほら、コカビエルさんもこんなに楽しそうに笑ってる」

「最初は違和感、でも数をこなしや、それが自分だって解ってくるからな。でも、殺されかかった恐怖や自分は殺そうとしたという記憶が馴れ合いを決して行わせず殺し合う。そりや、精神も可笑しくなるわな」

楽しそうで何よりです、と笑うミコトに涎を垂らし虚ろな目で自分を殺し首を掲げて、別の個体に笑われながら胸を貫かれるコカビエルを眺めながらミカドはケラケラ笑った。

その後も会談が進み、世界に影響を及ぼしかねない二天龍と魔獣創造者の意見も聞くことになった。まずはヴァーリ——

「うん、俺はKGEに勝ちたいな」

「KGE？」

「アザゼルにたまには鍛える以外にも趣味を見つけれ、と言われたろ？その時の通信ゲームで、俺が負けて、散々煽られた相手だ。俺がゲームにはまった理由でもある。確か、king god emperorの略だったか……」

キングゴッドエンペラー

王神 帝？とミカドを見るアザゼル。ミカドはあつたな、と言いたげな顔をしていた。

「ま、平和な願いで何よりだ。で、赤龍帝は？」

暫く言いよどんでいたイツセーだったが戦争になればリアス・グレモリーを抱けないと言われれば和平が良いと叫び出した。

「最後にミカド、お前さんは？」

「俺は基本生きたいように生きるだけだ。美味しい飯食って綺麗な女抱いてだちや子供達と騒いで楽しむ。それ以外にや特に何もいらねえよ」

と、その時だった。世界の時が止まる。上空に魔法陣が現れ、ローブ姿の——骨が校庭に落ちた。

よく見るとローブは血だらけで、ローブから無数の虫が現れ空へと羽ばたく。魔法陣から現れたローブ姿の人間達は暴れ回るがあつと言う間に虫に食われ骨になつて校庭に落ちる。

「——ミカド」

「ん？ああ、転移つてのは空間を歪めるだろ？よく紙を折り曲げて繋げる例えがされるが、逆に言えばこの重なる紙の隙間は存在するんわけだ。で、この町の外から町の中に俺の許可なく移動するとその隙間にすむ肉食の虫達に襲われるようにした」

しかも術者ですら認識できない転移の際の空間の隙間から襲う虫達だ。完全なる不意打ち。まず防ぎようがない。

「そうなるかと解らねえのが時間停止を行った奴だな」

「これは、ギヤスパ―君の神器だね」

「じゃあ其奴が裏切り者か、この中に裏切り者がいて許可が下りた自分に使わせて何人か入ってきたつてところか——」

と、そこまでいってギイン！と金属音が響きわたる。発生源はミカドの顔の横。ジークフリートが振るつた剣が、フリードの持つ魔帝剣グラムに防がれていた。

禍の因

「裏切り者はお前か、ジークフリート」

「——フリード、僕の前でこれ見よがしにグラムを使うなよ」

グラムを振るうフリードに憎々しげな、寧猛な笑みを浮かべるジークフリート。フリードはグラムを振るい校舎の外に吹っ飛ばした。

上空からは、漸く魔法使い達が生きたまま降り始めた。元々隙間に住む虫はその特性にステ振りしてるから戦闘力は低い。補充されるように召喚されるみたいだし、補充のスピードを訝しみ防御魔法を張れば転移できるのだ。

「所詮は不意打ち用の魔獣か」

パチンと指を鳴らし虫達を隙間に戻す。そもそも今回安全を保障しなくてはならないのは三大勢力なのだ。ミカドや日本神話が何かする必要はない。

「フリード、お前の偽物はどうもお前と戦いたいらしい、相手してやんな」

「ああ。私も、彼奴とは因縁がある」

フリードはそういうと外へと飛び出した。

ミカドはクルリと振り返る。動けるのは魔人達と各トップ達に、ヴァーリと木場祐斗。兵藤一誠と会談中からずつと手をつないでいたりアス・グレモリーと状況把握しようとしているソーナ。ゼノヴィアとイリナは止まっている。帰ったら改良しよう。

ソーナが動けるのは恐らくセラフォルと同じく原初返りで力が上がっているからだろう。セラフォルも先ほど本来なら格上の筈のサーゼクスを押しえつけてたし。

「ま、何時までも時間が止まっているのも気持ち悪いなフクロノス、出てこい」

と、髪を書き上げ右目を露わにするミカド。彼の右目をみた事があるのは魔人達だけだ。だから、驚愕する。

時計だった。金色の時計。水晶体の中に時計を埋め込んだかのよう。黒目も白目も瞳孔もない。文字盤の上を黒い針が三本。一番長

く、細い針がカチカチと動いている。

それが、ズルリ飛び出てくる。精神がぶっ壊されて幼児退行しているグレイフィアはひっ、と怯える中異常は続く。

ゴポリと空っぽの眼孔から黒い泥のような液体が溢れ出し飛び出た眼球に纏わりつく。

バサリと二対四枚の翼を広げたのは単眼の梟だ。顔の中央に着いた時計がカチカチ音を鳴らす。

「——ホウ」

ミカドの頭に着地するとグリーン、と首を横に回す。200。以上回る首は部屋全体と窓の外を見回し、止まっていた者達が一斉に動き出した。

「何だ、其奴」

「フクロノス。梟と時の神クロノスをもじって名付けた時を操る魔獣だ。昔、俺がまだ未熟だった頃シヴァに見つかって片目を失ってな。それ以来俺の目の代わりをしてくれてるペットだ」

「ホー♪」

嘴の下を撫でてやると気持ちよさそうに目を細めるフクロノス。フクロノスって、こいつネーミングセンス——と呆れるアザゼル。

「え？あ、あれ……な、何が……？」

「おうみろイツセー、裸の姉ちゃんだ、好きだろお前？」

「なにい!?まじか!」

と、窓に張り付くイツセー。確かに裸の女は居た。服の中に侵入した虫を捕ろうともがいていた女だ。当然身体は食われ骨や内蔵が飛び出している。しかも虫達はもう居ないので中途半端に生きながらえている。

「う、ぶ……うええええ!」

「あははは!」

スケベ顔から一転、顔を青くして吐き出すイツセーを見てケラケラ笑う。

「お、お前、なんつーもん——」

「でもほら、なかなか良い胸してたから胸の部分は残してるぞ?」

「うるせえよ！てか、何が起きてんだよ！」

「テロだよテロ。あそこの教会の戦士のくせに何故か魔なる剣、それもニーベンゲルや北欧の剣を使うフリードのパチモンが情報漏らしで、んでテロリスト達がきた。最初は対応しようとしたけど考えてみれば三大勢力が安全保障してくれてるし、やめた」

「お、お前はこの町の管理者じゃないのかよ」

「霊的な方のな。後土地神代理。だから、氏子でもない奴らが今回の件で死のうと俺は知らん」

そもそもミカドがリアスに管理の甘さを説いたのは単なるこの町の管理権限を奪いやすくするための口実だし、別段管理不届きで人が死んでいることを、心の底から責める気はない。どうせ甘い管理なら俺にくれよ、お前が管理者気取つてると五月蠅いし、というのが本音である。

「でも何で突然景色が」

「突然じゃないわ。イツセーは、さっきまで止まっていたのよ」

と、リアス。ジロリとミカドを睨みつけてくる。

「この地の人間を守る気なんてなくせに、良くも土地神を名乗れたものね」

「土地神が管理するのは霊的なものと、氏子の願いだ。俺は土地神であつて領主じゃねーの」

だから最悪この地に疫病が蔓延ろうと、願いがなければ何もしない。それが日本の神々だ。だからこそ様々な神話が幅を利かせ自分達の神話を広めることが出来たのだ。結果日本神話を侮る者も多くいるが、戦争にならないようにきちんと同盟を組もうと日本神話を良く知る多くの主神達は考えている。

「止まるって、まさかギヤスパー!?!」

「悪魔は眷属を利用され、天使は教会の戦士に内通される、か。こりや遺憾の意を示さなきゃなあ」

「だがアザゼル、安全を保障したのは俺たちもだぞ?」

「わーつてるよ。ヴァーリ、ジークフリートはフリードと何やら因縁あるみたいだから、取り敢えず魔法使い共をやれ」

「了解した」

『Vanishing Dragon Balance Breaker!!!』

「カッ！と白い鎧を纏い外へ飛び出していくヴァーリ。じー、と外を見つめるゴスロリ幼女。」

「こんだいののはくりゆうこう、さいきょうとうわさ……wktk」

とか良いながらスマホを取り出しパシャパシャ写真に収めている。

『1, ∞ドラゴン

最強と噂の白龍皇雑魚相手に禁手化！テラワロス←画像投下

2, 金髪魔女っ娘

「獅子は兎を狩るのにも全力」キリツwww

3, 夢と幻の赤い龍

草生えるwww

4, 以下名無しに変わってVIPがお送りします

てか何処じゃここ

5, ∞ドラゴン

三大勢力会谈

6, 以下名無しに変わってVIPがお送りします

やはり襲撃を受けとるのか。うちもロ——バカが今こそとか張り切った

7, 以下名無しに変わってVIPがお送りします

鳥に鳩にコウモリ共か、集まって何をするかと思えば、直ぐに裏切り者を出すとは骨稽こっけい

8, ココノエ

漢字間違えておるぞ？

9, 以下名無しに変わってVIPがお送りします

変換した後消して付け足しとる。キャラづくりじゃ、ふれてやるな
10, 夢と幻の赤い龍

k w s k

以下名無しに変わってVIPがお送りしますさんがログアウトしました』

「ムフー、と無表情ながら満足そうなゴスロリ幼女。ケータイをしま
い周りの状況を改めて把握しようとする。」

「イツセーがリアスとどつかに転移していた。」

「アザゼル、一つ聞きたい。君はミカド君とも直ぐに友好を築こうと
したようだね。彼の持つ神滅具に気付いて。そこまで力を集めて、何
をしようとしていた？」

「備えていたんだよ」

「備える？ 和平を申し込んだ後に、不穏になる物言いですね」

「うたがってかかるとかマジホビロン」

「……なんですか、この子」

「ミカエルの疑うような視線にゴスロリ幼女が良く解らないことを
言う。アザゼルは意味が分かるのかそーだな、マジホビロンだな、と
頭を撫でる。」

「カオス・ブリゲード『禍の団』……組織名と背景が判明したのはつい最近だが、それ以前
から」

「さんぎよういない」

「……見つけたの最近、三大勢力の危険分子神器使い込み、頭は二天
龍を超えるドラゴン」

「ゴスロリ幼女の言葉に三行にまとめるアザゼル。その最後の言葉
に、サーゼクス達が目を見開く。」

「そうか、彼が動いたのか。『ウロボロス・ドラゴン無限の龍神』オーフィス——」
「ん？」

「神が恐れたドラゴン、この世界が出来上がった時から最強の座に君
臨し続けている者」

「サーゼクスが戦慄している中、不意に女の声が聞こえてきた。」

『そう、オーフィスこそが禍の団のトップです』

「え？」

「カッ！と床に魔法陣が浮かび上がる。」

「——レヴィアタンの魔法陣」

「…………ヴァチカンの書物で見たことがあるぞ。あれは、旧魔王レヴィアタンの魔法陣だ」

サーゼクスが呟きゼノヴィアが続ける。魔法陣の中から、一人の女が姿を現した。

「ごきげんよう、現魔王サー——」

「えい」

ぶち、とゴスロリ幼女が現れた女の首を引っこ抜く。脳が発した命令に従い得意げな笑みで口をパクパクと暫く動かしていたが、直ぐに止まる。

「とったどー…………われのなまえかってにつかういけない」

会谈終了

剣と剣がぶつかり合う。片や一本。片や三本。その全てが伝説級の魔剣という異様な光景。

「ちいーこのー！」

「――」

三本の腕を持つのはジークフリート。その三本目の腕はトウワイス・クリティカル『龍の手』というドラゴン系神器で、本来は籠手型だが三本目の腕として独立した亜種。

振るう剣はバルムンク、ノートウング、デイルヴィング。

対するフリードが持つのは魔剣の頂点、魔帝剣グラム。

左から迫る剣を刀身で弾き、右から迫る剣を柄頭で手首を打ち止める。最後の一本は身を逸らして躲し剣を引き戻して切りかかる。

「――ッ!!」

とつさに飛び退き致命傷は避けるが浅く切られる。ドラゴン系の神器を持つジークフリートは、それだけで虚脱感が襲う。

「くっ、何故……例えばグラムを手に入れたとしても、僕は後四本の魔剣に選ばれたんだぞー！」

「そうだな。私は、選ばれたというより誤魔化しているだけにすぎない。ああ、お前と違い失敗作なのだろうさ」

フリードはグラムを構える。オーラが溢れ出し、地面がひび割れる。

「だが、だからこそ、私自身を祖に誤魔化す以上は、この剣が誤魔化せられてくれている以上は、祖に、この剣に恥じぬように極めるだけだ」

「ふりーどさん△△」

と、ヤジが聞こえてきたが無視して突っ込む。

「ば、禁手化！」

慌てて禁手を発動。腕が更に三本増え六刀流。内四本が伝説の魔剣であり、二本は光の剣。それらのオーラを総動員して、フリードの一撃に剣が弾かれる。

「――ッ!!」

「終わりだ」

「させないよ」

「——ッ!?!」

とどめを刺そうとした瞬間、槍が首をめがけて伸びてくる。とっさに躲し距離をとると漢服を着た男が立っていた。

「あれは、トウル・ロンギヌス黄昏の聖槍?!」

「しっているのからいでん」

「誰ですからいでんって——」

また外野がうるさい。フリードは警戒しながら男を睨む。男は楽しそうに笑い周囲を見回す。

「はじめまして、三大勢力の長。日本神話のウカノミタマ殿、そして、俺と同じ神殺しの力を宿す者達よ。俺の名は曹操」

「ひゃっはー! レアキャラだ、皆の者かかれえい! 持って帰って改造実験のオンパレードだあ!」

「ゲオルク!」

と、大量の霧が曹操達を包み込む。霧が晴れると曹操達の姿は無かった。

「ち、逃げたか。いや、虫が反応してないという事はこの町内での転移の筈——ま、いつか。テロリストだし何時か会えるだろう」

「そーそーまじこしぬけ」

「え、あれ曹操? ああ、そういや名乗ってたな」

「ちゅーごくのえいゆうそうそう、きりすとこのせいそう、ばらんすぶれいかーのもでるはいんど、まじかおす」

「成る程。実質カオス・ブリゲードの支配者は自分であると言いたいわけか」

「ワロスwww」

せつかく何か面白そうな相手を見つけたが逃げられ舌打ちするミカド。まあ切り替えが早いあたり珍しい石程度に欲しい、というだけなのだろう。

「そーそーなのにきんぱつろーるのつんでれろりじゃない。おわこん」

「そりや終わってるな」

「えーつと……つまり、お前は組織を立ち上げるつもりなんてなく、勝手に周りに集まった奴らが組織を名乗っていた、と」

「そうそう」

アザゼルの言葉にオーフィスがこくこく頷く。何というか、こいつってこんな感じだったっけ？と疑問に思う。しかし事実として彼女はこんな感じになっている。

「かつてになまえつかわれてあくのそしきのおさにされた、そんがいはいしょーをようきゆうする」

「損害賠償って、何を要求するんだよ」

「くび、おいてけ」

「……………」

アザゼルは転がっているカテレアの首を見る。先代レヴィアタンの末裔で、内乱に負け冥界を追われた真なる魔王の血筋。その实力はまあ、最上級ぐらいは多分あるだろうからそれを瞬殺するこの幼女は間違いなくこの中でもトップクラスの实力者。

「しかし、何も殺さずとも……まだ、話し合いの余地が」

「ないよ？あいつらそもそもはなしきない。ばかだから」

「だ、だが、それでも」

「そもそも、にほんしんわもおそつたれんちゅう、あくまのつごうでゆるしていいの？」

「い、いや、それは……だが、彼女から情報を聞き出して司法取引を行う手だって」

「ん…………」

と、オーフィスがミカドを指さす。ミカドはなにやら複数の虫からでる管を剥き出しの脊椎につけていく。

「禍の団の構成は？」

「はぐれ墮天使数名、旧魔王派全て。魔法使い複数、アーサーチーム、英雄派です」

「きゆうまおうはいがいk w s k」

「不明です。お互い不干渉なので。旧魔王派は現在、現貴族悪魔の数名と関わりがあります」

「ほう、どんな？」

「ディオドラ・アスタロトを始め、フェニックス家の使用人、各地の領民複数、等です」

「だってよ。セラ、これやるよ」

「お、とと……」

ポイツと投げられたら首を受け止めようとするセラフォル。首についていた虫達がブブブと羽を振動させ宙に浮いたので受け止める必要はなかったようだ。

「これも虫か」

「虫は何かと便利だぜ？何より生物としてもっとも繁栄している。虫すべし」

「むしすべしーい。えいようかもたかい。はんしよくりよくも……みらいのえいようげん」

「む、虫……繁殖……」

と、銀色がカタカタと震えだした。

「転校生のヴァーリ・ルシファアだ。アザゼルは総督としての仕事に忙しくてな、俺が代わりに君達を鍛えに来た。何、安心しろ。神器や特技を鍛えるのはゲームのキャラ育成とそう変わらない」

『久しいな白いの』

『赤いのか。なにやら覇気を感じぬが』

『今回の所有者を見比べて、な……あの剣の担い手に会い、少し昔を懐かしむと、本当、どうしてこれが今代なのかと泣きそうになる』

転校生としてオカルト研究部にやってきたヴァーリ。ルシファアという単語に悪魔達が固まる中ドラゴン達が話し込む。

「る、ルシファア？貴方ねえ、いくら何でも不敬よ」

「不敬も何も俺は旧魔王ルシファアの血筋だ」

「……………へ？」

—— ∞ドラゴンさんがチャットルームに入室しました——

∞：バンワー

—— 金髪魔女っ娘さんがチャットルームに入室しました——

金：あれ、何か変わりましたね

∞：あれじゃあ2ちゃんスレと知り合いに言われた。新しく設定してもらった。

—— 眼帯おじいちゃんがチャットルームに入室しました——

眼：バンワー

眼：何か名前を入力してくださいとでたんじゃがこういう事か。うむ、解りやすくなったな

—— OUGONバットさんがチャットルームに入室しました——

O：ふむ、して三大勢力会談とやらはどうなった？

—— アローハーさんがチャットルームに入室しました——

ア：其奴は俺も気になるな。ま、どうせ表面上ばっかでうまくいくとは思えないが

—— 嫁が怖いさんがチャットルームに入室しました——

嫁：バンワー

嫁：お、集まっておるなーで、何の話を……おお、三大勢力か。何でもアザ坊が敵に回しちゃやばい奴が居るからと潜んだ不穏分子を大量粛正しているそうだ

O：身の程をわきまえたというわけじゃな。しかし、呼び方で個人を特定されることもある。そのくせ直せ

嫁：堅いことを言う****

嫁：ん？なんだ？

∞：本名バレ防止

—— 破壊神さんがチャットルームに入室しました——

破：彼が敵に回したから………もしかして、彼かい？

眼：知っておるのか破壊神

破：知っている。英雄の卵。

ア：英雄の卵お？このご時世に？へえ、そんなの居たのか知らなかったなあ

破：英雄、というのは正確ではないかもね。彼は、何かを救う気はない。彼にとって全ての命が失っても取り返しがつく。少なくともそう思っているから、わざわざ救ってやる気概がない。楽しめればそれで良い

〇：それは寧ろ悪役ではないか

破：もし彼が歴史に大きく名を残すとしたら、殺しても良い相手、テロリストで遊ぶだろうからね。まあ、ようするに英雄になろうとすれば出来るだけの才覚を持つ

ア：けどよお、魔王の血筋だの英雄様だのがいらつしやるらしいぜ？

破：血は所詮血だ。血は争えないなんて、祖先に恨みを忘れられない奴の言葉。僕は何の興味もないよ。今興味あるのは、僕が殺す気でかかり、片目のみを失い逃げた彼だ

——三日月ドラゴンさんがチャットルームに入室しました——

三：強いのか、其奴は？

破：少なくとも、私が知る人間の中では最強だろう

三：そうか

——三日月ドラゴンさんがチャットルームから退室しました——

「……………あ、場所を聞くのを忘れていた。いや、こういう場所で個人情報ほどの道聞けなかったな」

もぐもぐとバナナを喰いながら、男はケータイをポケットにしまった。

友達との晩餐会

「本日の料理は魔王の子孫の女体盛りだー！」

「どんどんぱふぱふ」

切り刻まれ焼かれた首なし死体を前に笑顔のミカド。対面に座るオーフィスはパン、とクラッカーを鳴らす。

「これ処女？私、食べるなら処女がいいんだけど。この際少女じゃなくても良いから」

「あ、血を先に抜いてるぞ。因みにこの年で処女だった」

「おとこにあいてされてない？かわいそー」

「んふふ。女の肉は胎盤が美味しいんですよ。蛇に食べればそれもそれで美味しいんですが」

「俺は普通に心臓が好きだな」

他に囲むのは、金髪のアジア系の顔立ちの女に黒髪の東洋風の女性。

「けどミカド君は元とは言え生粋の人間なのに人型食うのに躊躇わないんですね？あ、カーミラさんもか」

「んー？食べるもんは基本的に食うぞ。こんなの豚肉とさして変わらんだろ」

「おやおや解ってませんね。人型で知性を持つ生き物は、生きていた時を想像して食べるんですよ。その人生を自分が終わらせたという幸福感、これに勝るスパイスはありません」

「私は若い女の、未来を想像するわ。私が取るはずだった年を受け持ってくれるような気がするのよね。血はそのまま浴びて若さの元になるし、まさに捨てるどころなしよね」

「いや、骨は捨てるだろ」

「われこつずいすき」

これで本当に捨てる部位が消えた。

「姐己ちゃんは最近どう？いい男見つけた？」

「んー。最近の権力者って世間に逆らえないんですよ。昔みたいに楽しむような処刑も出来ないし、退屈な世界になったんですよ」

「そうよね。好き勝手いきようとする他の神話が黙ってないし。何で昔は散々あがめさせたくせに、今になって隠れるのかしら？」
「人間が自分達の予想以上に発展したからだろ。科学とオカルトが合体してメルヴァゾアみたいのが出たら困るだろうし」

まああれは本当に偶然生まれたようなものだろう。そう簡単には生まれない。けど、主神クラス程度なら造れないこともない。

「でも人なんて簡単に絶滅できるんじゃないの？神様なんでしょ」
「日本じゃ荒御霊を崇めることで鎮める。その荒御霊は崇められることで神格を得る……ようするに、それがわざわざネアンデルタール人達の住む世界にやってきた理由だよ。崇められることで神格を得る……」

「でも日本神話はそのあたりどうでも良さそうですよね？布教しないし、外の神話見逃してるし」

「日本神話は数少ないこの世界生まれの神々だからな。いや、精霊に近いけど……後、興味ないのはインドもだぞ。ありや、システムが形と意志持った日本神話と似た存在だからな。だからこそ日本神話と本気で事を構えたい主神はいないし、シヴァは最強なんだよ」

そういう意味じゃ、帝釈天もよくやる。システムからはずれ自身の我を優先するのだから。是非とも会いたくない。あのシヴァとやり合ったような奴に目を付けられるなんてごめんだ。昔より強くなつたとはいえ、未だあの破壊神に勝てる姿は想像できない。

魔人達ならどうだろうか？いや、彼等の創造主である自分がシヴァに勝つイメージが出来ないのに勝てるわけがないか。

「実力的にはメルヴァゾアの方が上のはずなんだがなあ。何か、こう、あれだ……威厳がないからかな」

そういう意味じゃ女にだらしなくそのせいで嫁が世間に迷惑かけまくってるゼウスとかは威厳のへったくれもないので自分の魔人が勝つイメージは出来る。

「シヴァもたまに妻に踏まれるくせに、威圧感半端ないんだよなあ。つか、あの神妻に手を出さないだけだし」

「となると目下最大脅威はシヴァだけ？」

「ま、脅威も何も向こうは俺なんか狙わねーだろ。ほうほうていで逃げ出して片目を失うような相手だぜ？」

「フラグ乙wwww」

「冥界に来ないかって？」

「はい。夏休みの間、若手の顔合わせが行われ、北欧の主神もいらっしやるのですが、その北欧の主神、オーディン様がシヴァ相手に片目を失うのみで逃げ延びた人間を見てみたい、と。ですから、その、よろしければ私の家に来ませんか？」

血涙を流しそうな匙を無視して顎に手を当て考える。シヴァ相手に逃げ延びるって、自分でも結構な偉業だという自覚がある。だからこそ他の神話に目を付けられないように何時でも簡単につぶせるし監視もらくちんな三大勢力のみに教えたのに、どこからバレた？まさかシヴァが他の神話にわざわざ言うとも思えないし、謎だ……………。

——夢と幻の赤いドラゴンさんがチャットルームに入室しました

夢：ばんわー

∞：ばんわー夢幻ドラさん

眼：ばんわー

O：今日は少し遅かったな

夢：いや実はな、結構前から何時か攻めてくるんだろうと警戒してた場所が静かになって、覗いてみたら警戒してた奴等がいなくなっておった。念のため調べてたら遅くなって

A：ほーん、まあ何だ、良かったな

夢：ああ、肩の荷がおりた。これからは趣味にいききたいと思う。誰かおいしいお菓子とか知らぬか？

∞：我知ってる

夢：k w s k !

∞：こんど冥界いくことになった。その時案内してやる

金：あ、私の兄さんもいくそうですね。一緒に行かないかと誘われたけどセフレと行きますと断ったら泣いてました（笑）

—— 666さんがチャットルームに入室しました——

6：獣

嫁：お、新規じゃな。ばんわ！

∞：獣？

6：我、獣、封じられし、獣。外、出たい。器、探す

夢：へえ、見つかるよいな

6：我見つけた

6：獣の王

6：三神を宿した器。空にする

6：手にする。我、新たなる自由を

∞：ちゅーにびよう？

獣の王 in 冥界

冥界。悪魔や堕天使達の住まう世界で、悪魔達の領地で堂々と歩く悪魔ではない者達。

もちろん王神一家だ。

「うん、ここがいいな。じゃ、皆それぞれ護衛をつけて解散」

ミカドがパンパンと手をたたく。家族はそれぞれ別れた。シンは酒の臭いをたどりミコトは冥界の医療について調べにいきマイはミコトについて行く。

ミカドに付いてくるのは姐己とペスト、そして白い髪に白い肌、白銀の瞳をした白衣に身を包んだラヴィーナと言う名の魔人。そしてグレイフィアだ。銀色？今頃夫とイチャイチャしてるのではないだろうか？

「ふんふん……お、本場地獄カレーだってよ！」

「悪魔のくせに人肉おいてないんですか？しけてますねえ……」

日本に地獄はない。なんか勝手に想像されているが、日本の死後は黄泉の国があるのみだ。しかし地獄が存在する神話が多い。キリスト教もその一つで、悪魔や堕天使が住む冥界はまさに地獄。その地獄で存在する地獄カレーとはきつと相当辛いのだろう。

本場インドだけどな！とカレー屋に突進していく主を見て部下達は仕方ないというように肩をすくめる。やがて出てきた赤いカレーをオーフィスがツブライターに投稿して店員がタイムを計り始める。

五秒で終わった。オーフィスはタイマーを持った店員と撮影して再びツブライターに投稿する。

「はあ、悪魔達も退屈になったものですねえ。欲望のまま犯し、壊し、喰らう。それこそが魔性の本質でしょうに」

「好き勝っていきられないのがこの世の中だからなあ。でもその代わりに、娯楽は増えたる？」

「私が欲しい娯楽と違います。もっとうこう、せめて罪人だけでもお肉として提供できる国に住みたいです」

ぶー、と膨れる姐己。さすが、息子を実の父に食わせた女の台詞は

重みが違う。

「魔王あたりに交渉してみるか。旧魔王派のテロリストの死体提供してもらえるか」

「悪魔は悪魔で美味しいんですけどね。でも私はあ、儂い命を、必死にいきる命を摘み取って食べるのがだあい好きなんです♡」

「英雄派は人間。で、テロリストに人権はない。なるだけ生け捕りにしてやるよ」

「やあん！ミカド君大好き！」

ぎゅ！とミカドに抱き付く姐己。あまりの嬉しさに彼女の本性である狐の尻尾と耳が現れる。そう、彼女は九尾の狐の大陸での姿を名乗る、白面金毛九尾の狐その人——人？……狐である。

殺生石から因子を集め魔人としてこの世に復活させた。ミカドを父と叫ばない数少ない魔人である。

「あ、でもあの、ほら、あれ……せいそう？は残しといてね。彼の仲間全部ぶつ殺して、彼が復讐に燃えてくれりゃ、少しは主人公っぽくなるだろうし」

「期待してるんですか？」

「だって最強の神滅具持ってるんだろ？俺のより強いって、そりや期待するさ」

ケラケラと楽しそうに笑うミカド。そういえばあの槍最強の神滅具だった。けど、実際どうなんだろ？だって扱うのは生身の人間なのだ。ぶつちやけ鎧を纏える二天龍達のほうが神器として格上のような……。

「お父様……」

「ん？」

と、不意にラヴィーナが声を出す。彼女の視線を追えば路地裏から出て来て倒れる少女の姿があった。

「た、たす……助けて、お願い。おうちに、帰りたいの」

「……………ご主人様、手は出さない方が良いかと」

と、グレイフィアが路地裏の奥を睨みながら言う。貴族悪魔がいる。おそらく、目的は嫌がらせ。ミカドが助ければ眷属を盗まれたと

声高らかに叫び、助けなければミカドの心に罪悪感が残る、とでも考えたのだろう。バカな奴だ、ミカドは例えスカイツリーから落ちそうになっている人間の手をうっかり踏んで落とすとしても「あ……」で済ませる外道だというのに。

「助けてほしーの?」

「ご主人様!」

だけどこの外道。身内の忠告なんてこれっぽちも聞きやしないと言うことを忘れていた。

「でもねえ、お前助けると俺眷属泥棒になっちゃうんだよね」

「わ、私、無理やり……眷属に、なりたくないのに、化け物になりたいくないのに」

こういう事例は良くあるのだ。

「こうしきせてい」

「……………ん?あれ、オーフィス様?」

オーフィスの声が聞こえた気がしたがどこにもいない。気のせいだろうか?

まあ、取り敢えず、無理やり眷属にされる事例は珍しくない。それこそ、上手く利用すれば各地で同時多発的に暴動を起こせるほどだ。

魔王が何もしないからなあ。本当、無能だ。ゴミだ。クソ、カス、ムシケラ。惚れる要素が何処にある。いや、無い。だからこそ自分は完璧なルキフグスだ。あの時から何も変わらない、美しく完璧な——と、若干トリップしかけ慌てて主を止めようとする。主なら別段悪魔と事を構えようと問題はないだろうが、余計な火の粉をつかないようにするのも完璧なる従者の役目。

「お嬢ちゃん花は好きかい?」

「え?あ、うん——大きくなったら、綺麗な花になりたい」

なんとも子供らしい夢だ。人間が花になれるわけないだろうに。普通なら——

「桶把握」

「へ?——あ」

メキ、と少女の顔が、身体が歪む。メキゴキと生理的嫌悪感を誘う

音と共に形を変え、一輪の美しい花が出来上がる。

「さて、行くか」

その花をとり歩き出すミカド。隠れていた悪魔達は慌てて飛び出してくる。

「ま、待てー!」

「あん? 何、集合時間も近づいてきたし戻りたいんだけど」

「私の眷属をよくも!」

「眷属?」

「貴様が今花に変えた眷属だ! 私の隙を見て勝手に逃げ出して、漸く見つけたと思ったらその瞬間貴様が……! これは国際問題だぞ!」

「なるほどお前の眷属か! なら、慰謝料寄越せ」

はい、と手を出すミカドに、は? と固まる悪魔。

「いや、いきなりぶっ殺してやるとか言われてな。説得したんだけど聞き入れてくれそうにないから花に変えた」

「は? え、な……何を……ふざけるな、そんな嘘——!」

「えー? じゃあ証拠を示せよ証拠をよ。今きたお前に解るとは思えないけどな」

「う、ぐ……」

「つーか俺様国賓様。たかだか貴族風情がタメ口利くな。不敬罪」

「き、貴様あ! 人間の分際で、許さ——」

と、魔力を片手にため放とうとした瞬間、凍り付く悪魔。ラヴィーナが口を細めておりその口からキラキラと細かな氷の結晶が風に流される。ミカドがそのまま蹴り碎く。

「んじゃ、早く合流しようぜ」

「はい」

「ええ」

集合場所に行くとき既に全員集まっていた。

「お待ちしてましたミカド様。本日は私が皆様を案内させていただきました
ます」

ペコリと頭を下げるソーナ。今はミカドを国賓として扱うらしい。

ミカドはよろしくー、と軽く流す。

「ルフエイも来たか」

「はいー」

そう元気良く挨拶するのはルフエイ・ペンドラゴンというアーシアの持つエクスカリバーの初代にして先代所有者アーサー・ペンドラゴンの子孫だ。ミカドと肉体関係を持つ女の一人でもある。

後で合流する予定だった人物だ。エクスカリバーの現所有者であるアーシアとは仲良くはなしている。どうやら最初に彼女に合流して、そのまま仲良くなったらしい。

後、予定してない人物も増えていた。ミカドはオーフィスの隣にいるオーフィスより見た目年上の赤髪の少女に視線を向ける。

「オーフィスの友達か？」

「ん。我はオーフィスの友達。よろしくミカドさん」

「ぐれーとれつどはわれのよめー！」

「そうか、挙式は何時だ？」

物足りない。

漸く解放され、心だつて落ち着きを取り戻した。夫と肌を重ねる回数も、前より増えた。けど、物足りない。

夫は前より優しくなったし、夜の時間も増やしてくれた。望まぬ子を産まされた自分を哀れんでくれているのだろう。つらい記憶を、忘れさせてあげるなどという台詞も言っていた。

忘れられない。胸を揉みしだくあの指が、肌をかく爪が、敏感な場所をなぶる舌が、己の中を押し広げるあれが――

「――っ」

スカートから湿った指を抜き、火照った身体を冷まそうと息を整える。

戻ってきてから一度も達せていない身体は日増しに自慰に耽る時間が増えた。どうして、夫の所に戻れて幸せなはずなのに、満たされない。満たされたい。

でも、自分には夫が——
でも気持ちよくしてくれない
声が聞こえる。

気持ちよくなりたいだけ。別にかまわないでしょ？
それは、駄目だ。夫を裏切るなんて——。

虫に犯され、孕まされ、その子供が虫の子じゃないって言い訳が欲しくて、貴方が取ったあの行動は裏切りじゃないの？

あれは、あの時は、自分は、壊れてて。

なら、きつとまだ私は壊れている。大好きなはずのあの人と居て、満たされないんだもの

壊れて？

そう、だから仕方ないのよ

「……………仕方、ない。私は、まだ、壊れてる。だから、これは仕方ないこと」

彼女の足は、屋敷の外へ向かって歩き出した。

若手悪魔

「はむはむ、はむはむ」

「もぐもぐもぐ」

オーフィスと彼女の嫁（オーフィス談）のグレートレッドは黙々と食事をとる。

「ほれ、オーフィス口の周りが汚れている」

「……むい」

食べかすやら何やらで口の周りを汚すオーフィスに呆れながら口の周りを拭ってやるグレートレッド。

「さすがわれのよめ」

「我、嫁違う」

「何だ、じゃあ挙式しねえの?」

「あげない」

「ええ……」

ぷい、とそつぽを向くグレートレッドに頬を膨らませるオーフィス。ミカドは残念そうに冥界の結婚式場のパンフレットを閉じた。

所で西洋の結婚式、ウエディングドレスは教会で行われた結婚式で花嫁がきていたのが起源らしいが悪魔が着るってどうなんだろう？

「ま、いいか。午後からは俺顔見せとかあるから、迎えが来るまで残るよ。お前等は観光してきな」

「「はーい」」

昨日手に入れた花に水をやる。命の美しさという奴か、その花は万物を魅了する美しい花だ。その美しさによってきた鼠や虫に向かって根が伸び締め付け血肉を喰らう。

「んー、後2ヶ月って所かな?」

と、その時だった。ドアがノックされる。迎えが来る時間にはまだ結構ある。残っていたグレイフィアが扉を開け、不機嫌そうな顔になる。見れば彼女そっくりな女が扉の向こうに立っていた。

「おお、銀色じゃん。おひさ、どーした?お前が迎え?」

「——だ」

「だ？」

「抱いて、ください」

「……………」

ふむん？と首を傾げるミカド。抱いてくれとは、つまり男女の意味だろう。え、何で？リリースの因子が活性化して力と欲望への忠実さがあがったからと言って、自分を求めるとは思えないが…………。

「お前人妻だろ？所有権がこつちにある頃は向こうも文句を言えねえだろうがなあ」

だが今は魔王の妻。文句を言ってくるに決まっている。別に悪魔どもなんて簡単に滅ぼせるが、だからといって一人の女のために滅ぼすなど面倒くさい。悪魔の文化も中々面白い。満足するまでは滅ぼす気はない。

「だいたいそういうのは夫に頼め。俺に求めるな」

「さ、サーゼクスは…………満足、出来なくて」

「殺しましょうこの淫売」

グレイフィアが銀色を殺そうと魔力をためたので針鼠をぶん投げで止める。頭の後ろに刺さった針鼠を抜こうとしたが針に返しがついており抜けない。涙目になって抗議の目を向ける。

「ちよつと黙つてな…………自分が気持ちよくなるために夫と息子を裏切る、か。良いねえ、俺はほら、彼奴の宿主だからな。欲望は肯定するべきだと思うのよ。だから、うん、まあ…………抱いてやるよ」

ケラケラと、嘲笑うように笑みを浮かべるミカド。女に飢えることなど無いミカドは別にグレイフィアを抱いてやる義理はないが、欲を優先する者を肯定する気概はある。なにせリリースの宿主なのだから。

「納得いきません」

「お前の姉を抱いたことかか？」

「私に姉などいません！」

と、激昂するグレイフィアに悪い悪いと肩を竦めるミカド。

「そうだよな、お前が、お前こそがグレイファイア・ルキフグスだ。お前の中ではそうなんだろう。で、俺はそれを認めた」

「……………」

「だがお前が本来忠誠を誓うのは俺じゃねーだろ?」

その言葉にグツ、と黙り込むグレイファイア。

「お前は完璧なルキフグスでありたい。なら仕えるべきはルシファーだろ? サージェクスだってルキフグスを侍らせるためにルシファーになった」

「こーしきせつてい」

「ん、オーフィス? 帰ってきてたのか」

「ぐれーとれつどとでーと」

「デートじゃない」

そういうと買ってきた菓子類の整理のために自分達の部屋に移動する二人。

「話を戻すぞ? 俺はルシファーじゃねえ、ルキフグスごっこならヴァーリ辺りに相手を頼め」

「……………どうすれば、私も他の魔人方のようにおそばで仕えることを許されますか?」

「ん? ん……………」

魔人達は、実は忠誠心なんてこれっぽちも付与されていない。初めは父として、創造主として、産まれた命として当たり前のようにミカドに感謝し、後はミカドに惹かれていくのだ。自分も貴方に惹かれたのだと、どうすれば納得してくれますかと尋ねるグレイファイアに顎に手を当て考えるミカドはポン、と手をたたくと日本神話において神を斬り殺した刀を投げ渡す。

「それでお前の大切な顔に傷を付けろ。一生残るぐらい深く」
「……………」

ミカドは、弱い。魔人達に比べればその脆弱さは明らかで、今の性別も含め改造されまくったグレイファイアなら超越者クラスでも簡単に殺せる。ミカド自身それを知っているはずだ。その上で自分は丸腰、忠義を疑っている相手に刀を渡す。

ああ、何という傲慢。

グレイフィアは躊躇いなく己の顔に横一線の傷をつける。鮮血が溢れ、床に垂れその上に頭をつける。

「貴方こそが私の傲慢なる王……ルキフグスが仕えるに値する御方。どうか、この身、この心、この命を、心行くまで使ってください」
「おっけー」

何とも軽い対応に、しかしグレイフィアは腹を立てない。ルキフグスとしての血が、この弱くとも傲慢で、悪魔よりもよほど悪魔らしい主に仕えられることに喜びを示していたからだ。

ちなみに銀色はやった後返した。時折抱いてやることを条件に。面倒ごとは御免だし、旦那とやる時に感度が倍になる薬もあげた。

若手悪魔の顔合わせ。

ミカドは重鎮悪魔たちより更に上、セラフォルの隣、魔王達と同じ段。重鎮悪魔達から殺気が飛ぶ中パンケーキ50皿目を食べる。

ちなみにトツピングはオーフィスが勝手に持って行く。

若手はソーナを含めた五人。後一人居たが、カテレアの首から得た情報で旧魔王派との繋がりがわかり処罰された。

その五人のうち二人は知っている。三名は初対面。人間が何で魔王様の隣に座ってやがんだあ？と言いたげな頬を腫らした入れ墨ヤンキーに此方を興味深そうに見る眼鏡の女、後、悪魔にしては珍しく魔力を感じない男。

此奴は面白そうだな。うん、面白そうだ。

何でも魔王になる気らしいし、応援しよう。

他二人はどうでもいいかな。まあ眼鏡女はなんかオタクの気配を感じさせるし話したら面白いかもだが。赤虫？どうでもいい。

ソーナはレーティングゲームの学校を建てるのが夢らしい。下級悪魔や転生悪魔用の。それに重鎮達が笑い匙が突っかかろうとして腹を押さえる。

「おそろしくはやいぐーぱん。われでなくちやみのがしちやうね」

「いや、魔王達や俺は見てるけどな」

やれ伝統がどうだ、旧家がどうだと言う悪魔達に、ソーナは顔色一つかえない。眷属達は何かを言いたそうにしているが肝心なソーナがそれでは重鎮達は面白くない。人を貶めるのは、その反応を窺うまでが楽しみなのだから。

「何かね、言いたいことがあるなら言うといい」

「では僭越ながら……悪魔は実力主義なのでしよう？やれ生まれだ、血筋だなどと、馬鹿らしい。力ある者が力なき者を支配する。それこそが、悪であり魔性の私達の本分では？」

「……ふっ。若い」

と、重鎮の中でも上の方に座る、魔王の次ぐくらいに偉いであろう男が笑う。

「真の悪魔とは古くから伝わる上級悪魔の血縁者を指す。それ以外は眷属——下僕であり、本当の悪魔ではない。『平民』と『転生者』だ。邪悪かどうかは人間や他勢力の価値観によって変化するだろうが、私は邪悪である必要性はないと思っている。この貴族社会を未来永劫存続させることが、『悪魔』のすべきことだ」

「だってよりリス」

「くだらん。私の肉片から産まれた小僧が、良く吼える。『真の悪魔』だというなら私が生成に関与しておらぬ一般悪魔をこそさすであらうに」

「……え」

その声に、その男は目を見開き振り返る。何時の間にか寝ているミカドの膝の上に乗り手を腰に回す女の姿がそこにあつた。かなりの美人で、胸もでかい。着ている服も露出が多い。イツセーがおお、と反応する。

「バカな、貴方は……そんな、まさか………よりリス様!？」

「……!？」

よりリス。その名は、悪魔にとって特別なもの。

初代ルシファアの妻にして悪魔の祖。その身体に流れる血が、彼女に逆らう気力を奪う。サーゼクス達も驚いていた。初代72柱が生

まれた時点でもはや女の形はしておらずただの肉塊だった彼女の顔を知るのはこの場では最初に造られたゼクラム・バアルのみ。

「ソーナ・シトリー」

「は、はいー」

ミカドと交わったことでリリスの因子が濃くなり、ゼクラム並みに彼女の存在感を感じるセラフォルやソーナ。だから、名を呼ばれて慌てて反応する。

「私がいいと思うぞ。このような規律、意味などない。力ある者が発言権を得る？ああ、そうあるべきだ。邪悪である必要性は確かになり。好き勝手に生きて、周りが勝手に悪だと判断するだけ。なればこそ周りに合わせぬ事は悪なのだろうが、私も、お前も、悪なる魔性。好きにすればいい」

「ありがとうございます……」

「うむ……」

「ZZZZ……んあ？話し終わった？よし、じゃあ若手の目的聞いたし帰るか」

ゼクラムが話し始めたところから寝ていたミカドは目を覚ますと立ち上がり部屋から出ていこうとする。

「え!?こ、このタイミングで!?リリス様について、色々聞きたいことがあるんだけど!」

「リリスは俺の嫁の一人」

以上、と言うと今度こそその場から立ち去った。

リリスの後夫という悪魔側からすれば大王や魔王以上の権力を持つてもおかしくない立場であることをさらつと暴露して。

仙術

ヴァーリ・ルシファアの指導の元、グレモリー眷属達は修行をする。ヴァーリ曰く今以上に強くなりたいのなら小猫と朱乃は己の血を受け入れギヤスパーは人見知りを通しリアスは特にどれが優れたとかはないが上級悪魔らしいスペックは持つてるのでとにかく鍛え木場は剣については知らん、お前の師匠に頼め！と丸投げし、イツセーは

「どわああああ!!」

「どうした赤龍帝の小僧、スピードが落ちてるぞ」

「よし、では新たに考案した『マリカーサンダー』で防御力、攻撃力、身長、体重を半分にしよう。身長が半分になった場合横、奥行きも半分になるわけだから単純に体積は八分の一。その上で筋力が減るのだから攻撃力は落ちるがなめに、体重が軽くなるぶん軽やかに動ける。歩幅は減るから遅くなるが」

「お、俺を、新技の実験台にするんじゃねええ！」

「言葉遣いに気をつけろ！俺はお前の先生だぞ！」

元龍王タンニーンと歴代最強の白龍皇ヴァーリに追いかけて回されていた。

武術の才能はない。魔力はゴミ。ならば、とにかく体力を付けて倍化の割合を高めろ。それがイツセーの修行だ。

「とったどー！」

川を泳いでいた魚を捕らえ叫ぶイツセー。

僅かな休憩時間。食料は自分で見つける。それも修行なのだから。

「……………何してんだ、俺……………はあ、おっぱいと話したい」

「何言ってるんのお前」

こんな山の中で、ドラゴン達に殺されたくない。死ぬ前にリアスとエッチなことをしたい。リアスの処女が欲しい。童貞はリアスで捨てて、朱乃の処女も貰いたい。そして、彼女達のおっぱいと話したい、

などと頭のおかしな事を言っていると不意に声をかけられる。今は休憩時間の筈!?!と振り返るとそこにはこの川の主を食ってるミカドが居た。

「お、王神帝!」

「様をつけるデコ野郎」

「——ッ!」

「なんてな。公的の場ではそうさせろってグレイフィアが言うが、ここはただの山の中。単なるクラスメートとして接しろよ兵藤」

「食うか?と魚を差し出してくるミカドにいらねえよ!と断るイツセー。うまいのに、と巨大魚の頭蓋を噛み砕く。

「時に兵藤、己の力を倍化するお前が手っ取り早く強くなる方法があると言ったら、どうするね」

「——ッ!そ、そんな方法が!」

「俺に一撃でも入れられたら教えてもいいぜ」

「さあカモンカモン。と両手を広げるミカドに、疑念の目を向けるイツセー。

「お前は、俺たちのことが嫌いなんじゃないのか?」

「嫌いではない。見下してるだけだ……ああ、でも兵藤。お前は面白い奴だと思ってるよ」

「……でも、本当に強くなれるのか?」

「そうだな……じゃ、こうしよう。強くなれなかったらお前の両親を殺す」

「……………は?」

その言葉に、イツセーが固まる。此奴、今なんて言った?

「だって俺はお前が強くなれる方法を教えに来たんだぞ?それで強くならなかつたら、それはお前の怠慢だ。そんな怠け者に育てた両親は殺さなきゃ、だろ?」

「——ふ」

「ふ?」

「ふざけんなああああ!!」

「——う!と真っ赤なオーラが溢れ出す。そのまま殴りかかってきた

イツセーの拳を避け腹を蹴る。川に向かって吹っ飛び水柱が立つ。
「おお、力が桁違いにあがったな。よしよしい傾向だ。じゃ、約束通り両親は殺さない」

「……………え？」

溢れるオーラに気づき、川の水で頭も冷え、その言葉に冷静になる。確かに力は上がった。しかし直ぐに消えた。え、まさか、からかわれただけ？此奴ならあり得る——

「じゃ、次から本番。因みにこれ失敗したら赤虫の胸を平らにする」
「…………………………はい？」

長い沈黙。イツセーが首を傾げる。そして、漸く理解したのかうん、と頷く。

「ぶっ殺してやらああああ！」

「さて、王神帝の、『これで安心強化教室』」

「きんこんかーんこーん」

「きんこんかーんこーん」

ミカドがスーツに着替えてケラケラと何時もの笑みを浮かべながら言うど何処からともなく現れたらオーフィスとイツセーは初めてみる赤髪の少女がチャイムの真似をする。

「体中が痛い」

「しっかりしろよ。ちょっと首つかんで山の斜面にこすりつけたただけだろ？」

ボロボロのイツセーと、そのイツセーをボロボロにして悪びれる様子のないミカド。

「強くなる方法だが簡単だ。仙術を覚えればいい」

「……………仙術？」

「俺が使う術だ。自然界に存在する力を己の力に変える。これなら、自分が出せる以上の力を取り込んでから倍化して一度の倍化の強化率があがる」

「そ、そんな術があるのか……………」

「おう、まずは俺が気を流し込むから。それ感じ取る練習からだな」
「……………お前は、どうしてそこまでしてくれるんだ？俺の変態なところが面白いつてだけなのか？」

「ああ、それはな。夏休み前に……………」

ミカドは行きつけの和菓子屋に向かう。期間限定の1日数量限定の菓子を食べに行くためだ。しかし、目の前で最後の一個がなくなつた。塔城小猫が一気に20個買ったからだ。

倍額払うから一個くれないかと頼んだミカドに、小猫は貴方のことが嫌いだから、いやです、とミカドを嫌悪の目で睨み断つた。

「と、言うわけだ」

「え？小猫ちゃんがお前に菓子を譲らなかつた事と、俺を鍛えてくれるのにどんな関係が？」

「え、だから言ったじゃん。さ、修行修行。俺らこの後あの、ほら……………あれ……………サイクリンクロードに会いに行くからそれまでに仙術の基礎を覚えろ。覚えなかつたら赤虫と半ガラスの胸を平らにするからなく」

「……………っ！」

「まあまずは己の気を把握するために、己がどんな性格なのか把握することだ。取り敢えず親が殺されると脅されるより胸が小さくさせられるでキレル奴だなお前は」

「なんだ……………」

と！とはいえない。事実、今まさにそうだったのだから。

「それと勘違いも消せ。お前は赤虫の為じゃなくて自分のために力を欲してるんだろ」

「な、何だど!?ふざけんな、俺は部長の為に……………」

「あははは。何？好きなのか？笑わせんな、お前は頑張ったご褒美にやらせてもらいたいだけだろ？」

激昂したイツセーに腹を抱えて笑うミカド。イツセーが反論しようとするもミカドの言葉は続く。

「お前、俺がぶっ飛ばしたフェニックスの所の奴と同じで、ハーレムを作りたいんだよな？」

「一緒にすんな！俺は確かにハーレムを作りたいけど、ライザーみたいに女の子を道具としてみたりしねえ！」

「は？してるだろ。だからハーレムなんて作ろうとしてんだ。良いか？ハーレムってのはそもそも王が子孫を残す道具、女を集めた後宮のことで——」

「俺はただ、部長や朱乃さんに彼女になって欲しくて、エッチなことがしたいだけだ！後二人の処女欲しい！」

「どちらか片方が告白してきたらつき合いたいか？」

「当たり前だろ！」

「先に告白してきたほうが『私だけを愛してください』って言ってきたら？」

「——え」

本日何度目かのフリーズ。

ミカドはやはりケラケラ笑う。

「お、お前だって、言われたりするんじゃないのか？」

「あるね」

「なら——！」

「だけど俺はクズだ。俺が気持ちよければそれで良い。相手の事なんて知るか。普通に断ってる」

「——」

「お前も、ハーレムの夢は諦めないんだろ？ならお前は、やはり自分本位だ。赤虫達を助けようとするのは、見返りとして体を差し出して欲しいからだ。さて兵藤一誠。もう一度言うぞ？自分を把握しろ。両親の殺害の宣言より、抱きたい女の胸を消されると言われた方がキレる己の悪辣さを——」

小猫は、ミカドが嫌いだ。リアスを虫扱するし、何より、仙術を

扱う仙人である彼が、怖くて仕方がない。あの性格、きつと姉のように力に飲まれたのだと、人間なのに必要以上に力を求めようとするからだと嫌っている。

ミカドはそんな小猫をただだからかうためだけにイツセーに仙術を教え込むことにした。

小猫は一人森の中を走る。修行を終え、パーティーに出席したのだが、嗅ぎ覚えのある臭いを放つ黒猫を追ってきたのだ。

あのイツセーも、仙術を初歩だが覚えたという。仙術………仙術だ。

恐ろしい力だ。あんな力、この世界に必要な。この臭いの主も、そんな力に飲まれた者の一人。自分の、身内。

でも、どうして、大嫌いな彼女に会うために一人で来たのだろう。誰かに、それこそあの場にいる魔王達に報告すべきだった。

話したいことが、あるから？彼女に言いたいことがあるから？

自分は、彼女にあつて、どんな顔をしたいのだろう。どんな顔をすれば――

「よーし、残りはケツから入れるか」

「んぶほおおおおつ!!」

「……………」

どんな顔をすれば良いのだろう――？きつと、見なかったことにするのが一番なのだろう。うん、そうに違いない。

と言うかあの男、ソーナ会長ともセフレだしこの前セフレらしい魔女っ娘といたし女にだらしないと思つていたがまさか姉にまで手を出しているとは。しかも、その、かなりマニアックなプレイを。まさかかんち――

「さあて、後はこんがり焼くだけですよ。体の中に突っ込んだ果物が肉の臭みを消してくれます」

「こういうのって腹かっさばいて果物積めるんじゃないの？」

「解ってませんねミカド君は。生きたまま焼くのが通なんですよ」

「ま、美味しいならそれでいいか」

「んぐう！んん！んおおお！」

その上ごんがり焼かれて美味しくいただけるのか。本当に、マニアックな……………ん？ごんがり？

「ま、待っててください！」

「ん？」

「んあえ?!いうええ！」

茂みから飛び出すと裸に剥かれ手足を太い木の棒に縛り付けられ青白い炎の焚き火にくべられそうになっている姉と、姉を火にくべようとしているミカド、そして火力の調整をしている金髪の狐耳美女がいた。

はぐれ悪魔黒歌

「あ、レイヴェルさん」

「げえ！王神命！」

「女の子がそんな声出しちゃ駄目ですよ」

「^{貴方}狂人に！常識を！説かれたくありません！」

と、叫ぶレイヴェル。ミコトは何故自分がまるで狂人の様に扱われているのか理由がさっぱり解らず首を傾げる。その態度に、レイヴェルも毒気が抜ける。

（バラバラにしたのは此奴等だが）眷属の命を救ってくれたのは事実だし、何より悪魔は、根本からミコトを嫌えない。

ミコトはリリースの因子を全ての魔人の中で色濃く受け継ぐ個体。二柱の神と魔の祖を宿すミカドと、リリースと言う存在の力をこの世に反映させるために生み出された器の肉片を媒介に作られた彼女は悪魔の祖の気配が濃い。故に、貴族悪魔はミコトを本当の意味で嫌うことが出来ない。むしろ、母親に抱くような安心感を覚えてしまう。

「時に、貴方のお父上はどこへ？リリース様の後夫と聞き、改めて挨拶しようと思ったのですが」

「あれ？何処でしょう……………」

「うう、ひつぐ……………怖かったよおお……………美猴は一撃でやられるし、『猫？の肉って珍味なんですよお』って捕まるし、口とお尻からスライム突っ込まれた後香り付けで果物を入れて、焼かれそうになったし……………此奴等、本気で私食べる気だった」

グスグスと泣きながら自分の腰に手を回し胸に顔を埋める姉を見つめる小猫。涙目の姉、可愛い……………。

「さあさあ別れの挨拶は済みましたね？ではでは、さっそく料理開始ですね♪」

「ひつぐ！」

「だな、胃と腸の中に流し込んだ果物がもつたいねえ」

「ひいひい?」

涙目になって小猫の後ろに隠れる黒歌。慌てて動き、そのせいでグギュルルル、と腹の奥から音が聞こえうずくまる。そういうえば先程肉の臭みをとると言われ上からも下からも突っ込まれていた。

はあはあと息を荒げ、片手で腹を、片手で焼く時に漏れでないようにと突っ込まれた栓を押さえる。敏感な内臓の粘膜を擦る栓による圧迫感に唸る姉を見て、小猫はゴクリと喉を鳴らす。

「た、食べるんですか?」

「食べちゃいますよ♪」

「食べないでください」

「?何故ですか、だって、それは生死問わ^{デッド・オア・アライヴ}ずのSS級はぐれ悪魔。ああ、ご安心を。料理はきちんと写真に撮っておくので……念のため頭を切り取っておきます?」

「——ッ!」

ビクツと震える黒歌。そうだ、別に姉が殺されたところで、彼らを罪に問うことは出来ない。止める権限など小猫にはない。

「んー……御姉妹ですしね、思うところもあるのでしょう。とはいえ犯罪者を庇うのは当然犯罪行為……私達は立場的にも貴方より遙かに上ですし、私刑の権限もあると思うのですよ」

実際どこかの赤虫が文句を言ってきたとしても、リリースの夫であるミカドの一言さえあれば悪魔共も黙るだろう。

「先に貴方を頂いちゃいましょうかね?それとも、細かくすり潰して姉妹の子宮包み焼きにでもしましょうか」

「——ッ!!」

すう、と姐己が目を細め、瞳孔が縦に裂ける。途端、巨大な獣が喉元に牙を突きつけてきたような、そんな幻を見る。

殺される!?!違う、食われる!

へたり込み下着やせっかくのドレスが濡れていく。身体が震えることすら出来ず固まっていると抱き締められた。

「……ね、姉……様?」

黒歌だ。黒歌が抱き締めてくれた。暖かくて、漸く震えることが出来る程度の安心感が戻ってくる。

「……………この子は……………この子だけは！御願ひ——お願ひします！わ、私はどうなっても良いから。好きなように料理して良い、煮るなり焼くなり何でもして！でも、白音だけは手を出さないで！」

「……………あれ？何で私、悪者になつてゐるんでしょう？おかしくありません？ねえ、ミカド君。私、何も悪いことしてませんよね？犯罪者向こう、正義私たちですよね？」

「悪いこと？してないしてない。俺達は一切法を犯してないからな。てか、今夜のご飯もとい黒歌ちゃんよ、お前が俺に交渉できる立場だと？」

「う、あ……………ええ、えつと……………それは——」

犯罪者から何を奪おうと別段罪に問われることはない。それが悪魔社会だ。だから黒歌の追っ手の中には黒歌の処女を奪おうとする者も多くいた。彼が自分に何をしても、それは変わらない。

ならば生かして役に立つ何かを差し出すしかないのだが、例えば女として……………無理だ。女の自分でさえ見とれる美女を侍らせている。仙術？そもそも種族として初めから使える自分と違い修行し手に入れた向こうが上手。こうして対面すれば既に混じり合っているのが良く解る。

食材として身を捧げる？そもそもそのつもりだ。それで妹を見逃してなど寝返るはずもない。

「安壬堂数量限定モナカ税込540円……………」

「ん？」

「し、白音？」

小猫の言葉にミカドが止まり黒歌が戸惑う。

「わ、私は彼処の常連で、特別に20個、とって貰っているんです。それ、今後毎日差し上げます」

「……………一週間でいーよ。俺が買えなかった時は譲って貰うがな」

「……………」

限定モナカ540×20×7＝75600円。黒歌の命の価値、八

万円以下。

「は、あ、ぐう……………」

「ね、姉様!」

「お、お腹……………痛い。漏れる、ト、トイレ……………あ——」

「そして私達は気づいたんです。考えてみれば私たちが手を出す必要はないのでは?と。安全は悪魔が保証したわけですからね。なので早贄にしていた猿とそれを回収してきたメガネは放っておきました。ま、報告は終わりですので姉の威厳が死んだ黒歌さんを捕らえた側として是非とも引き取りたいんですが。いざという時裏切って、形も残さず潰されたら食べられませんからね……………もぐもぐ」

「姐己もこう言ってることだし、良いよな?魔王サマ」

襲撃を受けた責任として今回周辺を護衛していた悪魔を全員差し出せ、と突然命じて、護衛についていた新人から古株まで受け取ったと思つたら会談に遅れてハンバーガーを食べる魔人とその主ミカド。悪魔達が憤怒の視線を向ける中アザゼルは「姐己だど!」と目を見開く。

「うーん。ま、たかだかはぐれ悪魔一匹の身柄と同盟、どっちが重要か迷うまでもないしね……………私は良いと思うよ☆」

「ま、待ってくだされセラフォル様!そんな、簡単に!この者達がテ——」

「それ以上いっただら凍らせちゃうぞ♡」

もう凍らせられてる。

「し、しかし相手は仮にもSS級はぐれ悪魔。と、捕らえているのも大変でしょう?我々が代わりに投獄して」

「俺達が大変だつたらお前等が閉じ込めておけるわけねーじゃん。ごくり」

「全くですねえ。身の程をわきまえないんですから……………はむ」

その言葉にギシリと歯軋りする悪魔達。二人は気にせず食事を続ける。

「ふむ、そやつが噂の魔人とその王か？」

何かを叫ぼうとした瞬間、老人の声が聞こえる。凍りついた叫ぼうとした貴族二名以外が振り返る。

「オーデイン」

「オーデインって、確か北欧の？」

「うむ。初めましてじやの。かのシヴァ相手に逃げ切った人間よ」

アザゼルはシヴァだ?!と目を見開く。

「それを何処で？」

「チャット」

「……………チャット？」

「うむ。数年前、チャットメンバーを探している。参加しなきゃ殺す、と言われての。そいつ以外のメンバーに会ったことはないが、なかなか楽しいなあれ。で、その中で恐らくシヴァと思われる奴が言っておったのじゃ」

「……………あいつチャットとか、やるのか」

「うむ。どうじゃ、死後北欧にこんか？と、お主は寿命が存在しない仙人じゃったな」

と、悪魔達を完全に無視して話し合う北欧のトップ。貴族の一人が恐る恐る話しかけた。

「オ、オーデイン殿、お久しぶりです。ようこそ冥界へ」

「？誰じゃお主。まあ良い、それで王神帝よ。北欧ではお主を勇者として迎えいるつもりがあるぞ」

「かの大神から直接の勧誘、光栄の限り。しかし私はどこかに仕える気はありません。私自身、己の力がパワーバランスを崩す存在でありますので」

「ほっほっほ。そうか、確かにな……………時に、何を食っておるんじや？」

「デーモン親子バーガー」

「ふむ？…ここは悪魔の領地だからデーモンは解らなくもないが、親子？雛と成鳥の肉か？」

「似たようなものですよ」

食べます？と差し出してくるミカド。オーデインは夜食は高級ホ

テルでとる予定だったので断った。

オーデイン

「ふむ、成る程なあ。二神に魔の始祖。その器か。よくもまあ、人間風情に押し込めたものだ」

「その辺は聖書の神の凄さ、と正直に賞賛するしかありませんね」

「封印術だけは一級品じゃったからなあ、あのクソガキ」

ミカドの現状を聞き興味深そうに見つめるオーデイン。2柱の祖神に、悪魔の祖。その規格外の力を三つも封印した神器を宿し平然とこれまで生きてきた人間。先代達は直ぐに殺されていたが、これなら実は放っておいても魂が勝手につぶれて死んでいたのでは、と思えてくる。

まあ、目の前のこの男は仙術を本来の形で極めかけている。寿命の死も外的要因の死もあまり期待できそうにないが。

力に溺れやすい、我を持ちやすい知的存在にしては異質だ。幼少期から神をして化け物と思わせる三体とともにいたからだろう。己の矮小さを理解しすぎている。

だからこそ仙術の真価を心得ている。

「あ、そうだ。実は私の部下に、貴方に会いたいという者が」

「ほう、誰じゃ？」

ミカドが壁際に立っている部下をみる。その中からフリードが出てきて、剣を抜く。護衛のヴァルキリーが槍に手をかけるがオーデインがそれを制する。

フリードは剣を両手で持ちその場にひざまづいて剣を頭上に掲げた。

「グラムか……」

「はい。これはオーデイン様が戦士の王真なるシグルドの父に下賜されたもの。シグルドの死後、教会により持ち去られた北欧の魔剣。私の中のシグルドの因子に反応し私の下にやってきたグラムを、北欧にお返しします」

「いらん」

「……………は？」

「その剣は確かに儂がシグムンドにくれてやり、儂がへし折りその後打ち直された魔剣。で、あるならそれはシグルドの子孫であるお前のものじゃ」

「し、しかし！私は因子こそ受け継がれていますが、人間ではない、デザイナーベイビーです！改造されてシグルドの因子を濃くしただけの者に、何故北欧の魔剣を扱う資格がありませんよ……」

そういうフリードの卑屈な態度にくくく、と喉を鳴らすオーディン。

「奴とは大違いじゃなあ。奴めは自身の力に信頼を寄せておつたぞ？まあ『勝ち続けた己が卑屈になつては負けた相手も浮かばれない』と言う理由もあったがのお。お前ももう少し自信を持って……そんなんでは見限られるぞ？」

「見限られる？」

「グラムは未だお前を認めておらん。見定めている途中じゃ……故に、お主がグラムの力を真に使えたとすれば、お主がグラムに認められたという事。そうなたた時、返すなどと言うなよ？」

「……………私がこの魔剣に認められたのなら……………」

うむ、と笑うオーディン。

「では悪魔達のレーティングゲームを観戦するとしよう」

「おー、ソーナがどの程度強くなつたかみたいしな」

レーティングゲームの結果、ソーナが勝つた。

小猫は結局仙術を使う決心が付かず兵士に負け、聖魔剣を持つた木場が何人か倒したが椿姫にやられた。イツセーはおつぱいおつぱい言いながら禁手を使い匙と戦い勝利するもソーナの操る水に息を止められ、仙術で水の支配権を奪うもその間に圧縮した水球から放たれた高圧水流に貫かれた。朱乃はイツセー君の前でこの力を乗り越えたかつたのに、許しませんわ、と雷光を放とうとしたが真水は電気を通さない。溺れさせられた。

ギヤスパー？序盤でやられたしリアスは一騎打ちを挑み負けた。

「ふうむ、あの赤龍帝は何故おつぱいとか発さなかつたのじゃ？」

「ああ、なんか悟りを開いた結果おっぱいとしか発音しなくなった」

あれには驚いたな、とあの時を思い出す。仙術を覚え込ませるために座禅を組ませていたら突然『おっぱい！』と叫び禁手《バランスブレイク》に至ったと思ったたら、その後『おっぱいおっぱいおっぱいおっぱい……』と語りかけてきた。

何なんだろうね、あれ。

「しかしあれがヴリトラねえ……シヴァとやりあったインドラをして条件を満たさなければ倒せなかった主神クラスドラゴン………あれが？」

「魂をバラバラにされたとはいえ、酷いもんじゃのお。使い手が未熟すぎる。主の知恵でなんとか、と言ったところか？それにしても、やけに先行しておったが………会話を聞く限り学校を建てるのと主に認めてもらうだの何だの」

「ああ、彼奴ソーナを孕ませたいらしいからな、ここで良いとこ見せようと思っただろ」

「それにしてお主を越えるとも言っておったが？」

「俺ソーナのセフレなんで」

お互い既に砕けた口調ではなすオーデインとミカド。遙か年上とはいえ一勢力の長同士だ。ましてや三大勢力のように下手に出る理由もない。セフレと聞いてオーデインの護衛のヴァルキリー、ロスヴァイセが顔を赤くしてパクパクしてる。

「いやあ、北欧の主神様は意外と話が分かる。突然殺し合おうとかじゃなくてマジ良かったわ」

オーデインと別れホテルに戻ったミカド。観光に疲れて寝てる皆を起こさぬように防音結界を施した自室で寛ぐ。

「それは、何よりです……あなたと北欧が争う事になれば、悪魔達にも少くない被害が及ぶでしょうから」

「否定できないところが怖いところじゃ………」

ソファに座るミカドの前の床にへたり込み動かしていた舌を止め

口を動かす銀色と黒歌。銀色の呟いた言葉に黒歌が顔を青くする。

「俺は基本的には争う気はねーよ？戦争なんて何が楽しいんだよ。シヴアが動いたらどーする……後、あれ……：……ミルたんをして封印しか出来なかつたこの世界に住みながらこの星の神話群に居ない奴」

過去片目を失うことになった神との追いかけてつこと、ふとしたきつかけで友人とともに行った宇宙冒険旅行で起きたイベントを思い出し肩をすくめるミカド。あの二柱に比べたらメルグヴィゾアなどかわいいものだ。前者はただ怖い。あり方が、神性が、力が。後者は単純に強かった。それでいて不気味だった。ミルたんの協力の下ブラックホールに突っ込んでやったが。

「争いごとを起こせば強い奴が目立つからにやー。争いが終わった直後でも、強さは求められるにやん。或いは、ほかの所に行かないよう排除されようと動くか……私も覚えがあるにや……」

「え？お前が？」

「私これでも強い方なんだけど？」

「喰われかかった相手に子種をせびるお前が？」

「どーぶつだもん。強い雄と子を残したいのは本能にやん」

そういつてザラザラ舌で舐める黒歌。ふーん、と笑みを浮かべるミカドはその額を指で押して床に転がす。

「ま、子を残すのは今の家族に謝ってからにしろよ。我が子が出来てそっちに愛情注ぐと、別れた妹と二度と縁を戻せなくなるかもしれないぞ？」

「——へ？」

ミカドがクローゼットに視線を向けると、クローゼットが開き顔を赤くした小猫が現れた。

「え？な、何で白音がここに——っ!？」

不意に力が抜ける。何かの術か？仙術で直そうと体の気を整えようとすれば、己の気がミカドに流れているのが解る。

「塔城よ、お前そいつに思うところあるんだろ？なら貸してやるよ。それ俺の所有物だから、俺が許可すれば何したって構わないからな」
「……………何を、しても？」

「そうそう。事前にお前に貸してた玩具を使おうと、お前があの時見た顔をもう一度見ようとも。姉を許すためだ、仕方ないだろ？」
「……………」

ゴクリと唾を飲み近づいてくる妹。本来なら直ぐにでも胸に抱き寄せ再会を喜びたいのだが、今それをすれば何か失う気がする。と言うか逃げなければ何かを失いそう……。

「え？あれ、まさか……発情期？行為見て、早めに来ちゃった？でも、あの……白音……白音さーん、何で私を見てるのかにやあ……？」
「許すため……姉様を、許すためだから……仕方ないことなんです。酷いことをするのは、仕方ないこと」
「やめて、私に乱暴する気でしょ！」

「よー赤虫、帰りは同じ電車だな」

「王神帝——ッ」
「様をつけるよ虫虻女」

人間界行きの電車に乗ろうとすると人間界に向かおうとするミカドと遭遇したりアスは忌々しげな顔をする。

「おっばおっばいおっばい」

「うん、何言ってるかわかんねーや」

「貴方がこうしたんでしょ！」

「いや、なんか勝手に悟り開いたぞ此奴……」

修行をつけてやったおかげか以前のような敵意が消えたイツセーが独自の言語で語りかけてきた。そのうちおっばいの神霊とかと交信を始めるんじゃないだろうか。

「おっばいっばい夢いっばい」

「今いっばいと夢とか言ったわよね!？」

「おっばいおっばい」

「本当は普通に喋れるんでしょ!？」

「おっばいばい」

なんか痴話喧嘩を始めた。痴話喧嘩、なのだろうか？無視して高級

車両に向かおうとすると黒歌の服をつかむ小猫が見えた。黒歌に耳打ちすると黒歌の顔が赤くなる。姉妹仲がよろしいようで何よりだ。「あはは、黒歌さんったら完全にしつけられてますねえ。私としては妹ちゃんがそのうち刃物とか使い出してくれると嬉しいんですが」「んー、まー……………ありや痛みによる支配じゃなくて快樂に喘えぐ様を見て支配欲満たしてるし、無理だろ」

「残念です……………」

「それよりもだ。帰ったら式あげるぞ式」

「式？」

「われとぐれーとれっどのしきあげる？あげる！」

昨晚ルフェイと新しいキャラづくりに励んだらしいオーフィスがピョンピョン跳ねるとグレートレッドが顔を赤くする。

「だから、結婚する気はないと言っているだろうー！」

「残念ながらお前等じゃねーよ。冥界のホテルで、フリードとアーシアが愛でたく恋仲になった。まあまだキスしただけの初な関係だな。とりあえずパーティーだ！」

「いや、主、それは流石に恥ずかしいのですが……………」

「ふ、フリードさん……………いや、何ですか？」

「む、いや……………あ、その……………いや、ではないが……………」

完全にリアスの事などきれいさっぱり存在ごと忘れ去った一同は、そのまま電車に乗り込んだ。

∞：嫁が冷たい

夢：∞ドラゴンさん嫁とかいたのか

嫁：ガハハハ！浮気でもしたか？なあに、少し呪いを放てば落ち着いてくれるさ！

O：そもそも浮気をするな

——狼パパさんがチャットルームにログインしました——

——独身戦乙女さんがチャットルームにログインしました——

狼：ばんわー

独：こんばんわ（＾＾）／

狼：上司に参加させられました狼パパです。よろしく

独：私は上司に参加を命令されたあげくネームまで勝手に決められ

ました（；；）

狼：何処の誰か知らんが、上司に苦労してるな

独：でもめげません！どうせならここでいい男を見つけてみます！

p（、） q

嫁：よし、ではワシの住所を教えてやろう！

独：あ、嫁付きはNGで又ー（；）

三：強いか、お前は？強いのなら考えよう。夫婦となれば、毎日高めあえる

∞：私も嫁と高め合いたい。嫁冷たい、どーすればいい？

狼：いつそ子でも産ませろ。そうすれば後二人産んでくれる

∞：子供……………

独：なんて古都教えてりんですか！

破：動揺してるね。変換間違えてるよ

嫁：良いてだな！

プライベートモードON

∞：UGONバット、嫁に抵抗させないためサマエルの血頂戴

O：何言つてだお主

プライベートモードOFF

∞：我はもう落ちる。嫁を出来るだけ落とす。ばいばい

嫁：頑張れよー

独：えつと、そういうのは事前知識がないと危ないですよ。

独：さようなら（＾＾）

——∞ドラゴンさんがチャットルームからログアウトしました——

「みかどみかど——」

「ん？何だ」

「われぐれーとれつどにたまぐうませる？うませる！から……………みかど

はわれにたまぐはらませてほしい？ほしいー！」

「ごめんちよつと何言ってるんのかわかんない」

「ぐれーとれつどわれのこ……うませる、から……こうびのちしき、ひつよう？るふえい、みかどがいちばんしってるっていつてた？いつてたー！」

「ふむ、なるほどグレートレッドを孕ませたいと。え、何で？」

「われのよめ、われのこをうむのとーぜん？だから……おしえてくれたら、われみかどのたまぐうむ」

英雄達の晩餐会

最近禍カオス・ブリケードの団の英雄派なる連中が良く街に忍び込もうとする。

霊的な守護者であるミカドには人間が人間や土地から霊的な力を受けとつていない動物を殺そうと咎める義務はないのだが、だからといって見逃す必要があるわけでもない。狙いは悪魔と自分たちらしいし……そんなわけで

「ふう、やっぱり処女の血は最高ね」

「拷問した後だとコクが出ますよね」

「私は血より肉が良い……生前は生でしか食べてなかったけど、料理、悔りがたい」

「そうだろうさうだろう。俺は料理が得意なんだ」

「酒も美味いなあ。これも手作りなのか？」

ミカドは現在ちよつとした食事会を開いていた。参加者は客人はカーミラ、残りはミカドが魔人として復活させた姐己、ジェヴォーダン、酒呑童子。ジェヴォーダンは狼の耳をピクピク動かし尻尾を振る少女で酒呑童子は人間だった頃の姿に近く、絶世の美少女。しかし父の因子も復活したのか瞳孔は爬虫類のように縦に避け鱗が疎らに存在する。

「くい、と酒をあおり息を吐けばチロチロと長い舌が姿を覗かせる。

「しっかしお前も不幸だよなあ、染み着いた女共の怨念が強すぎで女として復活なんて」

「いや、我は案外気に入ってるおるぞ？この姿なら女に告白されるのたまにしかないし」

「たまにあるのかよ」

「フったら恨まれるよりモテるから妬まれる方がまだ解りやすい……」

酒呑童子はカラカラと豪快に笑い酒をあおる。神の住む高天原で作られた酒で、鬼が飲めば酔いつぶれ人が飲めば力が増し神が飲めば満たされる神酒。並の人間が一口飲めば天上の快樂から暫く戻ってこれない酒だが、ここに集まった面々は水のようにゴクゴク飲んでい

く。

「解つてませんねえ。ふつても恨まれるどころかなお依存され、何なら足袋一枚のために命を懸けてくれるようにしてこそじゃありませんか」

「我は鬼ぞ？・気に入らなければ殺して道に捨て、気に入ったなら奪う。女を抱き姫を喰らい勇猛果敢な人間共と殺し合う。それこそが喜びだ……殺せれぬよう回りくどいことなどせんよ。お前も、仮にも大妖怪ならば力のまま暴れてはどうだ？」

「それはそれで確かに面白いんですけどねえ。でもお、私は姐己、玉藻、その他人を誘惑し国を傾かせてきた毒婦ですよ？綺麗に並べられた置物を踏みつけ壊すより、その管理者達が自分で壊し、汚し、後悔する様を見るのが大好きなんです。あ、もちろん普通に拷問も好きですけどね♪」

流石大妖怪。話がかかなり物騒だ。まあここには人の命を文字通り食い物にする者達しか居ないのだが……。

「拷問といや、やつても意味ないことやられんのも拷問だよなあ……体育祭の練習くそ面倒くさかったわあ」

「意味ないことですかあ……そういえば穴を掘って埋める、をひたすら繰り返させるなんて拷問を考えた人間が居るらしいですねえ」

「まあ俺は当日病気になるんだがな」

「ふはは。仮病と宣言して居るではないか。ではどうだ？その日1日この我とまぐわうのは」

「え、酒吞ちゃん今は女の子だけど昔は男だったんじゃあ……」

「いや、女の体もなかなか悪くない。放つ感覚も好きではあるが、搾り取る感覚もまた……まあミカドとは初めてだが」

初めてか、どうなるんだろう、と興味が出てきた姐己。酒吞童子……男の頃はかなり精剛。あの物好きさが女になっても変わらないとしたらどれだけ淫乱になっているのか……。しかし対するミカドもかなりの好き者だ。実際落として自分の傀儡にするつもりが最終的には喘ぐしか出来なくされたし……。

「というかミカド君はいいんですか？酒吞ちゃん、元男ですけど」

「ああ、俺顔がよけりや男もいけるよ……」

「———そういえば聖書の淫欲における罪の中には同性愛も普通に入ってますっけ」

「まあ攻めは絶対だがな。その点牛若丸は生前から衆道経験者だしなかなかよかった……次の日同じ事をティアマトにもやってみたら気持ちよさそうにしててさ——」

そうこう話している間に食事がなくなる。全員まだまだ食べられる。

「よし、追加で料理だ」

「手伝うわ。といっても、血抜きだけだけど……あ、そうだ——」

立ち上がったカーミラがついて行くこうとして、思い出したように懐から杯を取り出す。

「これ、おじさまからあなたにつて——」

「ヴラドのおっさんが？」

∞：(祝) 卵産まれた

金：おお！お嫁さんに産ませたんですか？ん？卵？

∞：違う。産んだの我

狼：どういう事だ

———母違いの兄弟がたくさんな狼さんがチャットルームにログインしました——

母：ばんわー

母：何やら妙な会話が……我が輩の父同様男にも女にもなれるといえ事であるか？

狼：ああ……

嫁：何!?男にも女にもだと!?よし、狼パパ、美女になってこつちに
k g h u \$

狼：？

金：？

∞：？

嫁：この人の嫁です。ごめんなさい……今頭を割って黙らせました。今回は何も出てきてませんね

ア：H A H A H A！豪快な嫁だなおい！

嫁：時に狼パパさん……来たら殺す

——嫁が怖いさんがチャットルームからログアウトしました——

狼：行くわけあるか

——OUGONバットさんがチャットルームにログインしました

O：ばんわー

O：最近弟の機嫌がよくて、少し話をしてみた。考えに違いはやはりあるが、何も話さないより楽になった……それとお主等、少しは新しい命の誕生を喜ばんか

金：改めて、おめでとうございます！

ア：オメツトさん

狼：私から唆したのだったな。おめでとう

独：うらやましいですけど、おめでとう（≡▽≡）

三：強い子に育つと良いな

コ：おめでとなのじゃ！

金：なんだみなさん結構いたんですね

母：おめでとう。我が輩も最近子が産まれた。双子だ！かわいいのだが、成長するのが速い——

コ：兄弟か。うらやましいのお……私も妹か弟を母上に強請っているのじゃ！相手もいるしの！

狼：ちよつと前まで簡単におんぶしてやっていたのにな。今では潰されそうになっている時もあるな

金：あれ、狼パパさん母違いの兄弟がたくさんな狼さんのお知り合……って、この名前……もげろヤリチン！

狼：はあ!?

金：冗談です。私が好きな人もやりまくりますからね！

狼：それはそれでどうなんだ……

金：あ、そろそろ眼鏡が

金：兄が帰ってくるので落ちますね。そろそろ引越ししよ

——金髪魔女っ娘さんがチャットルームからログアウトしまし
た——

狼：私もあがろう

母：同じく

——狼パパさんがチャットルームからログアウトしました——

——母違いの兄弟がたくさんな狼さんがチャットルームから口
グアウトしました——

O：弟の見舞いに言つてやるか

——OUGONバットさんがチャットルームからログアウトし
ました——

独：スケベジジイの護衛で日本に向かう準備があるので失礼します
(^ _ ^) ノ

——独身戦乙女さんがチャットルームからログアウトしました

——アローハーさんがチャットルームログアウトしました——

——ココノエさんがチャットルームログアウトしました——

——三日月ドラゴンさんがチャットルームログアウトしました

——∞ドラゴンさんがチャットルームからログアウトしました

深……………

深：チャットルームつて、見るだけでもおもしろいんだねえ

——深海引きこもりニートさんがチャットルームからログアウ
トしました——

——チャットルームには誰もいません——

体育祭に向けて

「おっばいおっばい」

「ははは、まじかよイツセー」

「おっばい」

「それ受けるな！」

「……………会話が成立している」

語彙がおっばいだけになったイツセーと平然と、楽しそうに会話する松田元浜ハゲメガネコンビ。桐生藍華もドン引きである。

一体夏休みに何があったのか。そろそろ体育祭が近いと言うのにやたら身体能力の高い奴らは意思疎通が困難になってる。

「ねえ、大神は体育祭、頑張る？」

「その日は風邪になるから無理だな」

「仮病する気じゃん。まあ、セルゼンが残ってるか。アジアもあんな性格でなにげに身体能力高いし」

疲れたようにため息を履く藍華に大変だな、と返すミカド。まあ、彼が疲れた態度見せただけで動くような輩ではないのは解ってた。

「わはは。なあに安心しろ、応援ぐらいはしてやる。忘れてなければ」
「参加する気はない、と。お前本当さ、自由気まますぎない？流石駒王カイザーの皇帝……………」

天上天下唯我独尊。頭脳で馬鹿にする事も、力で黙らせることも出来ない存在。

唯一の欠点は女癖が悪いという噂だけ。まあ噂でもなんでもないので藍華は知ってるが。

「ふふ、そういうと思ってました」

「だ、誰だ！……………っ!?あんたは、ソーナっち！」

「いや普通に声でわかるだろ」

と、何時の間にか扉に立っていたソーナ。その瞳はしっかりとミカドを捉えている。

「毎年毎年仮病と思われる不参加者が多く、今年よりその対策として優勝組、最優秀クラス、最優秀者には特典が付きます」

「食券とかだろ？興味ねーよ」

「最優秀クラスには協力していただいたケーキショップの優先予約券、最優秀者には個人経営レストラン「堀井武者」の月間数量限定パフェ15回予約可能券を」

「やるからには勝つぞでめえらああああ!!」

何時の間にか壇上に移動したミカド。駒王イケメントップのミカドの言葉に女子達は沸き立つが男子のノリが悪い。と、イツセーがミカドの肩を叩きあとは任せろというように位置を入れ替える。

「おっばい!!」

「二——!!」

その叫びにハツと顔を上げる男子生徒達。

「二うおおおお！やってやるぜええ!!」

「……………何が起きたんですか？」

「知らね」

「へっ、イツセーの奴良いこと言うじゃねえ」

「さすが俺達の同士！」

「見直したぜ、兵藤……いや、イツセー！」

「お前はただの変態じゃねえ、大変態だイツセー！」

「二イツセー！イツセー！イツセー！」

「ねえ何が起きたんですか!?怖い！」

「だから知らね。まあ落ち着け、今夜たっぷり慰めてやるから」

こうしてクラスは一致団結して体育祭に挑むことになった。

再会

冥界で若手のレーティングゲームが行われるようだがミカドはこれっぽちも興味がない。

なので用意されてるホテルだけ利用して、現在はフェニックス領。

「久し振りだなライザー。元気にしてたか」

「久し振り……いや、お久し振りですね。ええ、貴方の立ち位置が明確になったおかげでフェニックス家の名に塗られた泥を払えました」

元よりはぐれ悪魔の侵入回数が多く、レアな神器と神滅具を持つ身でありながらレア神器のハーフ吸血鬼^{ヴァンパイア}は制御の目処が未だ立っていないのに夜外に出る自由を許す、神滅具使いは力を十全に発揮しないなど部下を導く者としても「え、お前それは……」と思うようなりアスの現状を教えてもらったライザー。

まあ部下に関してにはリアスに責任はない気もするが悪魔社会全体から見れば力を使いこなせない部下がいる。主の実力不足なのでどのみちマイナスポイント。見てくれば胸もでかくてタイプだが気は強く、何なら心まではあなたに捧げないとかほざいて真実の恋(笑)して浮気(貴族的にOUT)をしそうな不良物件であると聞き、家名に傷をつけられる前に婚約を解消したのに悪意ある印象操作に騙されたことにされて払拭するのだと恩人と戦わされた挙げ句、容赦なくボコボコにされてしまい社交界でしばし笑い者にされていたがミカドの立ち位置がリリースの後夫である事が解り評価は一転。

人間なら見下すがリリースの縁者ともなれば別だ。その身を切り裂けば今の72柱が産まれ、その肉片からでも魔王クラスの悪魔を生み出せる膨大な力の塊。聖書の神が生み出した、肉持つ眷属。己を信仰する人間を生み出す為に作り出した完全なる女。そんな偉大で強大な女悪魔の機嫌を損ねる馬鹿は少ししか居ない。まあそれでも虎の威を借る狐め、と思えば上がるバカはいるのだが。

だが表向きに馬鹿には出来なくなつた。それはライザーとして助かつている。

「俺に出来ることなら何でも。って、リリース様の後夫に貴族の三男如

きが逆らえる筈もないですが」

「ハハハ。確かになあ」

「……………そこで嘘でも俺とお前の仲じゃないか、とは言わないんですね」

「え、なんで？」

言う訳がなかった。相手王神帝やぞ。

他人の女だろうと見てくれ良ければ平気で抱くし他人の迷惑より己の快楽を優先するし絡んできた奴は殺して娘の一人のお土産にしたり仲間達と喰ったりする。自分本位の、群れで生きる人間らしくない、生物らしい生物だ。生物の本質って自己の優先だよね、ライオンとか他のオスを子供ごと殺すし馬もボスの座奪うとボスの子を群れから追い出すし。

それは偏にそれが出来る力があるから。

逆説的に自分にはどうにも出来ない事はしない。獲物を狩りすぎたら食いきれなかった分が他の肉食獣の餌になるか、腐るだけなので必要以上に狩りを行わない肉食獣と同じく、ミカドは手を出したら後々厄介な事になる相手には手を出さない。パールヴァティーとかカーリーとか。

つまり逆立ちしても自分の群れに勝てない悪魔達にミカドが遠慮することなどありえない。格下に対等の友達だぜ、と言うにはライザーはそこまで親しくないのだ。

「やあ、久し振りだね」

「ん？」

「――」

そして、空間をぶち壊して現れた褐色シヨタを見て瞬間ミカドは先程までの笑みを消し去り全速力で逃げ出した。

「壁が!？」

「相変わらず……………いや、あの時よりも速い逃げ足だ。連れないね、まづは再会を喜ぼう」

褐色シヨタの片手に黒い光が生まれる。バアル家の滅びの力にも似た、しかしより濃密な破壊の力。近くにある壁や床、天井が消え去

る。

「!!」

放たれる破壊の権能。実体化した破壊という理そのものの光。正しく神業に対して、ミカドは大量の魔物を生み出しぶつける。

悍ましいまでの生命いのちの濁流と破壊の力がぶつかり合う。一瞬にして消し去られていく数多の命、刹那の間に生み出される1000の命を消し去っていく破壊の力。と、僅かに勢いを失っていく破壊の力にミカドは視線を向ける。

セイクリッド・キャンセラー
「神聖拒絶」

「あ、消し切れねえはこれ」

シヴァ

「ああ、領の一部が」

触れてないのに光の通った跡はひび割れ砕け、塵へと消え去った。圧倒的な滅びの魔力、否、滅びそのものの破壊跡。心の何処かにあつた『バアル家の滅びの魔力は惜しかったかもなく』などという未練は綺麗サツパリ消え去った。だって、ねえ？バアル家絶対ここまでではないもん。

ていうかこれ、リリス様の後夫くたばったんじゃね？

と思つてたらなんかドス黒い蛇身にして邪竜にして蛇竜が出てきた。

「へえ、ヴリトラのレプリカか。散りばめられた魂はあちこちにあるもんね。全盛期の1割にも及ばないけど」

なんか身をよじっただけで屋敷吹き飛ばしそうなバケモンを期待外れとでも言うように嘆息するシヨタが居るんですけど。

「時間稼ぎにしかかなりはしないが、まあ2秒もあれば君なら逃げるか。だから手はうっておいた」

放たれる邪気の濁流たる黒炎の咆哮。触れればフェニックスの炎すら呪いに沈め飲み込むそれを、少年は片手で掻き消した。

「ああ、悪魔の青年。ここは君達の領地だし、慰謝料としてこれをあげよう」

その余波で龍を消し飛ばしたシヨタは黄金の装飾品を渡して何処かに行った。

「ファック！なんで冥界にシヴァがいやがる！」

集めに集めたヴリトラ系神器を全て使用し神すら殺せる魔獣を生み出したが恐らく2秒しか持つてないだろう。

速攻で次元の狭間に逃げ込んだ。

どっか異世界を経由してから雲隠れでもしようか、と思つてると別の生き物の気配。オーフィスはもちろングレートレッドまで去った

何者もない次元の狭間。何か住み着いたのだろうかと思っただけにこつちに接近してきてる。

「赤い、鳥？まさか、ガルダかよ!?」

インドラを滅ぼす者の異名を持つ神を殺せる神獣。時間をかければ同格は作れるが触媒も時間も何もなくインドとかいう頭のおかしなレベルの神話の中でもトップクラスの神を殺せる魔獣を作れるはずも無く、せめてもの抵抗に生み出した魔獣は尽く焼き尽くされその足がミカドを捉える。

「こん、の……い、なめんな焼き鳥が!」

SFに出てくるロボットのコアみたいのを取り出し神器の力を込めようとするミカド。が、その腕を掴まれる。

「まあ落ち着け王神帝。支配者の名を冠する者として、もう少し落ち着きを持ったほうがいい。ところでそれ、なんだ？魔力とも光力とも違う、この世のものではない何かを感じるが」

「……………シヴァ!」

「よよ、よう、ようこそいらっしやひましたシヴァ様」

「今回はプライベートだからね。こちらこそアポもなく迷惑をかけた」

「ははは。悪魔の常套手段を奪ってるな。ライザーの眷属もなんか人種バラバラだし、やってんだろぶっちゃけ」

フェニックス家広間。

使用人の如く立ったままガタガタ震えるフェニックス夫妻にライザー達兄妹。眷属？こんな場所にいたら心配だけで命が削れてくつての。

ライザーもミカドの軽口に返すことも出来てないし。因みに消し飛んだ領の一部は滅びの理が色濃く残っていたため時間操作でも治らなかつたので樹木系の魔物を腐らせた腐葉土で埋めた。やったね、来年から豊作だ。

「で、何しに来たんだよシヴァ。正直俺はあんたと二度と出会いたく

なかつたんですまして許してください勘弁してください」

前半の敵意もどこへやら、速攻で頭机に押し付けるミカド。相当シヴアが恐ろしいらしい。恐ろしいだろう。何せ星を滅ぼす力を持つ破壊神なのだから。

「そこらの神など単独で滅せる力を得ておきながら、僕が怖いかな？ 正直君の成長は予想以上だ。僕が勝つが、それでも無傷では行かないはずだよ？ 君が僕に勝てないとしたらその理由は僕を恐れるあまり本気を出せないからだ。ゾロアスターの悪神の一部を食らってるくせにね」

「ゾロアスター？ 彼処はアジ・ダハーカの死体以外手を出していない筈だが」

「アジ・ダハーカはアンラ・マンユが自らの神性を切り落とし生み出したドラゴンだ。じゃなければ、ハーデス如きに劣る神になってない」

「え、ハーデスってアンラ・マンユより強いのか？」

「今のアンラ・マンユなら、だけどね。弱体化してなければ祖神の石柱が祖神の子の子の劣るなんてある訳がない。実際かつての姿を維持できず闇の塊みたいになってるし」

それだけ弱体化するほど身を削り生み出された邪竜アジ・ダハーカ。他にも16の災難という概念を世界に定着させたりして弱つたらしい。

「君はそんな結構強い神の一部だった悪竜の死体を取り込んだんだ。もう少し自信を持ってもいいと思うけどね」

『神に勝てる獣産み放題だぜウェイ』と調子乗ってたガキの頃にあんたに片眼抉られたんでね。結構なトラウマなのよ」

と、時計の針が動く右目を抑えるミカド。

「第一俺が強くなるのは強さのイメージの明確化のためだ。蟻が一軒家とスカイツリーを『デカイ壁』としか認識出来ないように、俺自身それがどの程度の大きさか認識出来ないとかスカイツリーに車一台ぶっつけただけで壊せると勘違いしちまう。だから神クラスの強さを理解出来るようになり……たかつたんだけどなあ、イメージに左右されるせいでお前に勝てる魔獣が産めねえ」

「オーフィスやグレートレッドと一緒にいるのに？」

「そもそもなんで錬金術の象徴と聖書に記される赤い龍が強いんだよ」

「聖書に記される、ではなく聖書の神だけが記したが正しいね。どうせどの神話にも関わらないのに態々人間に広める神はいない。グレートレッドは夢幻^{ゆめまぼろし}。存在しないものが存在する矛盾。既存の存在とはそもそも存在次元の座標が違う。そのくせ、夢は誰もが持つ概念。あれに手を出せる呪いをつくった聖書の神は、そこだけは褒めるに値する。オーフィスに関しては世界誕生前からいた彼……今は彼女か。彼女を錬金術師達が後から崇めたのさ。まあ、世界の全てを解き明かさんとする学問の象徴なのだから世界そのものより広大な力と思ってもいいんじゃない？」

グレートレッドは聖書に記されているだけで聖書の龍というわけではなく、オーフィスも錬金術の龍と言うわけではない。なるほど納得だ。

「でも俺からしたらオーフィスはガキで変態で狭くて気持ちいいぐらいの認識だしなあ」

「まあ、トラウマが払拭されるのを気長に待たせ。ところで君、僕の養子にならない？鍛えてあげるよ」

「トラウマ払拭が遠のくどころか、やたら子煩悩なパールヴァティーに抱きしめられた瞬間殺されそうだからやだ」

「安心してくれ。首を切り落として投げて今度はちゃんと見つければ、見つからなくてもカッコいい顔にする」

「どうでも良いけどガネーシャの首から上が象ってそれもう意識は象なのでは？」

「魂は体にあつたからあれはガネーシャだよ。と、そうだ。君にお土産があつたんだ」

シヴァはそう言って懐から白い粉を取り出す。

「シャブセツ〇スはやってねえよ」

「神の遺灰だよ。愛の神だからその使い方も出来るかもだけど、君って昔の怪物の死体を核に復活させてるんだろう？彼は悪魔達とは別

の意味として魔王としての側面持つし、やってみたら？」

「女として復活させていいなら……うわ、シヴァの炎の残滓をまだ感じる」

時計の右目が反応するように青い炎に包まれる。否、それは目から発せられたのでは無く義眼がなければ空洞のほずの瞳孔からだ。

「では僕は帰ろう。君からは面白い獣の匂いもするし、次会う時はもっと強くなってる事を願う」

「強くなってなかったら殺したりは」

「する気はないよ、今はね」

つまり明日はわからないと言うこと。空間を素手で引きちぎり次元の狭間から己の神話領域に帰っていくシヴァを見送り、気配が消えたのを確認するとフェニックス家もミカドもその場で倒れる。椅子ごと倒れたミカドは天井を見上げながら額に手を添えた。

「なんで目えつけられてんのお、俺。俺逃げただけじゃん。神に勝てるかも、とか調子乗ってたけどお前一目見た瞬間あ、無理だつて逃げ出したじゃん。くそう、リリースの息子の能力もあんま役に立たねえし。まづいの我慢したのに。食うんじゃなかったか？いや、少しは効いたけど」

何やら悪魔として聞き流してはいけない事を言ってたが残念ながら気付くものは居なかった。

その後恐怖をふっ飛ばすために仲良く自棄酒。

死の恐怖を前にしたからか、生殖本能が刺激されライザーは眷属とやるために自室にこもった。一人駒一つであまり無し。

一人で相手出来る数には限度があつたので溢れていた眷属もいたがライザー以上に死の恐怖を感じてた男が使用人に手を出しているのを見つけた。

悪魔の祖であるリリースの因子が行為中にかいた汗と共に気化し、後はおもうお察しください。

レイヴェル・フェニックス

「お久し振りですソーナ様。お母様より人間界を学ぶよう申し付けられました、レイヴェル・フェニックスです」

ペコリと可愛らしくお辞儀する少女を見て、ソーナと椿姫は胡乱な視線で花戒桃に膝枕、由良翼紗に足裏マッサージされながら草下憐耶にピノを口に運ばせているミカドを見る。

生徒会室をなんだと思ってるんだろうか。と、生徒会室で何度もやってる自分を棚に上げてソーナは眉根を寄せた。嫉妬とも人は言う。

「今はミカド様の家でお世話になっております」

因みにミコトと仲がいい。ミコトは悪魔に好かれるからね。見た目の歳が近いのもあるが。その経由でアーシアとも仲良くなってる。転校してくれば駒王の金髪シスターズとでも呼び名がつくだろう。

「つまり彼女がフェニックス家から貴方への献上品と……」

「はい？それは、どういう……」

「何だお前自覚なかったのか」

ソーナの言葉に首を傾げるレイヴェルに、ミカドは呆れたように立ち上がる。

打ち合わせもなく巡巴柄と仁村留流子がホワイトボードや白衣を留意した。

「……………椿姫、私の眷属がミカド君に調教されてませんか？」

「落ち着いてください会長。会長も私も含めて彼に調教されてます」

そんな会話をする生徒会長達を他所にミカドはホワイトボードに絵を書いていく。

「俺がソーナから聞いた限りの各家の権力差はこんな感じだな。魔王排出家はそこそこ高いが大王派閥が結託し上位を独占中。ぶっちゃけ魔王は大王より下だ。だがそこに新たな権力者が現れた」

と、頭の上位に2つ程絵を描いて、少し考えた後3つ付け足した。

「それがリリスとその後夫の俺。後ついでにリリスの直系であるミコトも入れとくか。少なくとも大王派は内心「一度死んで人間の力で

蘇っただけのくせに調子のんなクソが」と思ってようと口に出す事は出来ない。裏でコソコソ謀やってるみたいだから今度数が半分になるまで殺しとこ。これが本当の半殺しってな……まあそれはおいといて」

「あの、ソーナ様？今明らかに置いてはいけない言葉が聞こえませんでした？」

「？椿姫、何か変なことを言っていましたか？」

「さあ？解りかねます」

じゃあ気のせいかな？とレイヴェルは小首をかしげた。

「つまり俺と交流を結べるって事はそのままステータスになる状況になったわけだ。そのうえで俺は一度ライザーにリアス・グレモリーの現状を教えてやったから、まあライザーが気に入られてると思っただろ」

実際は心優しいミコトの頼みをしかたなく聞き、後で貴方達に頼らなければ良かったなどと言い訳されては敵わないのでどのみち婚約破棄になるようにするためだったが。

「フェニックス家は涙の恩恵で稼ぎこそ多いものだからこそ成り上がりと嫌ってる奴等もいるんだろ？そんな中、一族の者が俺と親しいってのは最高に嬉しいニューズ。だけど勘違い。だから俺が女好きなの知ってお前を寄越したってとこだな」

「そ、そんな……お母様達が、まさか……でも」

「まあ俺女に困ってねえから要らねえけど」

「……………」

それはそれで女として複雑なのだが。

「そういえばミカド君ってレイプはしませんよね」

「する時はするぜ？敵とか俺を都合よく利用しようとして来た奴とかなら。今はお前等がいるからなあ」

「……………」

「そこは照れるところなんですの!？」

「まあ生徒会の一部はある意味レイプとも言えなくもないかもしれないが」

「それは、どういう」

「ソーナ達との関係がバレた際縛り上げて指でいじってからソーナ達とやりまくった」

「……………随分、欲に忠実なのですね。貴方も、彼女達も」

「こいつ等は悪魔で俺は悪魔の祖の因子を受け継いでるからなあ」

「私は悪魔ですが、一時の欲に流されるなどと言ったことにはなりませんわ……………何故そんな生暖かい目で私を見るのです!？」

「生徒会役員共が通った道だから」

ソーナもミカドも目上の相手だ。婚約関係でもない相手と獣の様にまぐわっていると言うのは貴族として思うところはあがあるがレイヴェルが何か言えることではない。そもそもが悪魔の祖リリスが姦淫を認めてる訳だし。

産めよ増えよの冥界ちに満ちよを推奨しなくてはならない現状なので、血統主義の貴族的には悪魔の祖の力と因子を宿すミカドとの子はむしろ望まれるもの。レイヴェルもおそらくはそれの為。改めて現状を説明されるとそうとしか思えない。

「貴族ですもの、理解はできませんが……………」

それでもやはり恋愛はしたい。顔はそこまで固執しない。強くて優しくて勇敢な相手がいい。

「……………」

強さ、で言えばシヴァ公認で並の神より強いらしい。優しさも……………自分が送られてきた目的を知らながら滞在を許してくれるあたりあるのだろう。でも勇敢さは……………いや、そもそもシヴァ相手に勇敢さ見せろってだいぶハードル高くない？

あれ、そう考えると悪くない気がしてきた。そんな頭を冷やすため夜風に当たろうと屋上に向かうべく階段を登る。外から見たら3階建て一軒家なのに中はめっちゃ広いし屋上から見た景色が何故か6階の建物。

5階から6階に上がると扉の前で蹲る人影を見つけた。

「貴方は……確か紫藤さん？」

「は、あつー……………ふえ？」

顔を上気させ息も荒く、肩を震わせていたイリナはトロンした顔で振り返る。涎が垂れたその顔を見て、思わずゴクリと唾を飲むレイヴェル。イリナはハツと気付くと寝間着のズボンの中に突っ込んでいた手を抜き慌てて立ち上がる。

「ご、ごめんなさいー！」

何がだろうか？

大慌てで逃げていくイリナに首を傾げ、レイヴェルは彼女が除いていた部屋を見る。ぐったり倒れるレイファイアがいた。いや、顔に傷がある。あつちは正確には元グレイファイアの弟だったか？

そしてベッドには

「え……………うそ、ミコトさん？だ、だって親子つて……………わ、わあ……………あんな風に!？」

「何をしている？」

「うひゃあ!？」

振り返ると青髪に緑のメツシユの女性が立っていた。確か名は、ゼノヴィア。先程覗いていたイリナと同じく元教会の戦士。

「つて、あー！」

「?ああ、安心しろ。部屋の各所は音を通さない。食事の時鳴らす鐘は別だがな。何でも周囲の住人から夜少し声を抑えてくれと苦情があつたらしい」

声を出してしまい、恐る恐る部屋を見るレイヴェルにゼノヴィアがそう返す。そういえばドアが開いてるのに声が聞こえてこない。そんな理由なのか。

「私もこれから混じってくるが、君もどうだ？」

「か、仮にも教会の元戦士がどうなのですかそれは」

「慎ましく生きろと教えを説いた神が死んだのだ。自由に生きて何が悪い?まあ、私も最初はやけになつてな、とは思っていたが……………こう、ミカドは相手に合わせて抱き方を変えてくれてな。頭を撫でられたり首や肩にキスされたりしながら抱き締められて……

満たされるし癖になる。何、合わないと思えばやめればいい。どうせ悪魔の出生率じゃ最近出た薬使わなければ一発で受精したりしないだろう？」

それは、まあそうだろう。

ついでに言えば自分はフェニックス。処女膜だって治る。フェニックスの女は魂が認めた相手との行為でのみ処女膜を失うのだ。

だからきちんと恋した相手に処女は捧げられる。そんな言い訳が思いついた時点で、レイヴェルがゼノヴィアの手を降り解けるわけもなく共に扉の向こうへと…………

神話の成り立ち

「父さん、それは？神の、遺灰ですよね？」

瓶に詰められた白い粉を見つめるミカドにマイが話しかける。マイとシンは祖神の直系。それが神に連なる物であるとは解るようだ。「そのとおり、インド神話の神の遺灰だ。それも、シヴァに影響を与えるほどのな……………」

復活させたいが、流石に遺灰だけでは無理だ。カーマに関して夫が悪い事をしたと思ってるパールヴァティーから貰った髪もあるが、これでも少し足りない。いや、復活だけならもう出来るけどミカドは復活させるなら強化して復活させる方針なのだ。

「姐^コや酒^{サケ}?、ジェヴオーダンとは文字通り格が違う。そもそもあつちの死体は破壊の炎を受けた訳じゃねーしな。とりあえず復活させて強化方法はあとから考えるか？」

どうでも良いけど神話によればシヴァがパールヴァティーを受け入れるとき、シヴァはカーマに肉体を返すだろうと予言があるらしい。ある意味当たってたな。プラデユムナ? 知らんな。

「魔王としての性質も持つてるし、色欲を司る悪魔で魔王クラスの力持つてる奴が居れば使えるんだがなあ」

「私が産んでやろうか?」

と、提案するリリス。

「ん〜。生まれたてだとなあ、神降ろしに耐えられないかもしれんし。そうなると素材が無駄だ」

「神の遺灰を素材……………神をも恐れぬとは貴方のためにある言葉ですわね」

「何いってんだ。シヴァとかクソ恐ろしいわ。俺の安心のためにシヴァに勝てる魔獣生み出すぞ何時か絶対」

「自分が勝てるように、とは言いませんの?」

「俺は創造者だぞ? 黄昏の聖槍や二天龍、獅子王の戦斧ならともかく……………」

本人に力を与える神器ならば、なるほど安心のためには己自身を鍛

えるしかない。だがミカドは創造系。

「俺は少なくとも力の方向性を己の強化優先にやしない。そもそも俺のこれはそういう力じゃねえんだからな。より強い存在のイメージの為に俺自身を鍛えるだけ。んで、俺より強い奴を作る。ぶっちゃけ俺よりシンの方が強いしマイはまだ未熟だが潜在能力は俺より上だしな」

その言葉にビールを飲んでるシンを見るレイヴェル。

「後、三妻も俺より強いな。ティアマトとイザナミはともかく、リリースにやベッドでも勝てねえし」

正○位か騎○位で争ったと伝えられるだけあり未だ責められてる現状。生々しい話にレイヴェルは耳まで真っ赤になる。

「というか即席ならともかく時間をかけて自意識と力を与えたり復活させた魔人は全部俺より強い」

それはつまり魔王以上の、超越者以上が何人もいる事では、とレイヴェルは血の気が引いた。まあ自意識を持たせた結果留まらず各々自由に過ごしてるらしいが。

「だが呼べばすぐ召喚できる。去年の夏休み異世界でも召喚できた」

「異世界……………」

「だから俺を守る意志がありシヴァ相手にも戦える魔人が俺の望むもの。そうすりゃ俺は、安心して好きに暮らせる」

「勝てるのですか？あんな理外の果のその先のような存在に」

「勝てるのを作るさ。そりゃあ怖えよ？無理無理俺なんか勝てるかって思う。けど何時までも怯えるわけにやいかんだろ。飯食って女抱いて漫画読んで家族と楽しく過ごす。俺が欲しいのはそんな生活。なまじ裏側に関わっちゃうとなあ、この世界がどんだけ危うい均衡で保たれているのかわかって安心どころじゃねーのよ。主に三大勢力のせいで」

各方面に喧嘩売りまくった三大勢力。他の神話の領域にまで布教……………で、怒りを抱くのはその地の人間か心根が三下の神ぐらい。そもそも神々自体がこの世界からすれば余所者だ。人類創造が存在しない日本神話が正しい在り方。故にこそ日本神話は領土内の人間が

何処を信仰しようと気にせずそれこそ祭りや年明けにしか来ない国民に気まぐれに加護を与える。

逆に自ら人を作ったと自称する神話群は人間を所有物と見てる事が多く勝手に持つて行く三大勢力に怒りを抱いているものも居る。自分達が統治の為に創造者を語った自覚がある主神達は殆ど気にしてないが。

「ぶっちゃけ三大勢力がまだ形保てる理由は主神共の慈悲……とは違うか。無関心……そう、無関心さ故だからな？とは言え祀られる者達だ。信者が滅ぼして滅ぼしてと何度も願えばいつか動く。まあ俺にや関係ねえけど……そんな時はソーナ達とセラ、後お前も助けてやるよ」

「……………シヴァ様が相手でも、ですか？」

「その為に強い魔人創りてえんだろ。いや、いつそミルさんに頼むか？」

ミルさんと聞き慣れない、恐らく女性の愛称を呼ぶミカドにレイヴェルはムツと顔をしかめる。昨日あれほど人の体を貪っておいて……いや、女好きなのは知ってるけど。

「……………！」

思い出し、慌てて顔振るが火照った体はその程度では熱を失わない。ミカドは材料をしまった。もう寝る気なのだろう。レイヴェルは声を掛けようとした、その時だった

「あん？これは、転移か？」

「かんとんに、はじける。どう、するの？」

ティアマトが小首をかしげながら聴いてくる。今夜は自分の番だからか放置して欲しそうに腕に抱きつきながら上目遣いでミカドを見ている。

「なあレイヴェル、これどこの家紋？」

使われようとしている強制転移に刻まれていたのか、悪魔の家紋を見せてくるミカド。レイヴェルはその家紋に見覚えがあった。

「旧アスモデウスの家紋ですわ」

「アスモデウスね。どれどれ……………」

スマホを起動しウィキ○ディアで調べ始めるミカド。

序列は32番目だが七大罪の色欲を司る。そして、悪魔社会において四大魔王の一角。

「行っていくる！」

「……………あ」

ティアマトが切なげな声を出す。ミカドはさっさと転移してしまった。涙目でレイヴェルを睨むティアマト。めっちゃやくちや可愛い。

「はじめましてだな人間。いや、リリース様の後夫ともなれば対等に接する権利ぐらいやろう。私はクル——」

そこで言葉は止まる。ミカドが生み出した毒蛇に噛まれたからだ。

「き、貴様！真なる魔王に何を！」

「ん？」

と、周りに上級悪魔がいっぱいいた。全員もれなく敵意を向けている。

「ミコト、お土産だ。新鮮な上級悪魔仮死死体詰め合わせ」

「わあい！」

ガチャガチャのカプセル見たいなカプセルを渡されたミコトは笑顔で喜んだ。

神の復活

「いけえフリード！アーシア！優勝を我等がクラスに！」

「は、はい！頑張ります！」

二人三脚。アーシアとフリードのペアは1位だった。色々改造されたフリードと最強の聖剣（教会の教義に則れば精霊が作ったから光の魔剣）たるエクスカリバーの担い手であるアーシアが、身体能力で一般人に負ける訳がない。

ゼノヴィアやイリナも教会の戦士として、聖剣使いとして一般人とは一線を画すし、更には悪魔のイツセーに、精神修行ではなく肉体修行で仙人になったミカドまでいる。負けるはずがなかった。

因みに借り物競争の際「一番好きな生徒会の生徒」と私情挟みまくりなお題が出たので敢えて仁村を選んだ。嬉しそうな、でも帰るのが怖そうな顔は笑えた。

イツセーはずっとおっぱいおっぱい言ってた。サーゼクスが「おっぱいドラゴン」なるテレビ番組を作る気らしいとセラフオールが言っていた。

「さて、じゃあ最後の材料を加工する」

「はい。カーマデーヴァには悪い事をしましたからね。ようやく謝る事ができます」

輝いて見えるほど美しい肌をした女がそう微笑む。優しい笑みを浮かべた、女神だ。

彼女の名前はパールヴァティー。シヴァの神妃の一柱にしてシャクテイの一柱。

「……………何でいんの？」

「？」

正確には何で来たの、だが。日本神話とミカド宛に日本に滞在するからカーマデーヴァ復活の際にはぜひ呼んでくれと手紙が来た。

まあ復活させた後でいいだろうと思いき復活の準備を勧めたらイ

ンターホンがなり、ミコトが対応し連れてきた。

当の本人は誰に言っているのだらうと不思議そうに首を傾げている。天然だ。

「レイヴェルはともかく、ゼノヴィアとイリナも……」

レイヴェルは自身とそういう関係になるかもしれない……というかほぼなっているミカドの力を見に来たのだろう。ゼノヴィアとイリナは何故だ？フリードやアーシア、グレイフィアはもはやミカド勢力だから解るが彼女達は居候のようなものだ。

「何、異教とはいえ神の復活には興味が尽きなくてね」

「右に同じ」

という言い分らしい。

「つつても俺のは純粋な復活とはちげえけどな。そういうのは聖杯の領分だろ」

ミカドの蘇生はあくまでも対象の魂が根強く残っている場合に限る。怨念を吐き続けた殺生石や、死後も自我を保ち続けた酒吞童子。ジエヴォーダンの獣に至っては広域に広がった肉体持たぬ呪いが領域内の狼に付き変異させていた怨霊じみた存在だった。意思総体を肉体に固着され埋められたのだ。そりや、悪用されぬために速攻で埋めるし埋めた場所も明かされぬようにする。まあ、ミカドが見つけて掘り起こして器を核に新たな肉体を与えたのだが。

「なんで、生まれた魔人に元の人格が残ってるとは限らないぞ？」

実際怨念の籠もったものや本人が残した呪いの品を使ったならともかく、死体を核にした物で元の人格が残ってるのはかなり稀だ。

「うーん。まあカーマデーヴァは復活も予言されてますし、魂のしぶときはインド随一だと思います」

「なら、やってみるか……」

では材料を用意します。

まずはインドでもトップクラスの神格持ちの女神、パールヴァティーの髪。そして今回復活予定のカーマデーヴァの遺灰。そして

「貴様！離せ、この私を誰だと思っている!？」

色欲、情欲などを司る魔王クラスの悪魔です。

「時にパールヴァティー。ボルバキアって知ってる？」

「さあ……」

「簡単に言えば虫のメスに寄生して卵巣を利用して増える寄生生物。オスは要らないから殺すか、メスに変える。これはそれを真似たうえで感染力を消して悪魔に作用するようにした寄生魔獣と共生してる魔獣だ」

「お、おい？何をやる気だ、やめろ！」

サソリのような尻尾を持った魔獣が縛り上げられた悪魔の首に尾の棘を指す。

「がぎゅ!?ぐぎゅるがああああ!?」

ガクガク震えながら泡を拭き、体が作り変えられていく。あまりの光景に何名か目を閉じた。アーシアに至ってはフリードが耳を塞ぎ前に立ってた。

「そういえば女のゴとして復活させるんですたっけ?でもどうして?」

「俺が女好きだから」

「でも魔人の方々には男性も混じってますよね?インドで観光をしてらした火山君とか」

「まあ、もう一つの目的としては最近できた弟子の強化に使えないかなあ、と」

あの男に恋人でも出来たら、くっそ生意気な赤虫はどんな反応をするのか。まあそこは蘇った本人の自由だが、取り敢えず蘇らせたお礼として時期が来たらイツセーに胸を揉ませよう。

多分、赤龍帝は進化する。

「さて、女体化完了。脳と魂と肉と内臓はいらねえから虫の餌だな」

「は……え、えさ?……や、やめ!」

制止の声を無視してミカドの影から溢れ出た虫の大群が血やリンパ液を吸い付くし肉を食い千切っていく。悲鳴は数秒。すぐにペキパキと虫同士ですら食い合いを始めた音がする。

「これで今回の骨組は用意できた。後は核である遺灰……後パールヴァティーの髪を置いて、と」

虫の欠片を風で飛ばし、瓶から遺灰を零すように頭蓋骨にかける。パールヴァティーの髪は肉があつたら臍あたりの位置に置く。

「性質はカーマデーヴァではなくマールラとしての側面を。使う力は魔獣を産んだティアマトと姦淫のリリスを多めに……さあ、始めよう」

と、尋常ではない力が溢れ出す。カタカタと骨が鳴り、髪の毛が解け骨に溶け込む。遺灰が質量を増やしていき、骨に纏わりついていく。室内で風が吹き荒れ、眩い光りに包まれた。

「せ、成功したのかな？」

「解らん……？」

「どうしたの？ゼノヴィア……っ、あ………れ？」

空気が変わる。肌が泡立つような生温く、それでいて舐め回されるかのような重みを持つ。ストーン、とへたり込んだイリナは下腹部に熱がたまるのを感じ、頬を紅潮させ混乱していた。この感覚は知っている。隠れてみながら、慰める時にも似た……。

「あ、う……っ、はあー」

近くで同じように崩れ落ちたゼノヴィアが艶めかしい声を上げる。見ればその手は足の間へと伸びて、指の動きに合わせて体がビクビクと痙攣していた。

「フ、フリード……さん」

「アーシア……」

フリードとアーシアが潤んだ瞳で見つめ合い互いの唇を貪るように重ね合わせる。気を利かせたのかミカドに転移させられた。

「は、あ……ふうわあ！」

「あつ、ああ………にやに、これえ！」

「この、多幸感……は、じ、人類の幸福に……あつ、役立ち、そ……ふう、ん！」

レイヴェルやマイ達も同様の症状が出ている。出ていないのは、ミカドを含めた一定以上の強さを持つ者達だけ。イリナの手も何時の間にか快樂を得るために動いていた。

「………ん、ふわあ〜」

そんな気怠そうな声が、先程まで骨があつた場所から聞こえた。視線を向けるとパールヴァティーによく似た女性が一糸まとわぬ姿で寝起きのように伸びをしていた。

愛の魔王

空気そのものが、空間そのものが、一つの命令を持ったかのように変わる。墮落せよ、溺れよ、発情せよ、貪れ、満たせ。そんな命令に耐えられず自らを慰める者達を虫でも見るように見回したパールヴァティー似の美女はまだ現状が掴めないのか部屋を見回しリリスやイザナミ、ティアマトとシンを警戒するように見て、パールヴァティーとミカドを見てゲツ、と顔をしかめる。

「誰かと思えばパールヴァティー。貞淑を司るあなたが何故ここに？オマケに……仙人？はあ、やだやだあの男と同じく自らに苦行を課して俗欲を捨てるマゾヒストじゃないですか……んん？まぞひすと？」

口に出た知らぬはずの単語に首を傾げる女。

改めてもう一度周囲を見回し、真っ白な肌の己の体を見つめる。

「……………あれ？」

ピシリと凍りついたように固まり冷や汗を流す。顔は笑顔を貼り付けたまま、錆びたブリキ人形のようにギギ、と振り返った。

「なんですかこの体!?私、死にましたよね？蘇ったら、女?は!」

「さっきまでの魔王オーラは何処へやら。いや、まだ影響は出てるが。鏡ならそこだぞ」

「!!」

壁の姿見の前に立ち、白い女を鏡の中に見る。困惑しながら頬を触り、パールヴァティーを見て、また姿見を見る。

「なん、なんですかこの姿!よりによって、その女と同じ!?頭アーパーなお花畑女神と一緒にの姿とか……うわあ、最っ悪」

「アーパー?」

言葉の意味がわからず首を傾げるパールヴァティー。嫌味が通じなかった女はチツと舌打ちする。

「その様子だと、記憶はしっかりあるみたいだな」

「ええ、ええ。はじめまして。私はカーマデーヴァ。どうぞカーマとお呼びくださいな……それにしても、俗欲を捨て去って苦行を歩む

仙人様。私のような女としては同胞様方に顔向けできませんよ?」

「ああ? 何言ってるんだ。親父は近親相姦どんと来いの色情狂だし気に入った菓子のためなら殺そうとしてた奴殺さなかつたりする世俗にまみれたダメ人間だぞ?」

「おいこらシン」

夫を侮辱する娘の言葉に叱るべきか、それとも最近相手が増えたせいで相手される回数が減った不満をぶつけるべきか迷うティアマト。

「はあ? じゃあ何で仙人なんか目指して……」

「いや、気付けばなつてた」

「……………へえ?」

と、その言葉にニヤニヤ笑うカーマ。

「ぶつ、あつははは! 俗欲まみれのくせに、いつの間にか仙人にい!? 悟り、とはまた違いますが苦行を行つてたどこぞの坊主に聞かせたい話ですねえ」

ケラケラと楽しそうに笑うカーマ。魔王マールラとして仏陀を墮落させようとしていたのだったか。

「カーマ」

「……………なんですかあ?」

パールヴァティーに名を呼ばれ苛立ったように振り返るカーマ。パールヴァティーはそんな彼女に頭を下げた。

「我が夫のしでかした事、夫に代わり謝罪いたします。申し訳ありませんでした」

「謝られたところで焼かれた過去は消えませんよ。とつてもとつてもとつても痛かつたんですよ? 愛されて甘やかされてる貴方には分からないでしょうけどねえ」

「……………」

その言葉に気まずそうな顔をするパールヴァティー。まああのシヴァが頭が上がらない相手がシヴァの妃達だからなあ。

「けど、なんで私あなたなんかのそっくりさんになつてるんです?」

「復活……というかまあ、創造なんだが。それに使った材料の中で一番力があつたのがパールヴァティーの頭髮だからじゃねえの」

「……………再創造？」

「俺、アナイアレイション・メーカ『魔獣創造』の力使えっから」

「アナ……………？なんですか、それ……………」

「……………」

「彼……………彼女は神セイクリッド・ギア器 作成前に亡くなってましたから」

「あ……………」

パールヴァティーの事は嫌いっぽいのでミカドが話すことにした。

「なるほどなるほど。人の血に宿る異能を与える道具。その中でも神を殺せる神滅具ロンギヌス……………えっと、貴方の場合は魔王という側面においては私以上のその女とシヴァと性質こそ違えどほぼ同格のその女神、死の概念と融合してる女神を宿していた、と」

「全員休眠状態の所を魂だけ封印されたみたいだな。イザナミの本体は黄泉の国で腐ってた」

その説明を聞きカーマは観察するようにミカドを見る。

「……………道具？」

「ああ、俺の場合力を十全に発揮出来るようにする為に融合したから神器はもうない。つまり俺は最後の魔獣創造者って訳だ」

「逆に言えば、人間に耐えられる程度の力に抑えられてると……………神舐めてんですか神殺しって」

「聖書の神を殺すには十分なんだろう」

「ああ、なるほど」

納得ですね、と肩を竦めるカーマ。

「それで、私はその力を使って悪魔の骨と私の遺灰とその女の髪で復活した訳ですか。でも何で女？」

「俺の弟子に女性の胸で進化するやつがいてな。愛の神の胸揉ませたら多分進化する」

「はあ？胸で進化するなんて妙ちきりんな生き物がいてたまりませんか」

「女神が脱皮したら新しい神が生まれるインド神話からしてもやつぱ

異常か」

「だ、脱皮つてもつと言ひ方を……」

黒い肌を脱ぎ去り金の如き肌を得た女神は脱皮という表現になんとも言えない顔をする。因みにその黒い肌から生まれたのがカーリーで、肌が黒いからと断っていたシヴァは何故かカーリーも妻にしてる。

「どうも照れ隠しだったみたいです」

「あのシヨタが？」

「シヨタ？」

「今は子供の姿なんだよ」

「……貴方の趣味ですか？」

うわあ、と言いたげな目を向けるカーマ。どうやら昔のシヴァはシヨタではなかったらしい。

「だから私の性質魔王よりなんです。神性は保てるけど……」

「ああそうだ。そろそろ垂れ流しの淫気消してくんねえ？俺等は平気だけどゼノヴィアとイリナが慰め合い始めたし」

舌や脚を絡ませ抱き合うイリナとゼノヴィアを見ながらカーマに頼むミカド。カーマは「新しい体だから勝手がわかりませんねえ」と体の感覚を確かめながら目を閉じる。イリナ達に向ける視線は、どうでも良さそうだ。

「虫程度にしか見てねーな」

「虫は好きですよ私？私を殺せませんし……」

やがて空気が正常化していく。とは言え発情した者達は収まりが利かないようで己を慰めたり慰め合ったりしてる。

「まあ、私の現状は解りましたよ。蘇らせてもらいましたからねえ、あなたに従ってあげます。ていうかインド神話に戻りたくありませんし……不満があるとするならこの体じゃラティを抱けないことですかねえ」

「シヴァは姿変えてんだろ？お前も似たようなこと出来ねーの？」

「……………あ、生えた」

「アルダナーリーシユヴァラみたいですね」

とか言いながら夫以外のは見る気がないのかパールヴァティーは目を手で覆っていた。

「ああ、でも私の復活ってかなりイレギュラーですし、ラティの復活はまだ先ですかね？」

「そうじゃね、知らんけど」

「その時はぜひ、彼女も神としての復活を。多分人として蘇ると思うので寿命に差ができちゃうでしょうし」

「ああ、それぐらいなら構わない」

「では、私は貴方に従ってあげますよ。こんな体ですし、どうぞ好きに使ってください」

「…………シヴァの妃似のお前を？殺されない？」

「彼奴見た目は気にしないから大丈夫ですよ」

「ところで神格持つてるなら魔人じゃなくて魔神の方がいいか？」

「いいですね、それ。悪魔と一緒にたにされたくないですし」

与えられた部屋で自分を慰めるイリナ。

カーマの淫気に当てられ、体が火照り、熱が引かない。先程まで慰めあっていたゼノヴィアは道具だけ渡して部屋から出ていった。おそらくはミカドの部屋に向かったのだろう。何時ものように体を重ねているのだろう。

「あ、あつ…………はあ、ん！く、ふう…………」

涎を垂らし、汗を流し、シーツを様々な液体で湿らせるイリナ。足りない…………何度いっても収まらない。

「あらああ、苦しそうですねえ」

「っ!？」

「ああ、別に今更取り繕わなくていいですよお」

不意に聞こえた声に振り向くと、何時の間にかカーマがイリナを見下ろしていた。重力の縛りなど存在しないとも言おうようにその体

は浮かんでいる。

「カ、カーマ……しやま？」

「ええ、はい。カーマです。マールでも可……それにしても、苦しそうですねえ。まあ魔王としての私は煩惱の化身ですからねえ。一人で慰めてスッキリなんて出来ませんよ？ご近所さん達も子宝に恵まれるでしょうねえ」

人という存在を見下し嘲笑う魔王がそこにいた。理性だの何だのを踏み躪るように獣の如く疼きを収めようとする人間を嗤う魔神がそこにいた。

「こ、これ……戻し、て……お願い、しますう」

「え？嫌ですよ。今の私はカーマであると同時にマールとしての側面が強め。墮落する人間を見るのがだあい好きですからねえ。それに、聖書関連の人間なんですつてねえ貴方……強欲、傲慢、暴食、嫉妬、憤怒に怠惰。果には色欲を罪として七大罪とする宗教。あの男思い出して嫌いなんですよねえ……人間創ったなんて嘘に、知恵の実を食べなければあらゆる欲が無いなんて嘘まで記しちゃうから人間として持つべき当然の感情も持ったら罪になっちゃうんですよ」

聖書の教えを馬鹿にされ、追放されたとはいえ未だ信者のイリナは文句を言いたげにカーマを睨む。

「ま、あぶ……油ハム、でしたっけ？美味しそうな名前の聖人とかは神に盲目的に従い続けて我が子を殺すのに躊躇いがなかったそうですし？それぐらいの強い信仰心があれば耐えられますよ」

「た、耐えてみせ、ます……わたし、私は元でも、教会の……」

「へえ。どうせ無理でしょうけどねえ……ほおら、墮落しちやえ墮落しちやえ」

「はっ、はっーや、あ……」

臍に指を突っ込まれクリクリと弄られる。体の上から女の大切な場所を押し潰されビクビク震えるイリナ。舌を突き出しながらもカーマの腕を掴み引き離そうとする。

「私の力は心の底から抗えるなら効かないはず何ですけどねえ。貴方みたいな、ムツツリって言うんでしょう？」

「ち、ちが……！そんな、ことお……………」

「じゃあ試してみましようか♪」

「……………ん？」

「へえ…………？」

部屋が変わる。入ったことが無い部屋……………だけど知ってる。何度も覗いていた部屋。ミカドの部屋……………

「ああ、カーマの仕業か？」

イリナに気付いたミカドはゼノヴィアをベッドに横たわらせると立ち上がる。

「ちよっと待ってろ、今それ鎮めてやるよ」

そう言って、頭に手を伸ばしてくる。

「……………あ」

その手を反射的に払うイリナ。鎮めてやると言う言葉の意味を、深読み……………した訳ではない。

期待と欲望に濁った瞳を向けて、言い訳を探すように自分からは言い出さない。

「あ、えつと……………あの……………わ、私は……………だ、駄目だから……………か、神に身を捧げて。だから、その……………」

「なら部屋に戻れよ」

とん、とイリナの額を中指で軽く弾くミカド。頭の靄が晴れていく。

「淫気は体から追い出してやった。熱もじきに引く……………部屋に戻りな。それとも……………お前はもうしたい？」

「……………」

ハアハアと息を荒らげ潤んだ瞳を向けるイリナ。そして……………

「……………！……………！」

朝日が窓から差し込み、イリナは目を覚ます。

服は、着ていない。昨晚の出来事を思い出す。

「わわ、私何て罪深いことを?! ああ、主よお許してください！」

祈りを捧げるイリナ。まだ自分は聖書の神の信徒のつもりだ。いや、未婚の身で戸籍上は独身でも妻のいる相手と関係を持つという姦淫の罪を犯してるが。

「うう、あと少し我慢すれば収まったはずなのに……私の馬鹿あ……主にも一誠君にも顔向けできないわ」

あんなにはしたなく声を荒らげ、恋人でもない男に四肢を絡めて……。

「……でも……すつごく、気持ちよかったなあ」

昨晚のことを思い出しフニヤ、と頬を緩めるイリナ。慌てて首を振り服を着替え部屋から出る。

「アーシア……その、昨日はすまない」

「謝らないでください！その、私が我慢できなかったから……」

「違う！我慢できなかったのは、俺の方だ！君が……魅力的で」

「フリードさん……」

駒王の日常

「と言う訳で、イツセー。今日から君はこれをつけろ」

と、ヴァーリがイツセーにチョーカーのような物を渡す。

「おっばい?」

「これは乳語翻訳機^{バイリンガル}。アザゼルの作った君の言葉の翻訳機だ」

「おっばいおっばい!」

「……すまん、何を言ってるかわからん。とにかくつけてくれ」

『……ロ、セ……殺シテ、クレ……』

ヴァーリの言葉にチョーカーをつけるイツセー。彼の左腕からは怨念のようなものが滲み出ている。

「あ、あ……皆、俺の言葉わかりますか?」

「っ! 解る、解るわイツセー! 貴方の言葉が!」

「あらあら、ようやく言葉が通じ合いましたわ」

「イツセー君……」

「イツセー先輩!」

リアスが感激し朱乃が微笑を浮かべ裕斗とギヤスパーが感激し……小猫だけは何とも言えない顔でそんな彼等を眺めていた。

「それにしても乳語翻訳機^{バイリンガル}って……アザゼルさん、俺の技を参考にしたんですかね?」

「? お前の技?」

「え? ほら、ソーナ会長との戦いで使ったじゃないですか。乳語翻訳^{バイリンガル}」

「……?」

イツセー曰く、人の胸の声ならぬ女性のおっばいの声を聞けるらしい。何言ってるのこイツ。

「いやあ、神の管理も離れ愚かしい人間なんて墮落してくだけだろうと思ってきましたけど、ここまで墮ちますか。仏陀とはまるで逆ですね」

「……ここまでの変態はあと二人しか居ねえよ。しかし、おっばいの声……おっばいの声って!」

腹を抱えて笑うミカドと困惑しながら珍妙な生物を見るような目

を向ける愛欲の魔神。彼女をしてもイツセーの性欲は理解不能の域にあるようだ。

「……………ところで、この綺麗なお姉さんは？」

「転校生カーマ・テーヴァ。俺の新しい魔神」

「でしようね。あなたの配下は、基本的に魔人ばかりなもの」

と、特に気にした様子もないリアス。イツセーはだらしない顔でカーマの胸を見て、うつと顔を顰めたカーマはミカドの背に隠れる。

「墮落した人間が好きなんだろ？代表みたいなもんじゃん」

「墮ちた底を突き抜けてるじゃないですかあ。墮落というか……………うん、言葉に出来ないですね」

ミカドの首に腕を絡め胸を押し付けるカーマ。イツセーは物凄い目で睨んでいた。

「時にドライグの精神は大丈夫か？」

『頼、ム…………殺シテ、クレ…………俺ヲコノ世カラ、消シテクレ…………アルトリア、俺ヲ…………』

「最近ずっとこんな感じなんです」

「ド、ドライグさん大丈夫ですか？」

と、アーシアはイツセーの左手に癒やしの光を与えてみる。

『嗚呼、お前は暖かいなあ、アルトリア…………俺はマーリンに悪い夢でも見せられたのかもしれない』

「私はアーシアですよ？」

『……………赤いの』

「おい赤虫、お前なんとか矯正してやれよ。赤龍帝が可愛そうだろ？同じ赤繋がりでなんかできねーの？」

「……………相変わらず、私をそう呼ぶのね」

「立場も実力差も弁えねえからなあ。それにお前は面白みがない。なにか面白い事して見せたらグレモリーって呼んでやるよ」

「無理じゃないですか？この珍妙な生き物以上に面白いことなんて無いですよ」

「それもそうだな…………」

「最近侵入してくる雑魚が多いなあ。お、ヴリトラ系神器」

虫に集られた骨の中から神器を取り出すミカド。ここ最近、カオス・ブリゲード禍の団と思われる神器所有者がこの街に訪れている。正確には各勢力の拠点に、だが。

「学ばねえ奴等だ。俺は土地神権限を得てんだぞ？この地の全てが俺の目で、領域。其処から魔獣を生み出すかなんて簡単に出来るつてのになあ……おい、聞いてんのか？」

と、暗がりには話しかけると光弾が打ち出される。それを片手で弾き、棘蜥蜴のように鋭い鱗を持った蛇を数匹伸ばすミカド。バキン！という音とズチュリと肉を貫く音が聞こえた。

「か、ふ……」

「鎧かあ。バランスブレイク禁手……ではねえなあ。ま、その程度じゃ虫の牙しか防げえねえよ」

「裏、切り者……めえ……」

「いやお前等の仲間だった事なんてねえよ」

「人類への、裏切りだ！」

「スケールがでっけえ……ん。でもよお、だとしたら各神話を襲う理由はなんだよ。それに、天使や悪魔ならともかく堕天使まで襲うってなあ」

三大勢力で何処が評価高い？と各神話に尋ねれば、満場一致でアザゼル率いる堕天使と返ってくるだろう。神話の中には所詮カラスだろうと言う奴もいるがその手のは自分達も他所から人の世界にやってくるおいて支配者気取ってる同族だと自覚のない三下だ。

堕天使……というかアザゼルは、天使よりも人に寄り添ってるつもりの悪魔よりもよっぽど人を思ってる。三大勢力の中でマシな方、ではなく三大勢力の中で唯一まともだ。何せ危険かそうじゃないかでしか生死の判断はしない。回復系だ、神の祝福だと言ったときながら悪魔まで癒せるとかやべえ！と神器が信仰を集められるかどうかで判断する天使よりマシ。珍しい！と無理やり奴隷にする、逃げられたら犯罪者に仕立て上げる悪魔より遥かにマシ。

そもそも初期墮天メンバーの墮天理由は人間に知恵を、文明を与えたからだ。その結果確かに様々な争いが起きたが聖書の神以外の神々も人々に知識を与え文明を与えていた。もしアザゼルがいなかったら信者同士の殺し合いで地上から聖書は姿を消していただろう。

墮天使は天使でありながら人間を対等の存在として愛した者が殆だ。もちろんレイnantらのように見下すのもいるが幹部連中にそれは殆どない。だが、それでも危険な神器持ちは監視、もしくは排除しなくてはならないと考えるまでには、少し調べればわかるほど過去の人間はやらかしすぎた。

「今のお前等みてえにな。英雄になる？ようするに凄い事をしたなって言いたいわけだ。

で？もし実行できたらどうすんだ？これで人は救われたって静かに消えるか？

いいや、人間達よ俺達を見ろっていうんだろ？んで、世界を救ってやったんだ従えってなる。

神器持ち全員が全員そうじゃねえ、だからこそ保護だつてする。ま、お前等は人間の時代に神話は不要とか言いながら、超常の力で後々人の害にしかならねえだろうしなあ」

「おま、えは……それでも人間だろう!？」

「ああ、墮天使の言い分なんて知ったこっちゃねえ。過去やらかした人間の尻拭いを、俺はする気はねえよ？俺はな……まあ攫って洗脳やったりもしてるお前等に比べりゃ墮天使の方が億倍はマシだわなあ」

ポン、と頭に手を起きコキヤンと首が捻子折られる。

「確かギリシヤのゼウスやポセイドン辺りは嫁娶らせて引き入れたがつてるらしいなあ。俺も彼奴の知識と研究成果、所持してる封印系神器欲しいなあ」

「そういや神器抜き出す術式最初に作ったの墮天使だったか。イザナミの因子を取り込んだことによりこの世に彷徨う亡者や幽霊など魂に干渉できる力を得たから、それを術式化して渡せば報酬になにか

貰えるかもしれない。何せアザゼルが唯一理解できない部分、魂に関する知識さえあれば生きてたまま神器を抜き取ることだって可能になる可能性もある。

「そうと決まれば早速やってみつか。修学旅行の後に」

少なくとも、現状神器を無理やり奪うことは禁じられている………とかは全然関係なくミカドの優先順位は己の悦楽なだけだ。

「まあ、もはや祈られる事の少ない私達としては人間の運命に干渉する気は、あまりないですけどねえ。あなたは仮にも同族でしょう？」

と、呆れたような声が響く。振り返ると緑の髪のくせ毛の巫女装束の少女が立っていた。

「ようタケ………じゃなかった。確か………」

「いつもニコニコあなたのそばに這いよる謎の後輩キャラ、ふつのみか布津野弥火ですよ。お久し振りですミカド先輩☆」

「中学以来か」

彼女の名は布津野弥火。人間の生活に憧れて人の社会に紛れた日本神話の神の石柱。中学時代の後輩だ。

「最近何処もかしこも騒がしいですらかなえ。私は先輩の手伝いをするように派遣されました☆」

「そりや良いな。お前はなかなか使える」

「そうでしょうとも。私、出来る後輩なので！」

「じゃあちよつと菓子買ってこいよ」

「パシリ!？」

「猫娘は5分以内に数量限定品買ってくる出来る後輩だったけどなあ」

「妖怪に負けるものですか!行ってきます!」

「あ、そういえば今度北欧のオーティン様が来日されるんですよ。どうやらこの街に泊まる気のように☆」

「へー………」

「まあ、護衛は日本に住んでる三大勢力がやるそうですけどね。和平

を結んで欲しいのは三大勢力ですから☆」

「北歐、ねえ。彼処の神話にや接触したことはねーが、確か主神は勢力地拡大にも縮小にも興味はねえが、我等の地で聖書開きやがって、とか言ってる三下がいるんだっけ？」

「大体どの神話にも居ますよ。余所者は、お前等だって同じだろうにって話ですよね☆」

北欧の主神

「あく。後でアマテラス様に殺されるかも☆」

「大丈夫だろ。毎回結局殺されてねえんだし」

「仕事量で忙殺されましたけどね☆」

とは言いながらも絡めた腕は離さない弥火。二人がいる場所はホテルだのキャバクラだのが存在する歓楽街。本来の意味よりも夜の意味のほうが人に知られる場所。

まあ、つまり、二人がこれからすることはそう言うことだ。

「えへへへ、久しぶりだからたつくさん可愛がってくださいね☆」

「ああ」

ちなみに弥火はどちらかというドSの方だが、帝には攻められる方が好きだ。というか帝はいじめられると普通に反逆する。

それはそれで、とスカートをつまみモジモジしていると、この国のものではない強い神格と、自分の力にも似た雷の力を感じた。

「お？」

「あ？」

「む……」

見てみるとオーデインと銀髪のヴァルキリーと墮天使のおっさんが居た。

「ふむ、雷神か……」

「ついでに剣の神でもある。後武神」

「はじめまして、オーデイン様」

先程までの軽い態度を収め、他神話の王に対してふさわしい態度を取る弥火。まあオーデインはセラフォルの態度を面白がったりと、そういうところは寛容なのだが。

「しかしお主、神を抱くのか」

「今更だな。俺は日本神話の母神と主神を親子丼で喰っちゃおう男だ」

ついでに魔王と貴族悪魔の姉妹丼……は、まだだった。両方食ってるが同時に喰ったことはない。今度誘おう。

「ヴァルキリーはどうじゃ？ 仮にも神じゃぞ？」

「え、別に女には困ってねえからなあ……………」

最高神も祖神も魔王も、良くわからんけど全員抱いた帝は、差し出されるんならもうけど明らかに引き入れのための女は別に……………」

「なあに、これを期に引き入れ、など考えておらんわい。まあ有事の際はチイツとばかり手を貸してもらおうかもしれんがのう」

「同盟っての一方的な関係じゃねえだろ。言っちゃなんだが、俺はシヴァ以外に俺の神殺し達が負けるとは思ってねえよ?」

つまり、力を貸すのは良いがその対価は力を貸される、では釣り合わないという帝にオーデインはほう、と髭を撫でる。

「では未契約のヴァルキリーに相手させようかのう? 勇者を饗す存在じゃぞ?」

「……………そつちのに出来るのか?」

「此奴はヴァルキリーの中でも奥手じゃからなあ」
「うるさいですよ!」

オーデインの言葉にヴァルキリーが叫ぶ。

「どうせ私は彼氏が居ない歴イコール年齢のヴァルキリーですよ!

同期の皆が次々勇者を見つけてる中で、『ロスヴァイセ、別に慌てなくていいのよ?』って励ましを上から目線に感じてしまう卑屈な女ですよ!
! うわーん!」

「何だこいつ、おもしろー」

わんわん泣き出したヴァルキリーを見てケラケラと笑い出す帝。
帝が楽しそうでミカもニッコリ。

「ところで何でこの街に? まあ、日本神話から許可もらってんなら土地神代行の俺は好きにしろとしか言えねえが」

「ほれ、この街は三大勢力の均衡が保たれているだろ?」

「まあ確かに……………俺の土地だから、俺がどれか追い出せばバランス崩れて面白いことになるかね?」

「その場合霊的側面……………神器とか異能者関係の仕事は彼等任せにできませんよ?」

土地神代行として、霊的側面を司る事を許可されているのなら当然管理する義務も発生する。面倒くさいからやっぱり良いや、と弥火の

言葉で思いついた遊びをやめる帝。

「己の快・不快のみが生きる指針か。全く、聖書の坊主も厄介な小僧に力を与えたものだ」

「ノンノン。与えられた力に頼りつきりじゃ限界がある。だから奪ったのさ、その力を」

帝の中に、神器は存在しない。その存在そのものを、中に宿っていた者達の性質を、全て取り込み己のものとした。

「なのにシヴァには怯えるのか」

「いや実際あの三人合わせてもシヴァには勝てねえだろ。それに、一応シヴァより強いっぽいのを生み出した魔獣で捌り殺しにしたことはある……………」

ミルたんの手も借りているが、それでも倒すには倒した。

「だがトラウマが残る限りシヴァに勝てるイメージを思い浮かべられず、創造系である以上被造物が俺の想像を超えられないわけ……………」

顔を青くしてカタカタ震える帝。普段はそんな姿を見せない帝の一面に弥火はキュンと来た。

「そういうえば、オーディン様はどちらにお泊りになるのですか？ 場所次第では我々も歓待しますが……………」

「うむ、赤龍帝の家に厄介になろうと思っておる。あの小僧はなかなか面白いからな」

オーディンはイツセーがおっぱいとしか喋れなくなったままレーディングゲームに出たのを見てゲラゲラと腹を抱えて笑い、気に入ららしい。

「あれなー、俺が鍛えてたらあんなだったんだ。そうそう、この前女の胸揉ませてみたらバランス・ブレイカー禁手に至ったんだぜ」

「ほほう？ 女の胸で？ くく、なかなか愉快なやつよの。それもまた、聖書の坊主が居なくなった故の未知なのか……………」

そういえばオーディンは知識を求めて片目を差し出して暫く槍を刺して死に続ける異常者だった。と、少し神話を思い出した帝は何処からともなく本を取り出す。

「最新式ゾロアスターの魔術書だ。いる？」

「ゾロアスターとも交流があつたのか？」

「いや、俺アジ・ダハーカの魂の残滓食つてるから」

千の魔法を操る邪竜の魂。それを喰らい、力と知識を奪い尽くした帝は基礎こそ既存のものなれど新しく魔法を生み出せる。

「後これは、ミルたんとは異世界旅行した際に手に入れた魔法と科学の融合……………確か、デバイスとかのプログラミング書」

「異世界……………異世界!?!」

詳しく聞かせると、口より先に目が言ってきたので逃げた。

その後弥火とたつぷり楽しみ、なんか神器の気配を感じたが住まわせてやってる対価として三大勢力に対応させ、再開。朝まで楽しんだ。

「ところでヴァーリ、お前はルシファアの血筋だったな？」

「そうだな……………」

駒王学園の屋上で、飯を食いながら会話するヴァーリと帝。

帝はふむ、とヴァーリを見る。ルシファア……………リリスの夫であり、リリスが直接生んだ子にもその名が与えられ、ヴァーリはルシファアのひ孫という事になる。

そしてリリスは、帝の妻の一人。

「よし、曾祖父ちゃんがお小遣いをやろう。これで好きなものを買うと良い」

と、ヴァーリに一億円入ったケースを渡す帝。

「……………そうすると、厄介なやつが君の息子になるぞ？」

「息子が増えるのか……………お小遣いは五千万で良いかな？」

どうやら帝は息子より孫やひ孫に甘くなつていくらしい。

コスプレ巫女

神が人を導く事もある。まぐわうことも珍しいが、ギリシャの英雄とかは半神も多い。インドにも結構居る。

悪しき者は良く人に関わる。というか人を襲う。

そして、人を惑わし利用し、対価を得るのが悪魔。

「つまり堕天使だけだ。種族として人間と歩む事を選んだ種族は」

しかし人間というのは、個々人としてならまあ楽しいのが居るが種族としてみれば他種族に負けず劣らずなんとまあ、と思える種族。

「つまり、何をおっしゃりたいんですか？」

「堕天使なんかと結婚したからお前の母が死んだんじゃない、人間なんかと結婚したからバラキエルのおっさんは妻を失う苦しみを知ってしまったと考えてみては？」

オーデインに誘われ歓楽街を回っていると、護衛らしいグレモリー眷属の内、女王がバラキエルを睨んでいたので事情を聞いた帝があっけらかんと言いつつ。

「そもそもだ、お前の母親が家を裏切つて、家を捨てて、安全を手放したのは何故だ？ 決まっている、バラキエルのおっさんを愛していたからだ」

家の歴史も、これまで世話になった家族も、全てを捨てて共にありたいと外でもない朱乃の母が願い、その結果狙われた。

「その時の襲撃者の狙いはあくまで堕天使の血を引く娘で、母親はむしろ連れ戻したかった。なのに殺された。なあぜなあぜ？」

答え、と朱乃を指差す帝。

「ネフィリムをかばったからだ。震えるばかりで役に立たねえガキを見捨てれば、自分の命だけは助かった。まあ、だから家族の中の、誰に責任があるかつつーとお前だな」

わはははは、と笑う帝の肩を、イツセーが掴む。

「おっばい!!」

「……………」

「おっばいおっばい！ おっばい！」

「翻訳機の電源切れてるぞ」

イツセーはハツとして、慌てて翻訳機のスイッチを入れ直し……………

「木端悪魔が気安く触れちゃ駄目だぞ☆」

何か言う前に弥火が雷撃を放つ。

死なない程度に焼かれ倒れるイツセー。

「イツセー君！」

「イツセー！」

グレモリー眷属達が慌ててイツセーに駆け寄るが、回復要員は居ないので何も出来ない。

「ところで墮天使と人間のハーフは巨人になるんじゃないやねえの？」

「それは聖書の神の正当性を示すための嘘だ……………」

「まあそりゃそうか。こうして墮天使のハーフがいるからな」

ネフィリム。墮天使の人間のハーフで、地上のあらゆる生き物を喰らい尽くくそうとした怪物とされている。ノアの箱舟伝説にある大雨はネフィリムを溺死させるためとか。

確かに朱乃は胸はでかいが、そこは遺伝。母親もでかかったらしい。

「王神…………殿。朱璃の件は、私の力不足です」

「何いつてんだ？ 力不足はてめえの妻と娘だろ？ てか主犯は人間だし…………そうだコスプレ巫女。俺が仇討つてやろうか？ 姫島家もそれに唆された術者の縁者も全員首切つて持ってきてやるよ」

「倫理観無いの、こいつ？」

「高天原の皆様はゆるキャラと言ってます☆」

主に倫理観が……………。

「よくもイツセーを……………」

「やめろリアス・グレモリー。他派閥のボスに文句を言おうとして、殺されないだけ感謝しろ」

「まあ乳龍帝はおもしろえからなあ」

「お、おっぱ……………」

翻訳機が今の電撃でぶっ壊れたらしく、うめき声もおっぱいになってる。そういえば異世界におっぱいを司る女神がいたな。

「で、どうするコスプレ巫女。特別にただで皆殺しにしてやるぞ？
あ、そういや今の当主は素材として使えそうなんだよなあ」

「ああ、迦具土の加護を持つてる娘ですか☆うくん。まあ、別にいつか
！」

帝を敵に回すぐらいなら、今時珍しい日本神話の神から加護を受け
た一族が減びる程度、余裕で黙認できる。迦具土もかつて自分が焼き
殺した母の後夫である帝に強く出れないし。というか逆らったら殺
されるし。

「ま、待ってください！ どうして、姫島家を滅ぼすことになるんです
か!？」

「え、だってお前の母親を殺した敵を唆した黒幕だろ？」

「私が憎いのは、墮天使とその男です！」

「え、何で？」

「墮天使が、悪だから私の母様は！」

「悪魔になってそれいう？ 墮天使の方がよっぽどマシだろ。てかそ
れ言ったの悪魔？ おいおい、洗脳教育かよ」

「してないわよ」

「母様が殺される時、知ったのです！」

「え、それって自分の母親殺した相手の言葉を素直に信じたってこと
？」

マジかよこのガキ、と言いたげな目で朱乃を見る帝。

「母親は家を捨てるほど墮天使を愛していたというのに、娘は今や悪
魔か……………」

面白いなくこいつ、と動物園で初めてみたイノブタに向ける目と同
じ目を朱乃に向ける帝。バラキエルはその不穏さを感じ取り咄嗟に
朱乃を庇うように立ちはだかり、歴戦の勘から雷を纏いそうになるも
理性で見事に押さえつけた。

「まあ良いさ。気が向いたら何時でも言えよコスプレ巫女。それと
イツセー、俺のひ孫に鍛えられておいてなんて弱さだ。こうなったら
体内に命を貪る代わりに魔力を生み出す寄生虫でも仕込むか？」

「やめてくれ、爺さん」

「仕方ねえなあ」

ヴァーリの言葉に生み出したのっぺりとした大量の虫っぽい魔獣を握り潰す帝。アザゼルはそういやヴァーリは義理だがひ孫に当たるのか、とりリスとの関係を思い出す。

それから数日後。

「え、ロキが神喰狼フエンリルを召喚しておいて撤退した？ 主に役立ったのはヴァーリ？ ふっ、流石俺の曾孫」

「ついでにロキが『人間の作った神殺しの魔獣はいないのか？ いないだろうな、私との差がわかってしまうものな！ はっ、所詮はシヴァから逃げるしか出来ない矮小な人間だ』言ってたぞ」

アザゼルの言葉にふむ、と目を細める帝。

「よし、ぶっ殺そう」

∞：保護者今度、ポシントンを作ってくれるって

狼：そうか。私は息子に珍味を食わせてやる予定だ

コ：そういえば、卵はどうなった？

∞：無事女の子が生まれた。我の嫁にも世話させて、赤ん坊に興味を持たせている

魔獣創造者達

日本神話と北欧神話の会談。

布津野弥火は、その名は仮の名で本来は日本神話においても高位の武神なので会談に参加。

三大勢力からはバラキエル、グレモリー眷属、シトリー眷属。魔王眷属のタンニーン。上級天使数名。なお、悪魔の戦力が若手ばかりなのはオーデインのリクエストだ。

未知を好む彼としては解りきった古の悪魔より新しい世代が見せる新たな可能性が見たいのだろう。

帝はフツカフカで良い匂いがする羊を生み出して寝転がっていた。何故か小猫も混じってる。

「そろそろ時間だが、まさか侵入されてるなんてことはないよな？」

「それは……ロキ様は確かに様々な姿に変わりますが、高い矜持プライドを持っていてる方です。戦いを避けるようなことは、ないかと」

「ふーん」

「というかまだこねえの、と暇そうに侍らせた黒歌を撫でる帝。他の面々は連れてきていない。理由は、わからない。」

「いや、時間通りだ」

よつてきた小猫も撫でていると、ヴァーリが呟くと同時に空間が穴が開く。現れたのは黒いローブ姿の目付きの悪い神と、巨大な狼。

「それがフェンリルか？」

「おや？ 君は？ ああ、君が王神帝か！ はは、大層な名を持つ割には、存外大した事なさそうだな？」

「……………」

「私のフェンリルと同じく、神をも殺す魔獣を、私と違いどこでも生み出せるのだろうか？ だというのに、神から逃げ回るなど……………」

「お前の犬っころがシヴァに勝てるか？」

「ああ、フェンリルの牙は他神話の神仏にも通じると自負しているよ」

その言葉に帝はフェンリルを見て、鼻で笑う。

「無理だろ。その程度のわんころがシヴァを殺せるんなら、俺は彼奴

を恐れたりしねえ。はあ、ただの妄想親父の戯言だったか………だが、舐められるのは好きじゃない。俺を侮って良いのは、この世界だろうと並行世界だろうとミルたんシヴァだけだ」

そう言つて立ち上がる帝。

「俺の使い方は、本来異端だ。過去の存在を核にするのや伝承を核とするのもそうだが……創造系^{セイクリッド・ギア}神器は、そもそも一芸特化させるべきじゃねえ」

「ふむ、突然なんだ？」

「俺はお前の犬つころより強い神殺しをポンポン産めるが、舐められたから舐めプで戦うって話だ」

その言葉同時に、帝の周囲に無数に生み出される鋭角な角を持った虫の群。

それは凄まじい速度でロキとフェンリルに迫った。

「ぬ!？」

「グルウ!？」

突然の攻撃に咄嗟に障壁を張るロキと爪を振るい虫の群を切り裂くも何匹かが体に突き刺さるフェンリル。

とはいえ、僅かに先端が薄皮一枚程度刺さっただけ。ロキの方も障壁をキリキリと虫の角が引つ掻くが破られる様子はない。

「は、はは………この程度………!」

「相手は仮にも神殺しを持つ人間だぞ? 危機感が足りねえなあ」

と、次の瞬間虫が輝き黒い球体を発生させる。それはフェンリルの肉やロキの障壁を空間ごと………世界ごと抉り取る。

「そら次だ」

巨大な蛇が己の身を燃やしながら、結界がなくなったロキと全身から血を流すフェンリルに突撃する。防御も回避も間に合わず、絡みつく炎に焼かれるロキとフェンリル。

炎が離れない。燃え尽きた蛇の灰が蠢き無数の蛇となる。実体のない灰と炎の蛇を、フェンリルの牙では噛み千切れない。

「なめるなあ!」

「グオオ!」

ロキが氷の魔法、フエンリルが炎を吐き出し拘束から抜け出し、次の瞬間周囲を囲む黒色のトラの群が吠えると同時に紫の呪雷が襲いかかる。

「がっ……………」

「グウウ……………」

白目をむきかけたロキは、しかし直ぐに覚醒し無数の魔法を放つ。一つ一つが尋常では無い威力の砲火。まさしく神業に対し、帝は銀色の蛇を生み出す。

「シャアアアアア!!」

鱗が砕け、血肉が舞い骨が碎ける蛇が悲鳴を上げ、息絶える。銀色の鱗はキラキラと舞いながら鏡のような表面でロキとフエンリルの姿を映す。

「!？」

咄嗟に巨大な蛇の群を呼び出すロキ。

鏡に映る蛇達が、突然苦しみだし死んだ。突如現れた傷はまるで無数の魔術でも喰らったかのよう。

「創造系の神器の、正しい運用法ってなんだと思う？ 至高の一を創り出す？ 一つ一つの性能を極限まで上げる？ 良いや、違うさ」

カチカチ縦に裂けた口から覗く歯を鳴らし目の無い怪物が笑い。

ギチギチと歯茎をむき出しに拘束されたかのような口をした蜥蜴が歯軋りをする。

口が4つに裂けた異形がデロリと舌を出し紫色の唾液を垂らす。

炎を纏った骸骨が、雷を纏いし金色の獅子が、風を纏う巨大な1つ目を持った剣が、周囲の重力を歪めながら笑う巨大な四つ目の生首が、空間を食いちぎる痩せ細った鬼が……………数多の怪物が現れる。

本気でもない、使い捨ての魔獣達。既に帝と融合して消えた

魔獣 アナイアレイション・メーカー 創造の域を超えない程度の出力で作りに出された怪物の群。

「雷、炎、氷、水、土、風、重力、呪い、光、雷光、空間、魔術、筋力……………無限の手段を以て」

スツとロキを指差す帝。その目は、新しいおもちゃを前にした子供のように。それも、人形の手足を取りどう付け替えるかとか、虫眼鏡で

焼いていこうとか、靴で何度も踏みつけようとか………いわゆる壊して遊ぶ子供の目。

「君達を甦る」

「飽きた。帰る」

グチャグチャになったフェンリルの死体の下に移動した帝は唐突にそんな事を言いだした。残されたのはフェンリルの子供らしいスペック落ちの二匹とボロボロのロキとミドガルズオルムとかいう竜王の複製体。

「今夜はみんなで蒲焼きパーティ、それとポシントンをオーフィスに食わせる約束してるからなあ。彼奴とのガキにも栄養やりてえし。じゃあな！面白いことがあつたら後で報告よろしく！」

そう言うと、本当に帰った。

ちなみにイツセーがその後、乳の神様の使いである乳の精霊と交信して朱乃とバラキエルの仲を回復させたりオーデインから渡されていたミヨルニルレプリカを乳神の神格で操ったりしたが、帝は既知の神なのでふーん、程度だった。

ロキは北欧に送還された。オーデインも帰った。

オーデインに忘れられたヴァルキリーのロスヴァイセは北欧の魔法を教えることを条件にヴァーリと同棲しながら駒王学園の教師をやることになったらしい。

そうだ、京都に行こう

フェンリルの死体と量産型ミドガルズオルムの死体から作ったポシントンと蒲焼きを皆で食う。骨はジェボーダン以下狼系、蛇系の魔人達の強化素材として使った。

残ったフェンリルの心臓は子犬に変えて知り合いの魔女に渡した。

「将来的には墮天使領に北欧魔術を教える学び舎を造り、墮天使からもヴァルキリーを輩出してみせます！」

「そうか……………」

予期せずヴァーリに北欧魔術を教えることになったロスヴァイセと面談した保護者のアザゼル。思ったより盛大な将来設計を立てていた。まあ、別に北欧魔術を覚えた全ての墮天使がヴァルキリーを目指すわけでもないだろうし、墮天使としても得はある。

「時にロスヴァイセ、ヴァーリはどう思う？」

「はい？ えっと、優秀な生徒ですね。私が苦労して覚えた魔術も……………」

自分を遥かに凌ぐ才覚。優秀な生徒は嬉しくもあり、悔しくもある。ロスヴァイセは複雑な顔をした。

「いや、男としてだ」

「……………?!」

キョトンと首を傾げたロスヴァイセは、しかし言葉の意味を理解してボツと顔を赤くする。

「な、い、いきなり何を!? ヴァーリ君は、まだ学生ですよ!」

「いや、あいついい年してその手の話を聞かなくてなあ…………ラヴィニアは弟としてみてそうだしな……………」

対となる赤龍帝のイツセーが性欲の塊であるが、対してヴァーリは闘争を好むドラゴンの性質が強く出ており、恋愛に興味がない。

育ての親でありエロオヤジであるアザゼルとしては、もう少し女に興味を持って欲しい。

「どうだ？ 俺の自慢の息子だぞ」

「で、ですから私はヴァーリ君をそういう目ではみてません！」

「それは残念です。美しい銀髪の子供が生まれそうなのに」

と、何時の間にか現れたグレイフィア。顔に傷があるから魔獣勢力の改造を受けたほうだ。

「……………何しに来たんだよ」

「命お嬢様からお届け物です」

そう言っつてグレイフィアが取り出したのは錠剤の入った小瓶。

「昨今はテロでどの勢力にも力が必要でしょうから、強化剤です」

「強化剤？」

「コカビエル達から作ったそうです」

「……………」

コカビエルは今も結界の中で自分自身と永遠の殺し合いを続けており、その死体は命が有効活用している。今日もコカビエル達は虚ろな目でゲラゲラと笑いながら楽しく殺し合っている。

「悪魔や墮天使の方は？」

「墮天使と天使は殆ど同じですし、悪魔はセラフオール様から流された旧魔王派と繋がる反乱分子や、旧魔王派そのものから」

旧魔王派も、残る魔王は一人。正確にはもう一つ血筋があるのだが、性格的に間違いなく旧魔王派には属していないだろう。

だから焦ったのか、血を尊ぶ連中や自分の部下を使い動いたがこれ幸いと捕えられ命の実験材料粹だ。

「まあそもそもリリス様がいるからあまり必要ないんですけどね」

悪魔の祖であるリリス。彼女がいる限り、悪魔の強化など容易い。というかりリスの因子を持つ帝とまぐわえば、悪魔はより原初の悪魔達に近づき、或いは超える。

純血悪魔のソーナやセラフオールは勿論、転生悪魔である椿姫達にも効果がある。

「まあ、人間如きに身を許すなど、なんて身の程知らずが多いですが」
「……………ちなみにお前はどうかなんだ？」

本当はグレイフィアの弟……………つまり元男である魔人グレイフィ

アに尋ねるアザゼル。頭が可笑しいこいつは自分が昔からグレイ
ファイア……つまり女だったと思っっているわけだが……。

「私は傲慢^ルに仕える悪魔^キ、あの方が望まれるなら、体など差し出しま
す」

「……………あゝ」

なるほど、姉と結婚するのは自分が認めたものでなければならぬ
とか、そういうタイプだったし、それがいないなら自分が、とか本気
で思ってたろうが。それはそれとして傲慢なる王に仕える本能は健
在か……………。

「修学旅行、京都か……………俺の護衛はどうするか」

ちなみに命と舞は一年生なので留守番。辰は教師だが、担当学年は
一年。

「私が行ってあげましょうか?」

「なら、はやくかわって。むこうであいてしてもらえば、いい……………」

姐己がしなだれかかりながら目を細めると、ティアマトが姐己を引
き剥がす。

「そういうことでしたら、私達もたっぷり相手してもらいましょうか
?」

「ふむ、それも良い」

と、イザナミとリリースが現れる。何方も飢えた獣のような目をして
いる。

姐己は何時の間にか逃げ、ティアマトは帝を逃げられぬよう捕えて
いる。帝は使い捨てではない魔獣の誰よりも弱い。

ましてや3人の妻達は元々強大な存在をさらに強化させた特別製、
捕まった時点で逃げられないが、それはそれとしてこの迷いのなさ
……………打ち合わせしてたな。

「ふう、久し振りに疲れた」

朝になり、水分補給する帝。途中から娘達やオーフィスもまじり、

さすがの帝も疲れた。

部屋から出るとオーフィスと帝の子供をあやしているグレードレッドが居た。オーフィス曰く、子供に興味を持たせる作戦らしいが。

「ああそうだグレードレッド、土産は何かいるか？」

「京都限定粉ミルク？」

「ねえよ多分……後、ヨルムはもう離乳食喰えるぞ」

唇をめくると立派な牙が生えていた。オーフィスと帝の子だけあり、まだまだ赤子だがその強さは各勢力の長を超える。

「何時かシヴァのクソ野郎をぶっ殺してくれ」

「この子なら出来るだろうが、我自分のトラウマを実の子供に対処させるのどうかと思う」

「おいおい、俺は魔^{アナイアレイション・メーカー}獣 創造を取り込んだ魔獣使いだぜ？ 自分より強い奴に任せるに決まってんだろ。因みに最近生きた武器を生み出してみたんだが、これどう思う？」

「凄く、日本刀……」

「銘を流刃若火。炎熱系最強の魔獣だ」

「魔獣………魔獣？」

どうみても日本刀。え、生きてるのこれ？ 確かに魂は感じるけど。

「う〜……」

「お、なんだヨルム？ 欲しいのか？」

因みにヨルムとはオーフィスと帝の子供の名前だ。目をキラキラさせて流刃若火に興味を示している。

「これ作るのに苦労したからなあ。格は落ちるけど飛梅は………あ、いらぬい？ じゃあ氷輪丸で……」

「お〜！」

因みに普段は力を封印して、ただの頑丈な日本刀にしているので、仮にも無限の血を引くヨルムなら刃の部分に触っても切れやしない。

「子供に刃物……」

「別にこの程度危なくねえだろ」

「我が子供には自己判断ができるようになるまで渡すなよ？」

グレートレッドはジトリと帝を睨む。と……………

「グレートレッド、こどもほしい？」

オーフェイスがグレートレッドに抱き着く。

「おい、離れんか!？」

「ねおきで、たいおんがほしい。ドラゴンなので」

「我もドラゴンだ!」

「こどもほしいなら、われのこ、うむ？」

「巫山戯るな! 子を孕むならその魔獣使いの方がマシだ!」

「……………なんて？」

「おっと……………」

「何してんだ、親父」

「オーフェイスめ、帰ったらドラゴン殺しのゴキブリ風呂の刑にしてやる」

オーフェイスにふっ飛ばされ壁に突き刺さった帝を抜く辰。リビングを見ればグレートレッドに抱き着こうとして頬を踏まれ拒絶されるオーフェイス。

まあ本人は嬉しそうだしほつとくか。

「さて、行くぞゼノヴィア、イリナ、フリード、アジア」

「ああ」

「うん」

「はっ」

「はい! 楽しみですね、フリードさん!」

そうして駒王学園2年生の4人は新幹線に乗るべく駅に向かう。

因みにイツセーはまだ覇龍にはなっていないけどヴァーリの教えにより精神世界で歴代赤龍帝の怨念と対話を始めてる。ただし精神世

界に翻訳機は持っていないので「おっぱい」としか喋れない。

最近精神世界でのみ「ずむずむいやーん」と喋れるようになった。因みにドライグは唸るばかりで意思疎通が不可能になっている。

なお、覇龍がないけどスイツチ姫と呼ばれるようになったのはイツセーの禁手は帝の命でカーマが乳を突かせたが、おっぱいドラゴンのヒロインはリアスだから。

感想待ってます

来たぜ京都

新幹線に乗っていると何か飛んできた。イツセーの力の気配を感じる。

「どうやら、人に胸を揉ませその記憶を溜め込みエネルギーに変換するらしい。」

「その反応、こつちがババね！」

と、イリナが固まった帝からトランプを抜き取り……結果的には帝が最初に上がった。

ビリはイリナだ。

「ふむ、罰ゲームを受けるのはイリナか……」

「うう、主よ。何故私を見捨てたのですか……あ、いなかった」

自分で言って落ち込むイリナ。帝はイリナを膝に座らせると胸を揉み出した。

「ひゃん!？」

「駄目ですフリードさん！」

「むむ!？」

リアス達には劣りこそすれ、同世代の中でも大きめ胸が帝の指で形を変える。ゼノヴィアは羨ましそうに見つめ、アーシアはフリードの視線を遮ろうと顔を抱き寄せ小ぶりながら確かに膨らみのある胸に押し付けた。

「むう、帝。胸を揉みたいなら私のが……」

「ん？ まあ別にそんなに揉みたいってわけでもねえよ。何時でも揉めるし」

「~~~~!!」

唇をきゅつと結び声を漏れないよう我慢するイリナ。それでも僅かに漏れる嬌声に、男子生徒は前かがみ。

耳まで真っ赤にしたイリナは切なそうに内股を擦る。

「こんなもんか……」

「ふへ……?？」

トロンと蕩けたイリナの額を指で叩き、ゼノヴィアに渡す。イリナ

は熱に浮かされたままゼノヴィアの胸を見る。

「イリナ？」

「ゼノヴィア……おっぱい、揉ませて」

「!? 待て、イリナ！ 気持ちは嬉しいが、私にそっちの趣味はな……あー!!」

「ごめんゼノヴィア！ あの時の私、なんか変だった!!」

「あ、ああ……いや、気にしないでくれ。悪くはなかった」

ゼノヴィアとイリナが微妙な空気を醸し出している。イリナがゼノヴィアの胸を揉みまくったからだ。因みにアジアはフリードがその光景を見ないようずっと胸に抱き寄せていたので目を塞ぐことが出来ず……瞬れば良いのにガン見していた。

「フリードさんは、その……大きい方が良いですか？」

「いや、私はこぶりな方が……」

お互い顔を赤くして目をそらすフリードとアジアに男子からの嫉妬の視線が集まる。

「……何故？」

命に改造させる際、寿命の増加と聖剣への適応と因子の強化と従順化を行って、その際恋愛感情の部分も裏切りの要因になるからと潰させたはずだが……愛の力？ 興味深いけど帝は別に研究者ではないので、二人揃って命に解剖させようかなと考えるも直ぐに娘との時間が減るのはやだな、と思い直した。

イリナから飛び出していく珠を見て、周囲の記憶を書き換える魔法を刻んでおく。

因みに止まるホテルは京都セラフォルホテルだ。名前から分かる通り、セラフォルが経営している。

「ホテルに向かう前に、トイレを済ませてください」

別にいいかな、と思っている帝の服の裾を、不意にイリナが掴む。スカート越しに股を抑え、継るような目で帝を見つめていた。

「……………」

「ミツく〜ん!」

ホテルにたどり着き生徒それぞれが渡された番号の部屋に向かい、帝だけ最上階の部屋に向かうと笑顔のセラフオールが居た。

「お風呂にする? 御飯にする? それとも、わ・た・し?」

「京都見学してからな」

と、芸妓衣装のセラフオールの横を通り過ぎ荷物をベッドに放り投げる帝。セラフオールはむう、と頬をふくらませる。

「戻ったらソーナも呼んで、二人同時にかわいがってやるよ」

「やん、楽しみ☆」

首筋を撫でられゾクゾクと目を細めるセラフオール。カチャリと音が聞こえ、ん? と首を見る。

首輪がつけられていた。

「……………?」

「お前も京都観光行こうぜ」

「え、この首輪は?」

「外したいなら外していいぞ。今夜は相手してやらねえが」

「う〜……………ミツ君のDS!」

仕方ないなあ、と首輪を受け入れるセラフオール。まあ一般人に見られないよう幻覚張れば良いか。

ところで帝はどういう組み合わせで行くのだろう。

因みに、イツセーも一人部屋らしい。厳密には二人部屋だが一人で使っている。理由は直ぐに会議を行えるようにだ。

「待たせたなイツセー」

「いやそんな……………つて、セラフオールさ……………ん!」

イツセーと同じ班の松田、元浜、桐生。

帝と同じ班のゼノヴィアとイリナ、フリード、アーシア。

この二班で回るのだが、イツセーはセラフオールの登場に驚く。しかも首輪して、鎖は帝が握ってる。

「だ、誰だその人は、大神お前ナンパしたのか!？」

「いや、知り合い。たまたま出会ったから誘ったんだ」

「よろしくね☆」

因みに駒王学園で姿を見ているはずだが、あの時は魔法少女のコスプレをしていたので気付いてないようだ。

「ぐう、これだからイケメンは……………」

「あの、てか……………公共の場でそういうのはどうかと」

「セラが幻覚張ってるから大丈夫だよ。てかお前が言うなよおっぱいドラゴン」

「!!」

ハツと目を見開くイツセー。

「おっぱいとはエロい事。それを語ることに、なんの恥ずかしさもな
いってことですね!？」

「ん？ うん？……………まあ、うん」

セラフォルーは困惑しながら頷いた。

「ところで、そつちの子は静かだね？」

「……………!」

セラフォルーが報告では自分に似て明るい子と聞いていたイリナがやけに大人しいことに首を傾げる。気の所為でなければ、雌と雄の匂い。

「ああ、罰ゲーム受けたあと俺に要求してきたから追加で罰ゲームを
な……………」

具体的にいうと満足させてやった代わりにパンツを脱がせた。ちなみに帝は持つてない。イリナのポケットに入ってる。

「ふくん？」

セラフォルーが目を細めイリナのスカートの裾を見る。イリナは顔を赤くしてスカートを押さえる。恥ずかしがっているけど、この子素質があるな……………。

京都駅から一駅進んだ稲荷駅に向かう一同。なんでも元浜が伏見

稲荷を見たくて先生に相談し、許可をもらったらしい。

「あ、やっぱりダーリン!」

「あらあら、セラフオル様まで?」

と、駅を降りたところで現れたのは金髪の西洋人の少女と、同じく金髪だがアジア系の顔立ちの美女だった。

片方はルフェイ・ペンドラゴン。もう一人は姐己だ。姐己は京都での護衛の一人だ。帝は強くとも、帝より強いのは幾らでもいる。だから帝は自分が訪れる場所には実は護衛を送っていたりする。

「ダダダダーリン!? どういうことだ大神いいい!」

「ん? まあルフェイがそう言ってるだけだが」

「もう、連れないんですから!」

と、帝の腕に自分の腕を絡ませた。松田と元浜とイツセーが血の涙を流す。

「ちなみにそっちの仕事できそうなお姉さんは!」

「あー、俺の親父が経営してる会社の部下」

「はい。若様がお世話になっております。今日は休日だったので、よろしければともに回りませんか?」

「「よろこんでえええ!!」」

姐己の傾国スマイルに、変態三人組は速攻で落ちた。

「え、お前の兄貴もくんの?」

「はい。英雄派の一人として、ダーリンの命を狙ってます」

「ルフェイちゃんのお兄さん? なんでミツ君を……妹さんの彼氏なんでしょ?」

「あー……俺がルフェイと一緒にユーザーの妻寝取ったからだな」

二匹の狐

伏見稲荷。狐のお土産に女の子達はメロメロ。

姐己はふむ、と造形を眺める。実は姐己は普段は企業のトップ達を誑かして好き勝手しているが、寄生先が潰れぬよう助言もしていたりするのだが、こういう商品もありかと考えている。

「……………」

松田がアールシア達の写真を取ろうとするが、イリナは気付くと直ぐに隠れる。

「ところでセラ、さっきから見てきてる奴等はなんだ？」

「うーん、アポは取ってるはずだけど……………まあ私達は魔のものだからねえ。というかミツ君は日本神話と繋がりが深いのに、あの子達と関係持ったこと無いの？」

魔王セラフオールと共に居るからか、警戒された視線を感じる。ただ、セラフオールは一応会談をするためにアポを取っているはず。

それを知らない者か、知っているが念の為監視するように言われた見張りか……………」

「京都の妖怪ね。姐己の分け御霊の子孫なら抱いた事があるけど」

後酒呑童子の首を回収したり、鵜池から死体を回収したり、まあそういう事ばかりしてた。

「ふくん。まあ、木端妖怪ならばつ殺して向こうの責任にすればいいか☆」

「悪魔かな？ 悪魔だった。」

そのまま千本鳥居に向かおうとする一同。

「……………ねえ、松田君。登らないの？」

「フツ。俺は皆の後ろ姿を取りたいんで……………あわよくばパンチラ！」

と、しゃがむ松田の顔面にイリナの靴裏がめり込んだ。

「ほらほら、イリナちゃんも早く登ろうー！」

「ま、待ってくださいセラフオール様!」

グイグイ背を押すセラフオールにイリナが抗おうとするが、聖剣が

使えるだけのただの人間が魔王の力に敵うはずもなく、慌ててスカートを抑えながら階段を登っていく。

「おいセラ、さっさとこい」
「うぎゅー！」

イリナをからかって遊んでいると鎖を引かれ首輪が閉まる。首輪を見ることのできない一般人は不思議そうにセラフオールを見た。

「……………」
遊んでいたら遊ばれた。というかこの首輪いつまでつけるのだろう？

まさか、ソーナにもみられるのだろうか？ そう考えて、ゾクゾクと震えるセラフオール。

「俺、先に行つてくる！」

と、不意にイツセーが走り出した。山に来たら頂上に行きたいとか思うタイプなのだろう。帝は鎖をルフェイに渡す。

「俺も先に行く」

帝はそういうタイプではないが、一番を狙つて登つていく知り合いを見たら先回りして煽りたくなるタイプだ。

「よし、到着！」

「遅かったな」

「帝さん!？」

古ぼけた社のある頂上らしき場所に出ると既に帝が居た。一番乗りだと思つたイツセーはちよつと落ち込み、落ち込んだイツセーを見て帝は元気になる。

「……………」

イツセーは落ち込んだ後、社に気づきお参りを始めた。おそらく胸を沢山揉めるよう願っているのだろう。

と、隠れていた周囲の気配が近付いてくる。離れたのを見て、動いたのだろうか。しかし、この内の一つは何処か既視感を感じるような…………？

「京のものではないな？」

現れたのは巫女装束の少女2人。片方は幼女だ。金髪少女と銀髪の幼女はピンとたった獣の耳と、フワフワの尻尾が生えていた。イツセーも、その少女達だけではなく複数の気配に囲まれていることに気付いたのか周囲を警戒しながら身構える。

「その小娘は……………」

「余所者め！ よくも……………かかれ！」

「かかれ〜！」

少女と幼女の声に林から山伏の格好をした烏天狗と神主の格好に狐面をした者達が一斉に襲いかかってくる。

「母上を返してもらおうぞー！」

「かえしてもらおうぞー！」

「なんのことだ!? 俺はお前の母ちゃんなんか知らねえぞー！」

「……………いや、まさかな」

狐の姉妹を見て帝が何やら考える中、隙だらけと思ったのか烏天狗の棍が後頭部に迫り――

「ガアアアア!?!」

帝の影から伸びてきた巨大な黒い鳥の足に掴まれる。尋常では無い力に、骨がミシミシ軋みを上げる。

「ガア」

と、一鳴きして現れたのは、巨大なカラス。ただし目が3つで足は4つだ。別の烏天狗が薙刀を振るい首を落とすと、無数のカラスになってバサバサと飛び回る。

落ちた羽の一つ一つがカラスに変わり周囲を黒く染め上げていく。そのまま数の暴力で捕らえようとした時だった……………。

「戦かあああ!?! 我も混ぜろおおお!!」

黒羽の帳を突き破り、二本の角を持った少女が現れる。尋常では無い鬼の気に加え、龍と神の気配を纏うその少女は酒吞童子。

九頭竜の血を引く八俣の大蛇の分け御霊が人に宿り、多くの女の執念という名の穢を吸い、鬼へと至った鬼にして竜神の子。

その首塚を掘り起こし、それを核に魔獣を作った結果、執念深くこの世に留まっていた魂が帝の魔獣の意思を乗っ取り復活した姿だ。

「お、鬼!？」

「なんとという邪気! おのれ、もはや許せぬ! 不浄な魔の者共め! 神聖な場を汚しおつて!!」

「許せねえならどうする!? 我を殺すか、子狐えええ!!」

戦の匂いに鬼の本能大暴れで叫ぶ酒呑童子。

「落ち着け酒呑童子」

と、帝が酒呑童子の背中を蹴りつける。帝より強い酒呑童子だがその身は魔獣である為、後一応復活してくれた恩人であるため止まる酒呑童子。

「酒呑童子だど!? 馬鹿な、疾うの昔に滅びたはずだ!!」

「だが、この邪気は……………」

妖怪達が戸惑う中、カラス達は増えていく。と、銀狐の幼女が尻尾の毛を掴み、フウ! と狐火を吹き付ける。

青い炎に彩られた毛が舞い、その姿を変える。

青い炎で出来た獣の群だ。狐の変化能力の応用だとしても、あまりにも度を越した力に……………」

「まあ俺の方が上だが」

帝は黒い炎で出来た狼を大量に生み出し狐火の獣を喰らいつくさせる。

「お前、名前は?」

「……………九久くきゅう」

「なるほどな。母親の名は、八坂か?」

「知ってるのか帝さん!」

「とぼけるな! 母上を攫った貴様等が、何を今更!」

「なるほど……………なるほどなあ」

金髪の少女が狐火を放つが、黒煙の狼が炎を吸い込む。それだけではなく、大きな力が集まってくる。

「くっ…………撤退じゃ。今の戦力では勝てぬ…………おのれ、邪悪な存在め! 必ず母上を返してもらおうぞ!」

「もらおうぞ!」

少女達の言葉と同時に、一迅の風が舞い妖怪達は姿を消す。

「あらら、遅かった?」

「よく言うぜ、急いでもなくせに」

「まあね。酒?ちゃんの気配も感じてたし」

セラフオールはペロつと舌を出す。酒呑童子はチツと舌打ちした。

「それで、誰に襲われたの?」

「九尾の狐の姉妹」

「……………え」

まさかの相手に固まるセラフオール。しかし、そうなると解らないのは何故襲ってきたかだ。連絡が行ってないのか?

「なんでも母親が攫われたらしい」

「母親……………八坂さんが!? え、大事な会談もあるっていうのに、

何処の誰!? 氷漬けにしてかき氷にしてやるんだから☆」

「さあな……………しかし、面白いことになってきた」

帝は銀狐の幼女を思い出し、フツと笑う。

九尾の姫

「イツセー、行こうぜ！」

「覗きだ覗きだ！」

「……………」

覗きに行こうと言い出す松田と元浜。しかし、イツセーは目を伏せる。

「イツセー？」

「甘いな、元浜。俺は師の教えを受け、真理へと至った」

その結果翻訳機がなければおっぱいとか喋れなくなったけど。

「おっぱいとは、見るものではない。感じるものだ！」

「!?!」

カツと目を見開いて叫ぶイツセーに、松田と元浜は固まり、そして直ぐに涙をポロポロ流す。そのまま土下座した。

「どうか我々を、弟子にしてください!!」

「何か面白いことが起こっている気がする」

部屋の備え付けの風呂に姐己と酒呑童子と入っていた帝は面白いことセンサーに何かが反応したのを感じ取る。見過ごした！

「くく。我等を前に他に面白いことは、我等が主様は連れない方だ」

「解りきってることでしょうか？ なら、無視できない程相手してもらいましようか？」

セラフォルーは妖怪への対処で来れなくなった。

翌日。スケジュールに従い清水寺に向かう駒王学園2年生。バス停から周囲を探索しながら歩く。

「……、三年坂って言って、転ぶと3年以内に死ぬらしいわよ」

と桐生が言うのとアールシアが顔を青くしてフリードの腕に抱き着く。

「はうろう！ 怖いです！」

ゼノヴィアもイリナの腕に抱き着いた。

「……………日本は、恐ろしい術式を坂に仕込むのだな」

「もうゼノヴィアだったら……………」

それを見たルフエイも帝の腕に抱き着く。松田と元浜とイツセーがフリードと帝を睨む。桐生は面白がって帝の反対の腕に抱き着いた。

坂を登りきると、大きな門。仁王門が現れた。

「見ろ、アーシア！ 異教徒の文化の粋を集めた寺だ！」

「は、はい！ 歴史を感じます！」

「異教徒万歳ね！」

元教会トリオの言葉にイツセーがギョツとする。

「銀じゃない!？」

銀閣寺にたどり着いたゼノヴィアは、銀色ではない銀閣寺をみてショックを受けた。

「ゼノヴィアだったら、お家でも『銀閣寺が銀で、金閣寺が金。きつと眩しいんだろうな』って楽しみにして写真も見なかったものね……………」
「げ、元氣出してくださいゼノヴィアさん！ きつと金閣寺は金色ですよ！」

震えるゼノヴィアの肩を優しく叩くイリナとアーシア。ちなみに金閣寺は金色でゼノヴィアは大喜び。

途中で痴漢騒ぎがあったような気もするが、不思議と反応したのは裏に関わるものばかりで一般人はなんの反応もしなかった。

そして茶屋で茶を飲む一同。イツセーは電話で離れ、その間に松田達一般人が次々眠り始めた。

困惑しながらも構えるゼノヴィア達を尻目に、帝は狐耳と尻尾を生やした店員にお茶のおかわりを頼む。

「って、何であんたは落ち着いてんだ!？」

と、戻ってきたイツセーが叫ぶ。どうやら帝が普通に茶を飲んでることに困惑しているようだ。だが、昨日襲撃した妖怪達にすぐに対応しようと籠手を出そうとして……………」

「待ってください」

ロスヴァイセが現れた。

何でも、誤解が解けたらしい。姫君達も謝罪したいからついてきて欲しい、との事だ。帝は狐面を付けた女に近付くと仮面をひったくる。

「え？ ……………え？」

ぽかんと困惑する妖狐を無視して仮面を被る。

「よし、行くぞ」

「え、あ、あの……………か、返して……………」

「後でな」

そして、一同は異界へと訪れる。

金閣寺にひっそりと存在した鳥居をくぐった先には、江戸時代のセツトのような昔の建物が並ぶ街が存在した。

扉や窓の隙間から異形の者達が覗き込み、大通りもカツパや二足歩行の狸、1つ目の大男に車輪に顔だけのヒゲオヤジ。

本で見るそのものの妖怪達が興味深げに帝達を見つめていた。

「……………人間か？」

「いや、悪魔もいるらしい」

「龍だ。龍の気配もあるぞ……………それに、鬼だ」

酒呑童子、妲己は特に気にせず堂々と歩く。イツセイ達は視線にさらされ少し居心地が悪そう。帝はパカツと開き舌を出してケタケタ笑う提灯に『古臭い。5点』。泣いていた子供に『今どき話しかける奴なんて殆ど居ない。12点』。睨みつけてきた1つ目の巨人に『息が臭い。死ね』と書いた紙を貼り付ける。

全然驚かないどころか酷評され、妖怪達はショックを受けていた。そのまま屋敷に案内された。セラフォルとヴァーリがいた。

「来たか」

「やつほー、皆☆」

その間に、昨日の金銀姉妹。昨日の巫女装束ではなく、時代劇のお

姫様が来ているような豪華な着物を着ている。

「九重様、九久様、皆さまをお連れしました」

そう言い残すとドロロンと消える狐の女。仮面を返してもらって無い狐娘はまだ居る。

「私は表と裏の京都に住まう妖怪を束ねる者……八坂の娘九重と申す」

「九久ともーす」

自己紹介すると、頭を下げてくる。

「先日は申し訳なかつた。お主達を事情も知らずに襲ってしまった。許して欲しい」

「ゆるしてほしい」

イツセーは困ったように頬をかく。

「ま、良いんじゃないか。誤解が解けたなら、私は別に良い。折角の京都を堪能できれば問題ないよ。もう二度と邪魔しないならね」

「そうね。許すことは大切だわ。主もおっしゃるはずよ、汝の敵を愛しなさいって」

「平和が何よりですから」

と、元教会信徒3人が許し、フリードとイツセーも許す。一同の視線は帝達に集まる。

「ん？ 俺？ 俺はまあ、もう少し事情を聞いてからだな」

「我は主が許すなら構わん」

「ですね。許さないならその時は……」

酒呑童子はどうでも良さそうに、姐己は面白がるようにそう返した。これが眷属仲間なら兎も角、他派閥のトップで悪魔の超偉い人の後夫である帝には何も言えないイツセーは黙り込む。

「うむ、当然だ……事情を話そう。ついてきてくれ」

「きてくれ」

「ははは、姉の真似か？ 感心感心。どれ、いなり寿司をやろう」

なんか九久に甘いなこの人？ と首を傾げるイツセー。

この京都を取り仕切る妖怪の長、八坂が須弥山の帝釈天から遣わさ

れた使者と会談するために数日前この屋敷を出た。

しかし、八坂は時間になつても会談の場に姿を表さなかつた。不審に思い妖怪達が調査すると八坂に同行していた警護の烏天狗が瀕死で保護された。

烏天狗は死に際、八坂が何者かに攫われたことを告げ、妖怪達はその下手人を探す中、イツセー達を見つけた。

「ま、総大将が攫われたのはそちらの不手際で、私達はその結果襲撃される謂れも、許す道理もないけどね☆」

キヤハツと囓うセラフオールに九重達の隣に控えた大天狗はグツと唸る。セラフオールは気にせず膝枕している帝の頭を撫でた。

「……………魔王殿、どうにか八坂姫を助けることはできんのじやろうか？ 我等に出来る事なら、幾らでも力をお貸し申す」

天狗がそう言って一枚の絵画を取り出す。何処となく九重達に似た美女が描かれており、イツセーは絵の胸元に目を向けた。

もうイツセーの中では、それだけで助ける理由ができた。

「俺はアザゼルの名代として、この地に派遣されている墮天使派閥を動かしている。そちらは？」

「まだなくんにも、だつてする理由ないしね☆」

と、セラフオールの言葉にイツセーが思わず立ち上がる。

「セラフオール様！ そんなこと……………！」

「えい☆」

チョーカーについている翻訳器が凍りつき砕けた。

「おっばい！ おっばいおっばいぱいぱい！」

「あはは。何言ってるか解んない☆」

事情を知らない妖怪達は突然どうしたとイツセーを見る中、セラフオールは目を細める。

「まあ言いたいことは解るよ。手を組むんだし、助けてあげようとか言いたいでしょ？ でもねえ、妖怪如きと手を組むのは、面倒事をなくしたい、程度の理由なんだよ？」

九尾の狐のその実力は、最強が魔王級と呼ばれる五大龍王に迫るとされる。ただ、魔王級……………そう称される悪魔は実はそれなりに居る。

現レーティングゲームの王者など、若い世代にもチラホラと。

その上で最強の女悪魔であるセラフォルーは、下級悪魔に視線を向けた。

「龍王と同等程度がトップ一匹の組織が、無礼を働いた上で力を貸せなんてさ、なめられてると思わない？ だから、こちらが納得出来る対価を差し出すまで手は貸しません☆」

「おっばいー」

と、イツセーは八坂の絵と九重達を指差す。

「あははー。子供の笑顔と、九尾の御大将の胸？ そんな木端悪魔しか喜ばない物のために、この魔王に動けって？ サージェクスちゃんが優しいから勘違いしちゃった？ あのね、赤龍帝ちゃん。君は冥界の人気者だけど、私からしたら何時でも殺して良い下級悪魔なんだよ☆」

放たれるのは殺気ですらない威圧。

イツセーは身をすくませヴァーリは身構え、アーシアは気を失いつリードが支え、イリナやゼノヴィアは固まり、狐の姉妹は思わず後ずさり大天狗がその身を巨大化させる。

「……………あはは。うっそー！ 驚いた？ でもね赤龍帝ちゃん。君の目の前に居るのは魔王様。自分の身分を忘れないようにね☆」

さて、とセラフォルーは妖怪達に振り返る。

「それで、自分達の不甲斐なさで主を攫われ、勘違いで襲ってくる勢力に手を組んでまで総大将を助けてあげるメリットを提示してね。お金でも恭順でも人材でも土地でも、何でも良いよ。無礼をチャラにして、力を貸してもらえと思えるだけ差し出して☆」

それは言外に、払うものが少なければ妖怪達が悪魔をなめていると判断する。そう言われたようなものだ。固まる大天狗に、オロオロと助けを求めるような視線を向ける九重。と、不意に帝が片手を上げた。

「何なら俺が提示してやろうか？」

「ミツ君!？」

帝に逆らえる者は冥界には居ない。厳密には逆らう奴はいるが、表

向きに逆らって良いだけの地位が存在しない。

初代ルシファー亡き今、リリスの夫というのはそれだけ特別なのだ。というかインド神話のシヴァからも「彼が魔王と関係を持っているんだろ？」という理由で同盟を結ばせてもらっている。

あらゆる神話の中でも最強。闘神が数多居るインド神話の中で頂点に坐す破壊神であるシヴァに目をつけられている。そんな帝に手を出そうとする者などインドラぐらいしかおるまい。

「え〜……………」

当然セラフオールも逆らう気はない。ないが、それはつまり帝がどんな要求するかによって妖怪達に悪魔相手にはこの程度の対応でいいと思わせてしまう。

「殺生石と先代達の九尾の遺骨、生きてんなら隠居した奴等を殺してその死体と……………京の気脈を一日使わせろ」

「わお☆」

思ったより大きな要求に、こっちが罪悪感を感じるレベルだった。

「それだけあれば九久も安定する」

「あんてい？」

「!? 九久に何をやる気じゃ!!」

首を傾げる九久と妹を守ろうとする九重。帝は起き上がり、九久を指差す。

「安定させなきゃ死ぬぞ、その半妖」

「!?」

「……………おっぱい？」

恐らく、イツセーは半妖と言っているのだろう。困惑する三大勢力の面々に対して、大天狗は目を見開く。

「は、半妖？ 九久が……………？」

「そうとも。そんで父親の顔は、こんな顔」

と、仮面を取る帝。何時の間にかその背が縮み、10になったばかりの子供になっていた。

「貴様!!」

大天狗が取り出した錫杖の石突が帝を叩き潰す。畳がめくれ上が

り、下の木も砕ける。狐の面も砕け、妖狐があー！ と叫んだ。

セラフオールは表情を消し冷気を纏い……………

「おいおい、ガキの前で父親を殺すなよ」

と、錫杖の輪形に座る帝。

「何が父か!! 八坂姫を孕ませ、そのまま姿を消したくせにどの面を下げて吠えるか!」

「それは誤解だ鞍馬山の大天狗。そもそも襲われたのは俺だぞ?」

妖怪とは人を喰らい、脅かし、畏れさせ、犯す者。それは京を守護する九尾とて例外ではなかった。

稲荷神の化身を騙り死体を貪る野干の王の血筋は、シヴァの一撃を喰らい、神の気配を纏う極上の贄に我慢出来ず弱っていた帝を貪り喰らった。

「俺がお前達の総大将を誑かし孕ませたんじやない。お前達の総大将が俺を拐かし犯して孕んだんだろう。まあ俺も、傷を癒やしてもらった恩もあるから、何もせずに宝とか奪うだけで済ませてやったがな」

正直に言えば、傷の癒えた帝なら妖怪を皆殺しにだって出来た。だけど見逃した。

「だから子供が居るなんて、そもそも知らなかったんだよ。しかしなるほど、長女は辰だと思っていたが」

トン、と降りた帝が九久の前に立つ。

「……………あなたが、わたしのおとうさん?」

「そうなるな」

「……………でも、どうしてごせんぞさまのほねが、ほしいの?」

「ん? だってお前、このままじゃ死ぬからな」

「……………?」

深海で修業を終え仙術と闘気を覚えた帝がシヴァに見つかったのは、神器に封印された力を取り込もうとしていたから。

その為悪魔の始祖、祖神の力を取り込もうとして気配が不安定になった帝は気配を隠せずシヴァに見つかったのだ。まあ、その頃の帝は何からも隠れる必要がないと調子に乗っていたのもあるが。

とにかく、九久はその不安定だった頃の帝の子。故にその存在も非

常に危うい。母体が九尾の狐程度というのもバランスを乱した。

「だから九尾の力と京の力を使って安定させる」

「うくん。それって、結局妖怪側に得が多くない?」

「それもそうか。じゃあ京の妖怪共は俺に従え。殺さないでやるから」

「なめるなよ小僧!」

「正当な評価だ。お前等まさか、本気で俺達に勝てると思っているのか?」

帝の影から青い炎を纏った龍が現れる。酒吞童子と妲己もその身から膨大な妖気を放った。

「俺に娘の家族を殺させるなよ。別に、上に立ったからってこうしろああしろとも言わねえよ。面倒だからな」

「……………八坂姫を救わぬ事には、答えはだせぬ」

「まあ、それもそうか……………仕方ない。娘のためだ、騙されてやろう」

その言葉に九重達は顔を上げる。

「何気に俺の初めての相手でもあるからなあ。良いぜ、お前等の母親を助けてやる」

「ほ、本当か!?!」

「嘘はつかん」

「あ、ありがとう…………おと、おとう…………さん……………」

英雄派

翌日。

墮天使職員や悪魔職員が捜査を開始し、学生であるイツセー達は情報が入るまでは観光することになった。

案内は九重と九久と帝に面を取られ大天狗に破壊された妖狐の娘、弥子。片手間で作った狐の面（材料：高天原の木）をやったら跳ね回り喜んでいた。

「……………おと、ちちうえ」

「なんだ九久？」

「ちちうえ」

「そうだな」

「……………ちちうえ」

ポテポテ近付き、キュツと服の裾を掴んでくる九久。ロリコンの元浜はブフツ、と鼻血を吹き出し貧血で気絶した。

「おいおい大神、マジで父親なのか?! どういうことだよ!」

「俺が10を少し超えた頃襲って来た女が孕んでたらしい。因みに見た目はこれな」

と、八坂の絵を見せる帝。精巧に描かれた八坂の絵の胸を見て、こんなお姉さんが淫乱!? と松田は鼻血を出し過ぎて貧血で気絶した。
「……………」

九重は何とも言えぬ顔で異兄妹とその父を見る。妖怪達は決して話そうとしなかった九久の父。

妹が欲しいとよく母に強請っていたが、ある日、本当に出来た妹の父親。九重が見る物語では子とは夫婦で育てるものだし、狐は子供を独り立ちさせるまでは家族単位で生活する。

だから母にも九久にも会いに来ない父親は死んだか、母と妹を捨てた最低な奴だと思っていたが、むしろ襲われた側でそもそも認知もする必要があるのかという関係だった。

「ところで昨日はおとうさんとか言ってなかったか？」

「ことばづかいは、なおせと」

「まあそうか」

半妖とは言え、仮にも姫だ。それに昨日の態度を見る限り不当な扱いを受けていたわけでもない。

「……………あれやって」

と、肩車された子供を指す九久。基本的に我が子に甘い帝は肩車してやった。

因みに九重にも父は居ない。少し寂しさを感じていると、九久がジツと九重を見る。

「ちちうえ、あねうえまいごにならないよう、てをつないであげて」

「ああ良いぞ」

「な!？」

手を繋がれ思わず叫ぶ九重。ジツと見つめてくる妹を前に、振り払うことも出来ず仕方なく……………そう、仕方なく手を繋いでやることにした。

そして一同は京都を回る。途中九重の好物である湯豆腐を食ったリグレモリー眷属の木場と合流したり帝が酒を飲もうとしたところをロスヴァイセに見つかり、ロスヴァイセが帝に煽られるまま酒を飲み酔っぱらったりと色々あった。

そして一同は渡月橋にやってきた。

渡月橋は渡り切るまでに振り返ると授かった知恵を失ったり、男女が別れるなんて話がある。

それを聞いたアーシアはフリードの腕にしがみつき、ルフエイが帝の……………九重が繋いでる手とは反対の手を握った。

アーシアはそういうことを信じやすいから。ルフエイは、楽しんで居るのだろうか。

九重が面白く無さそうにルフエイを睨むから、ますます楽しんで居る。と、その時だった。

帝が、ルフエイが、酒呑童子、姐己達が顔を上げる。同時に、ぬるりと生暖かい空気が一同を包み込む。周りに変わったところはない。

あくまで街並みにはだが。

人が消えた。居るのは裏の世界に関わる者達ばかり。

イツセー達は戸惑いながら周囲を見回し、足元の霧に気づく。

ディメーション・ロスト
「『絶 無』か」

「でい、でいめ……う？」

ロンギヌス
「神滅具の一つだ」

と、ヴァーリが空からやってきた。近くに居たようだ。というか口スヴァイセの近くに居たのだ。一応墮天使総督の名代、墮天使陣営に所属しているロスヴァイセの様子を見に来たのだろう。

「俺達以外の存在はこのあたりから綺麗さっぱり消えている。いや、俺達がこちらに運ばれたのだろう。ここは実際の渡月橋………京を再現した別空間だ」

「レーティングゲームのフィールドみたいなもんか？」

「ああ、三大勢力の技術は流れている。それを応用したものと見て間違いないだろう。そして、作った空間に霧の力で転移させられた」

ほとんどアクション無しで、それが可能なのだから神滅具というのは恐ろしいものだ。と、九久が怯えるように帝の頭を抱きしめる。

「死んだ母上の護衛が言っておった。気付いたら、霧に飲まれていたと」

つまり、八坂を攫った者と同じ。渡月橋の先から複数の気配が現れる。

「はじめまして、王神帝、そして二天龍」

挨拶してきたのは学生服の男。何故か韓服もきている。手に持った槍にイツセー達悪魔は顔を青ざめさせていた。

「お前が英雄派のリーダーか？」

「曹操を名乗っている。三国志で有名な曹操の子孫さ………一応ね」

「………知ってるかルフェイ？」

「え、はい。知ってますよ！ 三国志の、ええと………肝油です！」

「ゼノヴィア」

「知らん！」

「イリナ」

「え、ええと………三国志だから、えつと。さ、三兄弟の一人！」

「………弥火」

「私は知ってますよ。呉の王です」

「魏だよ！」

と、イツセーが突っ込んだ。と言つても三國無双とかの知識だが。

「全員、あの男の持つ槍には気をつける。あれは最強の神滅具………ロンギヌス

『黄昏の聖槍』だ」
トバル・ロンギヌス

原初の殺人者カインの血族であるトバル・カインが天から墮ちてきた金属で作った特別な槍。神の子の血を浴び特別な力を得て、その後神器として改造された槍。

極め、認められればあらゆる状況に即した神の奇跡を起こす事も可能な無類の強さを誇る神滅具。

「アーシア達は見るな。心が持っていかれるぞ！」

「………」

帝はジツと槍を見る。あれは間違いなく『遺志』が宿っている。取り出して改造して天界を乗っ取れるだろうか？ いや、あくまで残留思念か？

「貴様！ 一つ聞くぞ！」

「きくぞ！」

「これは小さな姫様方。何でしょう？ 私ごときでよろしければいくらでも答えましょう」

「母上を攫ったのはお前達か！」

「左様で」

あつさり認めた。九久も帝の髪を掴む手に力が入る。帝でなければ部分ハゲになっていた。

「母上をどうするつもりじゃ！」

「御母上には、実験にお付き合っていたのですよ」

「実験じゃと？ お前たち、何を考えておる！」

「スポンサーの要望を叶えるため、というのが建前かな」

「スポンサー？」

三大勢力の裏切り者か、或いは何処ぞの神話の連中か……？と神を殺せる槍を見る帝。少なくともオーフィスは彼等に力を貸していない。

「で、わざわざ俺等の前に顔を出したのか？」

「隠れる必要がなくなっただけね。挨拶と共に、手合わせでも願おうと思つて」

「良いぞ。ゼノヴィア、イリナ」

と、帝は影から鐔も柄も、刀身すら純白の刀をゼノヴィアに、木札がついた紐でつながった二本の刀をイリナに渡す。

「新しい魔獣だ」

「え、これ魔獣？」

「日本の付喪神や、ゲームでよくあるインテリジェンスウエポンをモデルにしてる。名前や使い方はつかめば教えてくれる」

「なるほど、袖白雪……」

「双魚理ね！」

手切れ金代わりに渡された聖剣を、彼女達は現在保有していない。天界が同盟の証としてデュランダルの攻撃的オーラを押さえる改造を施すと申し出て、その改造の材料にエクスカリバーを使うらしいからだ。

「しかし英雄ね……神器所有者を拉致し、洗脳を施す者が良く名乗れるものだ」

「ははは。夢見がちだねヴァーリ……ジャンヌ・ダルクは嘗て魔女と蔑まれ、ヘラクレスは人を救うためでなく子を焼き殺した贖罪で試練に挑んだ。シグルドだって、王族の財宝欲しさに兄を殺している」

「……何が言いたい」

ヴァーリに睨まれた曹操は、臆することなく笑いながら答える。

「英雄など劇的な勝利をした人間に与えられる記号に過ぎない。人を救う英雄を夢見るな。何処まで行こうと殺戮者だろう……ま、本気で人類を救いたいと考えている馬鹿は居るが、結局俺達は英雄の血や魂で人より優れた力を持ち、人にはない神器という力を得た人間さ」

肩を竦め、英雄の血も魂も継ぐことなくシヴァに認められた帝を見つめる曹操。

「それに、こうして『力』を得たならそれで何処までできるか試してみたいだろう？ 人を救う為に振るう者を否定はしないが、そう生きろと己の生き方を決められるなら全力で抗おう。ようは、好きに生きてその果てに英雄と呼ばれるような勝者を目指してるのさ」

「……………あいつ、面白いな」

帝は曹操がちよつと好きになった。

曹操

「さて、数はそちらが有利かな」

曹操の言葉に、霧の奥から無数の獣が現れる。自立型や創造系の神器だろう。

アナリアルレイション・メーカー
魔獣創造程万能かつ強力でなくとも、格落ち神器は存在する。
ブーステッド・ギア
『赤龍帝の籠手』なら『龍トウワイス・クリテイカルの手』のようなものだ。

「おお、数で攻めるか。怖いねえ」

帝の影から、全く同じ姿の、感じる威圧感からして格上の獣が現れた。

「こちらは亜種バランクス・ブレイカーの禁手も存在しているのだがね。人の事を言えた立場ではないが、つくづく神滅具ロンギヌスというのは理不尽だ」

「お前も取り込めば良いのに。与えられた力じゃなく、奪った力を使えよ」

「俺はそうすると、聖書の神に成り代わられそうだからね。君みたいに口説き落とせるなら話は変わるのだろうか」

俺には無理さ、と肩を竦める曹操。自分を、というよりは聖書の神を一切信用していないようだ

「それなら心を清く正しく入れ替えることをおすすめるわ！」
「そうなれば、主はお前に応えるだろうさ」

と、イリナとゼノヴィアが言う曹操は少しだけ考えるような素振りを見せ槍を見つめる。そして、フツと笑った。

「嫌だ、断る。こうしてこの世に生まれたのに、何故生き方を他者に委ねねばならない？ ああ、勘違いはしないでくれ。君達を馬鹿にした訳じゃあない。神の教えに従う、そう選んだ君達を俺は尊重しよう」

だが、尊敬はしない。

「好きに生きさせてくれ。その果てに、敗北した俺を悪と罵るが良い。勝利した暁には、祖先同様英雄として人が語り継ぐだろうがね」

「ま、話し合いで済むラインは超えてんだ。それにほら、あれだ。お前等が攫った狐……あれ一応俺の女とも言えるし」

影から新たに飛び出してきた日本刀。それもまた、魂持つ生きた

刀。

「ふむ……………」

遙か離れた距離で振るい、しかし曹操が右に構えた槍とぶつかり合う。

曹操の右側の京都の景色が切断された。

「それは済まなかったね。でも返す気はないんだ……………嗚呼、嗚呼……………ならば答えは一つだろうか？ 俺は言ったぞ、手合わせをしよう」と

「良いね。お前は特別に、ロンギヌスホルダー神滅具所有者として鬪り殺してやる」

龍雲図の龍をそのまま実体化させたかのような龍が、屏風の虎が、鶴が、風神雷神が飛び出し曹操へと襲いかかる。それが開戦の合図となり、英雄派と三大勢力達も飛び出した。

「戦だ戦だ！ 殺し合いだあ！ なあてめえ等！ 酒で酔わすなんて、つまんねえ殺し合いだけはさせんなよお!？」

酒呑童子は別にそれ自体は恨んでいないが、殺し合いが出来なかった事は悔やんでいた。

そんな彼もとい彼女の前に現れた英雄を名乗る者達。

「我を殺し首を掲げてみる！ さすれば貴様等も英雄だあ！」

源頼光。その部下にも劣る弱者達。対して自分は嘗ての時代よりも強化された怪物。勝負にもならないだろう。だが、加減はしない。英雄と呼ばれたいと、勝利が欲しいというのなら、限界ぐらい超えてみせろと鬼は叫ぶ。

「俺達も行くぞ！ 木場！」

「うん、イツセイ君！」

グレモリー眷属である木場が主から借り受けた代理承認カードを取り出し、プロモーションを許可する。

「王神いいいい!!」

「おっと」

と、英雄派の一人が帝へと向かってくる。新たに生み出した刀で受け止める。

「久し振りだな、アーサー」

「兄様！　ダーリンになにするんですか!？」

斬り掛かってきた眼鏡の男の名はアーサー・ペンドラゴン。騎士王アーサーの血を引き、選定の聖剣コールブランドを扱う男だ。

「いい加減に私達の間係を認めてくださいー!」

「認められるわけがないでしょうが!?　恋人ならまだしも体だけの関係で、しかもこいつは母上にも手を出したのですよ!」

「おい待て、手を出されたのは俺の方だぞ。てかシヨタコン多いのか、母親って」

夜這いしてきたのは向こうだというのに、何故怒られるのか理不尽な、と顔を顰める帝。

湖の乙女から剣を受け取った後、宿を探していた帝に声をかけ、家に泊め、部屋を訪れ「愛し合いましよう。今すぐに、命令です」と抱いてきたのは向こうなのに。

「兄様の相手は任せてくださいー!」

「おう、任せた」

と、流刃若火を取り出す帝。

曹操が槍から光線を放ち、帝が炎を放ち烈しく火が散る。

「フリード!!」

と、ジークフリードが現れた。そういえば、曹操って会談の場に居たじゃんと思いつく。その後色々ありすぎて皆忘れていて。

色々な事をしてた帝は素で忘れていた。

多分命や舞なら覚えていた。

「今日こそ返してもらおうぞ、僕のグラム!!」

「いいや。すまないが、それは無理だ。私は、この剣に相応しい人間になるともう決めた」

「……………見逃してやろうか?」

膝をつく曹操に、帝は尋ねる。

曹操は肩で息をしながら帝を睨んだ。

「まだまだ成長の余地はある。何より面白い。見逃してやってもいい

ぞ?」

「……………」

「なんだ? 英雄の名に泥でもつくか?」

「汚名など、後の成果で洗い流せるさ。それが出来るなら、だが……………ああしかし、シヴァに目をつけられるわけだ。いや、それは思い上がりだな。俺程度が、シヴァの尺度を知った気になるなど」

ククク、と笑う曹操。槍を伸ばすが、帝は流刃若火で受け止め、同時に発光。

攻撃ではない。その前兆があれば回避出来た。ただ眩しいだけの、攻撃力を一切持たないが故の溜めのない発光。

「侮るなよ。見逃されるのではなく、俺の意思で逃げる……………」
「言えれば格好がついたのだろうがね」

距離を取ろうとしたが、影から現れた蛇に捕えられた曹操は自虐するのように笑う。

「嗚呼、本当に。仕方がない……………見逃してもらおうとしよう」
「……………」

蛇が離れる。とはいえ、帝は兎も角他の者が見逃すはずもないだろうと周りを見る。赤龍帝も中々やる。ヴァーリは言わずもがな。

それに帝の部下の鬼に妖狐。他の幹部を連れてきても、恐らくは……………

「ところでお前の実験ってのは、面白いか?」

「さて。それは観客によるとしか言えないかな。ただ、我々のスポンサーとしては神を殺す槍や、手持ちのある毒の性能を見たいようだが」

「……………ほう」

興味深そうに呟き、チラリと英雄派の下っ端達を燃やす九尾の姉妹を見る帝。交渉する隙があるとするなら、そこか。

「九尾の姫の命は保証しよう」

「はは。命乞いか」

「汚名など後で洗い流せると、そういったが? 最終的に勝てば、歴史など歪められる」

「つまり、まだ勝つつもりがあるか？」

「さてね。見逃してほしいだけのハツタリの可能性もあるが」
「……………」

不意に酒吞童子と妲己の動きが一瞬だけ止まり、動きが僅かに鈍くなる。酒吞童子に至っては顔に不機嫌が浮かんでいた。

「じゃあ、生きてたら逃げていいぞ」

「——!!」

ボボツと流刃若火から溢れる炎の温度が変わる。

「万象一切灰燼と成せ」

次の瞬間、偽物の渡月橋が炎に包まれた。

「逃げ切ったか」

下っ端は死んだが、アーサーは咄嗟に空間を切り裂きジークフリードは魔剣のオーラで身を守り曹操は聖槍の輝きで身を包んだ。

イツセー達に配慮したうえで更に手加減したとは言え、並の戦士なら文字通り灰燼と化していただろうに。

「死ぬかと思ったね、実際」

「軽くいうなよ曹操。どうするつもりだ、あの化け物！」

「インドラ辺に泣き付けば、シヴァが目を付けた男だ。嬉々として戦ってくれるだろうが、まあ無理だな」

ジークフリードの言葉に肩を竦める曹操、自分が禁手を使おうと勝てないだろう。

あれが神器を通してではなく、神器を取り込み己の力とした者の強さ。

「じゃあ、どうするってんだ……………」

「一番無難なのは、この槍の真の力を解放出来るまで修行を積む。つまり、今回は逃げるべきだが……………そしたらまあ、殺されるだろうね、

彼に」

「ははは、と笑う曹操。

「逆に言えばやることさえやれば殺されない。あれはこちらをなめている。いや、正確に評価して下に見ている。何時でも殺せるから、面白そうなことをしている間は生かしていいとね」

「だからあつさり見逃した。」

「くそっ……………」

「何を悔しやがる必要がある？ 神の顔色をうかがっているのは、変わらないだろう。むしろ僥倖だ、死神などよりよほど扱いが難しい彼が、暫くは我々を捕らえる気がないのだからね」

「英雄として誇りはないのでですか？」

「そう尋ねるアーサーに、似たような質問をされるものと笑う曹操。」

「誇りなど、英雄になってから持てばいい。俺達は所詮テロリスト。勝利しない事には身の程知らずに神に挑んだと神話の一節に語られ、或いは語られもしない存在なのだからね」

「卑劣に、卑怯に、浅ましく英雄を目指そうじゃないか。英雄譚において卑劣な手段など、珍しくもないのだから」

「アーサーは、目を細め尋ねる。」

「曹操……………貴方は、本当に英雄と呼ばれたいのですか？」

「ああ、好き勝手生きてそう呼ばれたなら、面白いと思わないかい？」

救出作戦

帝が立て続けに人妻に手を出された理由

八坂↓神の気配を纏った子供。時代が時代なら神の名を騙る妖怪が生贄に捧げさせるような存在に、本能全開で襲いかかった。妹ができて喜んでいる九重も姉のマネをする九久も可愛い。

ペンドラゴン兄弟の母↓本物のエクスカリバーを湖の乙女から賜った美少年を見て子供を欲しいと思ったから。因みに独占欲が強いので、自由人な帝は近くに寄った時ぐらいしか相手しない。

八坂。

妖怪だからね、仕方ない。

人間を犯して食らうのは本能さ。勿論京の管理をする立場でありそういった本能は抑えていたけどシヴァに片目消し飛ばされ必死の転移で弱った極上の餌をみて本能に敗れた。

でも獣の本能として帝が自分より強いのをなんとなく察しており、支配されたい隠れM。

ペンドラゴン兄弟の母。

ルフェイに魔法を教えた魔女。とっても強く。エクスカリバーを隠していたのに帝を一目で所有者と看破した。

嫁入りした身であり、上流階級の繋がりによるもので愛はない結婚。帝に目をつけたのは人生を決められた意趣返しもあった。でもハマった。

体から始まる関係も悪くないと思っている。

魔女としては間違いなく最強。

私以外にも関係を持った女がいる？ 不要でしょう、今すぐ別れなさい。

ちなみにユースーとは何時でも別れられる準備をしている。

帝本人にモテる秘訣を効いた場合「顔」と即答する。

地獄の如きに業火に包まれた街から元の世界に戻る。

ヴァーリはロスヴァイセを回収しに言った。

「母上。母上は何もしてないのに、何で……………」

「……………」

敢えて逃がした帝は落ち込む九久達を撫でながらこちらを見てくる姐己の視線を軽く受け流す。一同は一先ずその場から離れる事にした。

「俺が戦ったゲオルクという男いわく、今夜二条城で実験とやらをするらしい」

と、ヴァーリからの情報に気を引き締めるグレモリー眷属とシトリ眷属とイリナ達。帝としては八坂の無事が保証された今実験の結果を待ってもいいと思っている。

曹操は身の程知らずにも神話に喧嘩を売ってるくせに、身の程を弁えている。

「身の程を知っている敵ほど厄介なものはない。簡単に誘い出せ無いわけだからね」

「うう、そして私はそんな敵を尻目に酔いつぶれて寝ていた駄目ヴァルキリー」

「ロスヴァイセ……………」

落ち込んでいるロスヴァイセの肩を優しく叩くヴァーリ。ロスヴァイセは涙目でヴァーリを見上げた。

「なら、今夜力を貸してくれ」

「……………はい」

ロスヴァイセは拳を握り立ち上がった。

不意に、帝の服の裾を九尾姉妹が引っ張った。期待や不安が混じった視線。帝はしゃがみ込む。

「安心しろ、八坂は絶対助けてやる」

そう言つて、二人の頭を撫でてやる。九重は自分も撫でてもらえると思わなかつたのか目を見開いて尻尾と耳をピンと立てた。

しかし直ぐにへニヨリと垂れ、頬を赤くして俯く。

「ありがとう、ちちうえ」

「あ、あの！　ありがとう、ごさいます……………ち、ちち……………つ……………父上！」

顔を上げ、叫び、直ぐにまた俯く。気恥ずかしさではなく、後悔だろう。

帝は再び九重の頭に手を置いた。

「まあクソ強いお父さんに任せろよ。俺個人より強い奴ならそれなりにいるが、俺と殺し合いで勝てるのはシヴァだけだ」

結局の所殺せればいいのなら、帝はシヴァ以外に負ける気はしない。シヴァはトラウマが邪魔して強さが測れず、だからこそより強い魔獣を作れないが、強さが測れるならそれ以上の強さを持つ魔獣を生み出せば良い。

「あやつらにも、勝てるのか？」

「勝つさ」

帝の言葉に、九重はコクリと頷いた。九久も安心させるよう九重に抱き着いた。その様子を眺めながら何処か眩しそうに目を逸らしたヴァーリが口を開いた。

「作戦を説明するぞ……………」

悪魔、墮天使の関係者、妖怪達が調べたところ現在二条城を中心に龍脈の力が集まっているとのこと。

京都は陰陽道、風水などを元に作られた術式都市。

陰陽の陽とは人間。陰は妖怪。そして、京都の妖怪の長である九尾は龍脈との繋がりも深い。

恐らく実験の下準備だろう。

そして、チーム分けはシトリー眷属はホテルの保護。グレモリー眷属達はヴァーリと共に二条城に向かう。

セラフォルーは京の周囲で暴れる英雄派の対処だ。連中、魔王を近付けさせないつもりらしい。セラフォルー的には別に無視しても良

いのだが、そうなれば人間に被害が出る。

悪魔は契約を重んじる。京に居る悪魔の契約者を守るために、面倒くさいが防衛に回ることになった。

「セラフオールが京に居ると情報が流され、旧魔王派も来ているしな」
残っているのは、確かシャルバ・ベルゼブブだ。

「魔獣達は、参加でいいんだな？」

「おう、イリナとゼノヴィア、フリードも貸してやるよ。アジアはヒーラーな」

そして、当然護衛の酒呑童子と妲己もついてくる。ヴァーリとしては過剰戦力な気がする。英雄派が哀れだ。

帝達の足止めらしい行動はないが、帝を止める方法など直接前に立ちふさがり通行に邪魔な小石になるしかあるまい。それがわからない馬鹿なのか、それを解った上で策があるのか……：或いは何か別の目的でもあるのか……。

「へえ、協力を打診されたって？」

アロハシャツを着た五分刈りのグラサン男が部下と電話しながら酒を飲んでいた。

「そつちの落ち度で俺様達との会談すつぽかして力を貸してくれたあ中々図太い奴等だ！」

ゲラゲラと楽しそうに笑う。

『手は貸さないと？』

「お優しい三大勢力の若造共は手を貸すだろうなあ。そしたら俺等の心象も最悪だな。ま、あの程度の獣共はどう思われようが知ったこっちゃねえが……：国が違うとは言えお前と同じ妖怪だろ？ 助けてやっても良いぜ」

それは部下をねぎらうわけでも、妖怪達を心配してるでもない。どうでも良いけど、じゃあそつちで、その程度の声の軽さだった。

「犯人は英雄派だったか？ H A H A、あのガキンチョが英雄を名乗るたなあ……：どんな心境の変化だ？ ついでに確かめてこいよ！」

『それは構いませんがねえ。儂もあの小僧にちよいと灸を据えたいところだ。何処との会談を邪魔したと思ってるんだ、ってな』

「手加減はしてやれよ?」

男の部下は、手加減していても英雄派の連中を叩き伏せるだろうが。そういえば部下の孫も同じ組織に居るのだったか。種族的に英雄派には居ないだろうが……………」

『ああ、それと……………三大勢力の他に王神帝が……………』

「シヴァが目をかけたガキか!」

男は思わず立ち上がった。その反応にむしろ部下は困惑した。

『ま、まあ確かに珍しい奴ですが、あんたが目をつけるほどですかい?』

そりゃ、強力な神殺しの獣を生み出すそうですが……………」

「目をつけるほどでもあるかって? 大有りだアホンダラ。あのシヴァだぞ? 俺の息子をボコして満足しやがったクソが、逃げられた後も探し続けた! それもまだ10にもなってなかったガキを!」

それがどれだけ異様な事か、解ってねえ猿だと毒づく。まあ、男が名を変えた後部下になった奴だし、シヴァを恐ろしいとは知っていても、どの程度かまで知らないのだろう。

『でしたら儂がどの程度だったか報告を……………』

「いやいい。連中には協力してやると伝えて、てめえは待機だ」

『は、待機?』

協力するのに?

「俺が行く」

そう言つて、男は、帝釈天は……………嘗てシヴァと同格の神としてインド神話に君臨し、仏教へと移った神は立ち上がる。

帝釈天。またの名をインドラ。暴風雨の化身。ゼウスに並ぶ最強格の雷神は雷鳴と共にその場から姿を消す。

ちなみに雷により部屋の電子機器は全部ぶっ壊れた。息子や息子の宿敵が出るオンラインゲームのデータを復元する方法を、彼は知らない。

帝の強さ。超越者クラスだが帝釈天とかシヴァよりは劣る。別に劣ったっていいんだ。彼は創造系なんだから。ただしシヴァ相手にはトラウマで弱体化する。

感想待ってます

謎の影使い

王神帝の異世界生活

ゼロ使

ルイズが系統魔法に目覚める代わりに虚無の魔法を使うエルフそっくりな魔獣の量産をする。理由？面白いから。

世界を救う可能性はジョゼフに託される！

オバロ

量産階層守護者を各国に配置。理由？楽しいから。

設定読む限り龍帝の魔法に精神支配されてる(ゲームを現実にする始原の魔法によるフレーバーテキスト通りの有り方)アインズには小石程度の興味しかわかない。

世界が混沌と化さないかは、ジルクニフとツアアの胃に託された！

異世スマ

世界の脅威！ フレイズ？それが脅威だと思っていた時が、俺にもありました。

世界の命運はロボット娘たちに託された！

問題児達が異世界

ペスト量産したりアルゴール量産したりサラマンドラとペストにガチャバめのゲーム強制したりとやりたい放題。黒兎の胃は死ぬ！ハイペスト、こっちのペストとどっちが強いかな勝負しようぜ！

世界の命運は………まあ何人か止められる奴いるな。

GATE自衛隊

異世界？ ああ、あそこは平和だったよ。

世界の命運は誰かに託される。

ありふれ

エーヒートー君、あーそーぼ！ 玩具お前な！

南雲はなんやかんや強くされる。地下に落ちて、てめえも敵になるならぶつ殺すとか言えば……………うん。

やったね光輝君、清水君、彼を倒せば、君は世界を救った勇者だ！
とりあえず南雲には胃薬あげてみよう。喜ぶよ。

「ああそうだ、兵藤一誠」

と、不意にヴァーリがイツセーを呼び止めた。何処か複雑そうな顔をして、イツセーの赤い宝玉を差し出した。

「先程、その……………唐突にロスヴァイセの胸が揉みたくってな」
「……………へ？」

「自責で己を殴ったら、出てきた。これからは、お前の気配がする」
『グル、ガアアア……………!!』

ドライグが反応した。宝玉の正体は、イツセーの可能性の塊。人に取り付き乳を揉みたいという衝動を植え付け、乳を揉むと新たな寄生先に飛ぶようだ。

「同時に妙な生き物もついていた。周囲の記憶を食らう生き物だ」
と、ヴァーリがヤツメウナギのような生き物を取り出す。これが痴漢騒ぎの記憶を喰らい、今まで騒ぎにさせなかったのだ。恐らく王神製。

解ってて黙ったのは、面白いことになると思ったからだろう。あれはそういう基準で動く。

『力は溜まっているようだな。しかし、ドライグ……………』
『グルオオオオ!!』

ドライグは理性を失っていた。悲しいことだが、カウンセラーを雇おうともそもそも会話にすらならない。

アルビオンは己の宿敵のあまりの惨状にヴァーリの中でそつと目を伏せた。

今回の攻撃側には匙も追加された。擬似的な竜王になれるからだ。特に、力を奪うという能力は拘束に向いている。

暴走の危険性に関しては龍の力を通してイツセーやヴァーリが抑える役目だ。

「ほれゼノヴィア、教会で改良されたエクステュランダルだ。袖白雪は返せ」

「ああ、うむ…………返さなきや駄目か？」

「まあ量産は簡単だし別にいいか」

と、帝は袖白雪の回収をやめた。

そして一同はバスで二条城に向かおうとバス停で待っていた。帝の両側に九尾姉妹がくっついており、母親を救うためについてくると言う。

まあ帝がいるのだから滅多なことはないだろう。と、その時…………ぬるりと霧が現れる。

「成る程、向こうから招待してくれるのか」

絶霧に飲まれ、転移したのは京都駅の地下ホーム。護衛の酒吞童子と姐己も何処かに転移させられた。まあ、どうでも良いが。

帝の影が広がり、熊のようなサイズの狐が生み出された。

「父上の能力か…………九久に似ておる」

「九久が俺に似てるんだよ。ほらほら、背中に乗れ」

と、九久と九重を狐の背中に乗せる帝。

「安心しろ。お前達は俺が守ってやる」

「う、うむ…………」

「うん、ちちうえ…………」

と、不意に帝が振り返ると英雄派の制服を着た男が現れた。

「ご機嫌よう。王神帝、俺を覚えてるか？」

「知らん。誰お前」

「……………そうだろうな。俺なんて、覚える価値もない雑魚だ。けど

な、あの時得た力で俺はあんたと戦える存在になった!!」

と、男の影が動き出す。否、男の影だけでなく周囲の影が男の影に吸い込まれるように蠢き、物理的な質量を持って影はその姿を変えていく。

「――バランスブレイク禁手化!!」

鳥、獅子、蛇、山羊……4匹の影で出来た獣。

ナイト・リフレクション 『闇夜の大盾』の禁手、『闇夜の合獣』。さあ、あの時の反撃をさせてもらうぜ!!」

と、影の獅子が襲いかかる。帝が蹴りを放つが、獅子は霧散して直ぐに復活し、牙を突き立てようとして、九久が咄嗟に放った炎に飲み込まれた。

同時に九重達の上に居た鳥の一部が輝き青い炎が放たれた。

「成る程、影が繋がってるのか」

巨大狐が尾で狐火を弾く。

「そうだ！　そして、あらゆる攻撃を受け流す！」

「あつそ」

と、羽が鋭いナイフのコウモリが男に向かうが、男に巻き付くように動いた影の蛇に飲まれ、帝に突進してきた山羊の体から放たれた。

「邪魔だな」

無数の棘が生えて影の獣達を貫いた。棘には無数の目玉がギョロギョロと動いているから、生き物なのだろう。

目玉が光って影を払う。

「まだだ！」

と、散らされた影が集まる。現れたのはヤギと獅子と鳥の3つの頭を持つ翼が生えたライオンの体、山羊の後ろ足、蛇の尾を持つ合成獣。『グルオオオオオ!!』

「あんたのような、無敵の獣を引き連れたいと思った！　俺の影は、ただの光にやられない!!」

「あつそ、じゃあ影は闇に飲まれろ」

次の瞬間、京都駅が地下から現れた巨大な影の顎に飲み込まれた。影の獣は闇に溶け、術者は闇に触れている間体が溶け崩れていく。

「おー、存外人の形が残ったな。感心感心」

「が、は……………」

全身から血を流し倒れる男。闇とは、光すら取り込む重力など。光も、光を反射するものも存在しない無だ。

無の空間に飲まれかけ存在が消えかけた男は、恐らく咄嗟に影の獣を纏って溶け崩れるまでの時間を稼いだ。

「行くぞ九重、九久」

「と、とどめを刺さないつもりか……………」

「え、ああ……………うくん、子供の教育に良くないかなって」

立ち上がろうとする自分の横を通り過ぎようとする帝に叫ぶ男だったが、帝は道端の実は生きてたセミを見つけたような目を向ける。

「ふざけるな、俺は、まだ……………曹操の為に……………」

「ああ、そう。頑張れよ」

帝はそれだけ言うと、もう振り返りもしなかった。九重は良いのだろうかと男を見る。九久は二条城の方向を見つめ、九重も今は母親を取り戻す事に集中する事にした。

「ちちうえ、けつきよくあのひと、だれ？」

「知らん。誰あれ」

帝の血筋

各々配置された刺客を倒し、二条城近くで合流した。

ロスヴァイセはまだ二日酔いが治ってないのに動いたからか吐いている。ヴァーリが背中を擦ってやっている。

「アーシア、無事だったか」

「は、はい。これでも、エクスカリバーの所有者ですから」

湖の乙女に返還された真なるエクスカリバー。そこに宿る騎士王の遺志に鍛えられているアーシアは、バランス・ブレイク 禁 手に目覚めたばかりの雑兵に負けはしない。

「僕が倒した刺客によると、曹操達は本丸御殿にいるらしいよ」

「へえ、お前の刺客はメツセンジャーか。当たりだな」

「父上が聞かなかったからだと思うのじゃ」

「おもうのじゃ」

というか全員わざわざ生かしたのか？ と敵がたまたま生きていただけの帝は思った。バランス・ブレイカー 禁 手を行えるらしいし、後で回収出来たら改造しよう。

などと考えていると門が開いたので本丸御殿を目指して進む。ここまで来て不意打ちはないだろうと堂々進む帝とその後についてくる一同。

バランス・ブレイカー 禁 手 使いの刺客を倒したか。俺達の中から下位から中堅の使い手でも、バランス・ブレイカー 禁 手 使いには変わりない。それを倒してしまうなんて、君達はまさに驚異的だね」

庭園に曹操が居た。他にも英雄派の面々が見受けられる。そして、虚ろな目をした着物姿の美女。

「母上！」

「ははうええ！」

「お、八坂」

彼女こそ八坂。京に住まう妖怪達の総大将。

九重と九久が呼びかけるが反応がない。

「おのれ、貴様等！ 母上に何をした！」

「言ったでしょう？ 少しばかり我々の実験に付き合ってもらおうだけですよ、九尾の姫君方」

と、曹操が槍の石突で地面を叩く。刹那……………

「うう、うああああああああ!!」

八坂が苦しみだし、気が膨れ上がる。

体が光り輝き、巨大化していく。やがて巨大な九尾の狐へと変化した八坂は月に向かって吠えた。

「曹操！ こんな偽物の京都まで作って、しかも九尾の大將まで操って、何をしようとしている!?!」

「グレートレッドを呼ぶ」

「……………ん?」

グレートレッドなら今頃俺の家のベッドで赤子と寝てるかと首を傾げる帝。

おそらく寝所に忍び込もうとしてるオフィスを蹴り飛ばしている時間帯だろう。

「あれ呼んでなにするんだ?」

「ウチのスポンサーが、グレートレッドやウロボロスを目障りに思っているらしくてね」

まあ次元の狭間に存在する最強のドラゴン達を邪魔に思う神々は多いだろう。オフィスの至っては神の名を冠する竜だ。日本の土地神的側面の竜神とは理由が違う。

この世界では龍こそが最強種族。そのトップともなれば主神達よりも強い。

「……………」

さて、その上で人に任せる神と言えは何処か。シヴァはないだろうな。オーディンも、まだまだ未知の多い神器が消し飛ばすようなことは避けるだろう。いや、別に主神とは限らないか。

などと考えているうちに他の面々が構えていた。

匙はグリゴリに植え付けてもらったヴリトラ系神器を一気に解放していた。

「……………ヴリトラ、悪いが力を貸してくれ。兵藤とヴァーリがフオ

ローしてくれるそうだからよ、今日は暴れられるぜ！」

匙の体から溢れ出した漆黒の炎は形を変えながら巨大な蛇を形作る。

『我が分身よ。獲物はどれだ？ あの聖槍か？ それとも狐か？ どれでも良いぞ。我は久方振りの現世で心地よいのだよ。どうせなら、眼前の者共全て我が黒き炎で燃やし尽くすのもよからうて』

蛇の名はヴリトラ。全ての神話や伝承を纏めるとするなら、炎から産まれた巨人の特性を持ったインドに置ける最初の蛇。水を堰き止めた干魃の化身。

嘗ては龍王の一角に座していた邪竜にして蛇竜。

「初手だ、喰らっておけ」

と、ゼノヴィアがデュランダルを振り下ろした。振り上げれば天に届く程の光の剣身が本丸御殿を消し飛ばし余波が光の津波となって後ろの建物も景色も吹き飛ばしていく。

「まあ効いてないが」

「む……………」

全てが消し飛んだ破壊跡。その土の中から曹操達が現れる。攻撃は防げて、その後の土砂に埋まったらしい。クソだせえ。

「ゲオルク」

「ああ……………」

ゲオルクと呼ばれた男は様々な魔法体系を合わせた魔法を発動する。

「どうやら彼は参加しないらしい。魔法発動中に動けないようだ。」

「ジャンヌ、ヘラクレス」

「はいはい」

「おう！」

と、大柄な男と金髪の女が出てくる。

「彼等は英雄ジャンヌ・ダルクとヘラクレスの意思……………魂を引き継いだ者達だ。ジークフリート、君は？」

「フリードだ」

「じゃあ私は元教会の戦士ちゃん達にしようかな。可愛い顔してるし」

「……………アーサーは……………あっちか」

少し離れた場所で酒吞童子と戦ってる気配がある。ルフエイの兄だし、死なないようにはしているだろう。多分。姐己は……………近くにはいる。帝の命令があれば動くつもりだろう。

「俺は、てめえだああ!!」

と、ヘラクレスがヴァーリに向かって飛び出した。

『Vanishing Dragon Balance Breaker!!』

『DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide!!』

ヘラクレスの拳がヴァーリの鎧にぶつかるとポスンと小さな爆発が起こり、ヘラクレスはヴァーリに殴り飛ばされた。

「ぐへえ!! てめえ!」

「……………頑丈だな」

だが、すでに触れている。

『DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide!!』

ヘラクレスは自重を支える力も無くなり倒れた。原初のヘラクレスならば神性を持ち白龍皇の力を防げたかもしれないが……………。

「神話では神になったが、実際は違ったのか」

帝は欠伸をしながら、イツセーと曹操の戦いを見る。八坂は巨大なドラゴンに変身した匙に抑えられている。

「ヴァーリ、お前こいつ等育てられてねえんじゃねえの」

禁手バランス・ブレイク化を発動した英雄派にやられたイツセー達。イツセーに至っては、相手の曹操は禁手バランス・ブレイカーを使ってもいない。

「その点ゼノヴィア達は良くやったぞ」

「二人がかりだけどね」

と、ゼノヴィアが肩を竦める。ジャンヌは炎の聖剣で冷気を防いでいたが、それではエクス・デュランダルを防げない。

禁手で生み出した聖剣のドラゴンが口から光線を放ったがイリナに打ち返された。

「……………聖書に転生ってあったっけ？」

膝をつくジャンヌを見ながら首を傾げる帝。フリードは禁手で腕が増えたジークフリートを一人で圧倒していた。

「あらら、さすが王神帝の影響を受けてる奴等は一筋縄じゃないか」

「よしイツセー、背骨をドライグに差し出して宝玉の力を使え」

と、帝がイツセーの宝玉に触れた。

すると眩い光が辺りを包み、無数の人の形を取る。

『おっばい…………』

『お、おっばい』

『おっばいーん』

『すごい、おっばい』

『大変なおっばい！』

『グギャルオオオオオオオオ!?』

ドライグが叫んだ。

「ドライグ!? 帝さん、これは一体!?!」

「イツセー、来るぞ」

イツセーの叫びを無視して帝が上を見上げると、おっばいおっばい
眩くおっばいゾンビ達が魔法陣になり、リアスが現れた。

着替え中だったのか上半身下着だ。

「ぶ、部長!?!」

「え? え? ここは、本丸御殿? イツセー、これは一体

……………」

「い、いや……………俺にも何がなんだか……………」

「イツセー、つけ」

「はい?。」

『そうよ、つきなさい』

と、イツセーの脳裏に女の声が響いた。箆手の中に眠る歴代赤龍帝達の残留思念の一人のエリシャだ。女性最強の赤龍帝は、残留思念になったあとも理性を保っているのだ。

『彼女のお乳をつつき、貴方の神器は進化するの』

リアスの胸が光りが出した。イツセーの進化の可能性に当てられ、リアスの胸も進化したらしい。訳が分からない。

でも面白いので帝はワクワク見守る。

イツセーはエリシャに促されるまま、リアスの胸をつついた。リアスは役目を終え消えた。

駒王町に帰ったのだろう。

『ウグギヤルアアア!! グゴゴゴ!? ガキヤアアア!!』

ドライグは発狂している!!

「ごめンドライグ、良くわからないけど俺の背骨をもらってくれ!」

イツセーの鎧の姿が変わる!

「よし、左腕寄せ」

「へ? うぎやあああ!!」

と、帝はイツセーの左腕を引きちぎった。嘗てイツセーがレーティングゲームでドライグに差し出した龍の腕だ。形だけは戻っても、それは変わらない。

更に帝が取り出したのは杯だ。

「お前の腕を媒介に魔獣を生み出し、この杯で魂を移す。出て来い、赤龍帝! ア・ドライグ・ゴッホ!!」

「グルオオオオオ!!」

その日、その時、赤龍帝は復活した。

「グルルル!!」

理性無き瞳をイツセーに向ける狂龍。帝はしかし魔獣を支配する力を以て怒りの矛先を変えさせる。

「焼き払え!!」

「グルオオオオ!!」

赤龍帝の口内に煌々と炎が輝き、イツセーは嘗て感じたこともない

ほどの莫大なエネルギーを感じ取る。今まさに、炎が放たれようとした、その瞬間だった……

「ああ？ 生意気にも、天の名を冠するクソトカゲじゃねえか！ なんだあ、復活したのか!? なら、くたばりやがれ!!」

極大の落雷がドライグに落ちた。復活したてで肉体と魂の繋がりが薄いドライグは、混乱していたのもあり意識を失った。

「……………あれ？」

赤龍帝に曹操以外の何もかも吹き飛ばさせるつもりだったのに、誰だあの五分刈りの神。

「っ！ ゲオルク!!」

「ああ、任せろ！」

「馬鹿、違う!!」

ゲオルクは匙を押さえつけていた八坂に新たな命令を飛ばす。それに対して曹操が叫ぶが、八坂は五分刈り男に向かい吠えた。

「ああん？ なんだよ、九尾か……………俺様達との会合すつぽかして何してるかと思えば、ヴリトラの出来損ないと遊んで、俺様に喧嘩売るつもりか？」

バチリと男の周りに雷が走る。

「!? 姐こ!!」

帝の叫びと同時に現れる、新たな九尾。八坂を押さえつけ、狐火と猛毒の壁を生み出す。

同時に響く轟音。雷速の神槍。

「グッ……………」

「へえ、中々やるじゃねえか。そっちの出来損ないより余っ程かつてのヴリトラに近いぜ、お前」

全身焼け焦げながらも息があり、八坂とついでに匙を守りきった姐己。八坂は今の余波で気絶し、彼女達の背後の偽りの京都は消し飛び時空の狭間が姿を表す。

『インドラアアアアアアア!!』

ヴリトラが叫ぶ。憎悪の咆哮にも、歓喜の叫びにも聞こえる声に対してインドラと呼ばれた男は何処か残念そうに目を細め、辺りを見回

す。

「お、いたいた。お前だな、王神帝!!」

「インドラ……………帝釈天か!」

「ああ、この俺様が直々に会いに来てやったぜ。おら、お前の力を見せてみる……………ん?」

「……………!?!」

インドラの視線が、帝の後ろに向けられた。帝も背後から感じた異質の気配に振り返る。

「……………く、九久?」

気配の発生源は、九久。ザワザワと毛が逆立ち、尻尾が揺れる。九重も何時もと違う九久に困惑している。

「カアアアアアアア!!」

「! 離れろ、九重!!」

帝が九重を担ぎ距離を取る。九久から放たれた神威が狐型の魔獣を跡形も無く消し飛ばした。

「あー? 神に、魔に、妖怪……………色々混じってんな。王神帝の子供か? おい、王龍^{ウーロン}、抑えつけとけ」

と、帝釈天の言葉と共に空間の歪から現れる東洋龍。龍王の一角だ。

『ええ、子供いじめんのはなあ……………』

面倒くさそうに言いながらも帝釈天が恐ろしいのか九久に迫る王龍。九重が叫ぼうとした瞬間、九久の尾が伸びた。

ただ伸びただけではない。姿を変えた……………変化だ。

変化した姿は、王龍とヴリトラ。

『……………はへ?』

姿だけではない。ヴリトラが放つ炎も、王龍が纏う闘気まで変化してみせた都合9匹の龍は王龍を押さえつけ爪で裂き、呪い炎で燃やす。

『うぎゃああああ!!? なんだコイツ、強えええええ!!?』

ジタバタ暴れてなんとか逃げる王龍。龍王の姿か、あれが?

『む……………!』

明らかに理性のない瞳で母に巻き付くヴリトラを睨む九久。その尾の一つが、雷に変わる。

「……………マジか」

帝釈天も思わず呟く。自分のものに遥かに劣るとは言え、感じる気配。自身の尾を神の雷に化けさせた。

「神の祖、悪魔の祖、そして狐の血か！ 中々おもしれえものを作るじゃねえか!! そっちの九尾より、余っ程おもしれえ!」

「カア!!」

帝釈天が笑い、九久が吠えた。雷の槍はヴリトラを吹き飛ばした。匙はギリギリ炎の中を移動して避けたようだが、ヴリトラの形をしていた炎は吹き飛び、偽京都の街も吹き飛んで先程同様次元の狭間を碎けた地面から覗かせている。

「流石俺の長女……………」

後でいなり寿司食わせてやろう、と帝は思った。

帝釈天

王神帝の異世界生活2

ダンまち

ベル君を強化しまくる。ダンジョンを遊び相手にして魔物とモンスターとの戦争を起こす。

世界の命運はヘステイアに託された！

このすば

バニルと気が合う。世界中にダンジョンを作る。

世界の命運はカズマに託された！

絶対に働きたくないダンジョンマスター

最強のダンジョンが生まれる。世界の命運はロクコに託された。

ダンジョン飯

ライオス達と食事する。世界の命運は最初からライオスにかかっている。

「ガアアアアアア!!」

九久が獣の如き咆哮を上げながら神雷の尾を振るう。威力はオリジナルに劣れど、下級の神なら消し飛ばし滅ぼすだけの力がある。

「だが、まだ荒い!!」

しかし、相手はそのオリジナル。ヴァジュラを振るい、雷を消し飛ばした。九久はギョロリとヴリトラの尾に目を向ける。

2つの尾は蛇の交尾の様に互いに巻き付く。

「……………ほお」

黒雷纏う龍が黒い雷を放つ。帝釈天が放った雷に触れた瞬間、呪炎が雷を飲み込み込み力を吸収しようとする。

「おもしろえ!!」

二発目の雷撃。更に力を増した雷は呪炎雷の吸収速度を打ち破り九久へ迫る。

「そこまで」

威力の落ちた雷を片腕で薙ぎ払う帝。そのまま九久の頭に手を置く。ビクンと震えた九久はそのまま気を失い、変化していた尾も元に戻る。

「なんだよ、もう終わりか? んじゃ、次はてめえだな!!」

「仮にも俺、一組織の長なんだが」

「奇遇だな、俺様もだ」

つまり、戦争になろうと構わない、と。その隙にテロや他の神話に狙われるかもしれないというのに、この神は…………。

「部下が可哀想で仕方ねえよ!」

「嘘つけクソガキ! てめえも楽しそうじゃねえか!!」

流刃若火の炎と帝釈天の雷がぶつかる。威力は、帝釈天が上。吹き飛ばされた帝は、燃え残っているヴリトラの呪炎に落ちる。

「ヴリトラ・レプリカ!」

『『グオオオオオ!!』』』

呪炎が渦巻き、現れたのは3体のヴリトラ。一匹一匹が出来損ないと称された匙のヴリトラ形態よりも遥かに格上。それでもオリジナルには劣る。

「ヴリトラを殺す者にこんな張りぼてとか、なめてんのか!」

「名前遊びが好きか? なら、これはどうだ?」

と、帝が創り出したのは巨大な赤い鳥。龍王達を遥かに超える強大な気配。

「インドラを滅ぼす者!!」

「ガルダか!!」

オリジナルはインドラの百倍強くなる力を持った対インドラ特化の神殺し。それを帝は一度見ている。

「ぐう!!」

鋼鉄の如き嘴が帝釈天に迫る。

帝釈天……インドラは悪神の類だ。軍神であり、雷神であり、宙を掻き回す嵐の化身で、女にだらしなく夫の居る女とも寝る。

その辺は帝と気が合いそうだ。
ちなみに妻は攫って凌辱してから結ばれた。

インド神話に置いて数多の怪物を打ち倒し、時に敗れるも最終的には返り咲いたりした神でありながら、英雄の側面を持つ………結構クズ。

だが帝釈天は善神である。

「あ？」

流石に百倍とは言わずとも、インドラに必ず勝るといふ特性を持つ神殺しの魔獣が正面から打ち破られた。

「悪いが俺は、帝釈天なんだよ!!」

「……………!!」

仏門に入り、天帝としての側面、善神の神聖を得た善悪二面の軍神が笑い雷を放つ。帝が手を前に向けると無数のクラゲが生まれ雷を吸収し、クラゲとは思えぬ素早い速度で帝釈天に接近し、自爆。

轟音と閃光が壊れかけの偽京都を奔り抜け。

音よりも速く接近した帝釈天を迎え撃つ帝。二人の武器がぶつかり合う衝撃がクラゲの自爆の音をかき消した。

「雑魚ばっかじゃつまんねえ！ てめえがこいよ、王神帝!!」

「っ！ これもシヴァのせいかな!？」

「ああそうだな！ あの野郎、俺の息子ボコして頑張ったで賞渡してそれつきり。そのシヴァが目をつけてんだ！」

シヴァは山岳民に化けてアルジュナをボコして、命乞いしたアルジュナに対して大した武勇だったと褒めパーシユパタを渡したと言う逸話がある。

インドでも特に規格外な半神の英雄一人にそれなのだ。一方的に打ち破り、しかも逃げた相手をその後暫く探していたなどシヴァを知る神々の目に止まらないわけがない。

「見せてみる、王神帝!!」

「アホか、俺は魔獣使いだぞ」

そう言いながら無数の魔獣を生み出し、周囲を確認。他の皆は、無事避難し終えた。英雄派も何時の間にか消えていた。

「残火の太刀………残日獄衣」

「お!？」

放たれる熱気で、帝が着地していたビルが一瞬で溶けた。

炎を纏った帝が帝釈天に迫り、ヴァジュラと打ち合う。黒く焼け焦げた刀身から伝わる熱が神の身を焼く。

「この、炎は!!」

「創造系神器で一番必要なのは、想像力だ。そして、イメージに必要なのは実感だ。山を超えるイメージなくして、山を超える巨軀は生み出せない」

これは超えられるという実感、それを持って初めて魔獣はその性能を持つ。故にこそシヴァに勝てぬのだが、恐怖というイメージもまた想像力を掻き立てる。

「シヴァの炎か!」

「真似事だがな」

付喪神系魔獣最強の流刃若火。炎熱系………そのイメージは、シヴァのトラウマから来ている。

「おもしれえ! おもしれえぞ王神帝!! つまり、それが最強の攻撃力ってことだな! 全力で、正面から叩き潰してやる!」

「アホか。何で俺がそんなことしなきゃならねえんだ」

べえ、と舌を出す帝。シヴァの炎に気を取られた帝釈天は、背後から接近する魔神に気付かなかった。

「サンモーハナ」

情欲の矢が帝釈天を撃ち抜いた。

「良くやったカーマ」

カーマを召喚した帝はふう、と息を吐く。

シヴァですら原因を滅ぼすことで対処したカーマティーヴァの弓だ、元々女にだらしない帝釈天では耐えられまい。

「どうしますか？ このまま此奴の神話でも攻め滅ぼさせますか？」

「あほか。俺達はテロリストじゃねえんだぞ」

勝利を確信した。だから、二人共油断していた。

最初にそれに気づいたのは、帝。自分の力を過信したカーマは反応が遅れた。

「はっはあー！」

虚ろだった瞳に再び光を灯し、獰猛な笑みを浮かべた帝釈天。帝は咄嗟にカーマを盾にした。

「は!? え!? あ、あああああ!?」

帝釈天の雷を喰らい激痛から叫ぶカーマ。幸か不幸か、頑丈に作られているので気にはしない。

「こ、こいつ平気で女を盾にいいい!? 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!」

「ふう、危うく死ぬところだったぜ」

倒れたカーマを無視してホッと息を吐く帝。だが、脅威は去っていない。帝釈天は再び帝を認識している。

「……………カーマは俺より強いぞ? それをやるお前と戦う気なんてわかねえんだがな」

「嘘ついてんじゃねえよ王神帝! お前も男なら、強さを手に入れたならひけらかしてえだろ!? 自分が最強だって、証明してえだろろうが!!」

「……………」

その言葉に、帝は僅かに肩を震わせる。だが、炎は消えていく。帝釈天は苛立ったように舌打ちしたが、しかし直ぐに刀身に貯まる熱に気付く。

「……………一発だけだ」

「そうこなくちやなあ!!」

「うぐぐ、付き合ってられません……………」

痺れる体を引きずりながら転移するカーマ。残されたのは、炎と雷の破壊の化身達。

「ヴァジュラ!!」

「天地灰尽」

既に崩壊寸前だった偽京都は、その余波で完全に消し飛んだ。